

---

# phantom honeymoon

雨宮 だりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

phantom honeymoon

### 【Nコード】

N8781G

### 【作者名】

雨宮 だりあ

### 【あらすじ】

幼馴染みのユウとカオルの結婚騒動記。無鉄砲のユウが苦肉の策で考え出した新婚旅行のゲット方法とは？「family」の、約1年後の物語です。シリーズは前3作品続いています。今作をタテ書きポイントとして仕切り直しています。初めて読んで頂いても難はないと思われます。至って真人間のカオル、ゲイカップルであるユウの次兄シンとユキのその後と過去話、裏稼業を辞めて暇人と化した鬼畜系の長兄レンのお節介、マイペースなその妻子…いろいろ満点に詰め込んでます

「新婚旅行はどこがいい？海外だよな、折角なら」

「旅行なんて、いいよ」

「とりあえず、だよ！聞くだけ！行ってみたいところ、言ってみるよ」

「うーん…モン・サン・ミッシェルなら、いつか行ってみたいと思つてたけど…」

「何それ、何県だ？」

「県って…フランスだよ。自分で海外って言った癖に…」

「フランス！いいな、よしわかった！」

乗せられて述べた希望が、後の騒動の種になることとなり、そこはかとなく後悔することとなる。

真田カオルは大学の卒業直後。幼馴染みである天城ユウとの結婚式は半年後に迫っていた。当初は卒業と同時に結婚という話だったが、実際はカオルの卒論云々で手が回らず、双方納得済みで秋にずれ込ませた。

結婚式とはいっても難しいことはしない。親族だけ呼んで質素に式を挙げ、親友のジュンとアキが幹事でパーティーを開いてもらうことになっている。

親族同士はまた会食の機会を作るつもりだが、正直今は、そこまです頭が回らない状態。バイトの延長で、ユウの次兄であるシンのフアッションブランドに就職したはいいものの、直接の上司・植草の期待は増す一方、覚えることも格段に増えたのだ。

ユウはユウで、ジュンとのバンド活動はまだまだ花が咲かないが、食い扶持稼ぎのつもりだったモデルの仕事が波に乗っていた。フアッション業界を描いた深夜ドラマに声が掛かり、端役とはいえ初体験に一杯一杯だった。億尾にも出さないが、努力もプレッシャーも相当な筈。せめてこの仕事が一区切り着くまでは結婚式の相談がで

きないと判断し、結果的にカオルが背負い込むことになっていた。

教会は押さえたし、ドレスはシンの好意にお任せ。パーティーはレストランだけ希望を出し、内容はまた親友カップルのジュンとアキにお任せ。…の筈だったのに、どうしてこんなに考えることがあるのだろうか？

ドレスはお任せといっても、何の希望も出さず打ち合わせず、という訳にはいかない。パーティーにしても、内容はお任せしたところで、招待人数は？連絡先は？招待状のデザインは？…眩暈がしそうだ。

実際には、まだ具体的に大したことは打ち合わせていない。きつとソワソワ浮き足立って焦っているだけ。そう理解していても、気ばかり焦るのはどうしようもない。

こんな時、ユウが気楽に「いいじゃん。じゃあそれで。こつち？そんなのいいよ」と適当にフィーリングで決めてくれると助かるのに…

意外と、あのシンプルな決断力は侮れないのだ。

カオルは全然タイプが違う。実質的で事務的なことは即座に計算して答えを出せるが、美的センスや感覚を要求されると、自信の無さから異常に考え込んでしまう。

デザインのプロであるシンを相手に「どっちがいい？」などと訊かれてしまうと、簡単に一晩は考え込み、拳句の果てに八十を越した祖父の重三にまで意見を求めて悩ませる。しかも、返事はまったくと言っていいほど参考にならないと知っているのに。

堅実で真面目過ぎる性格が、結婚式関係に於いては完全に仇になっていた。

今朝は出勤後、植草にくつついて外回りの準備に追われていた。

「資料は揃ってるね。デザイン画とサンプルは？」

「こつちに」

「出し易いように、一緒にしときな！」

「はい」

大きなデザインコンペへの参加打ち合わせを前に、植草も気合い十分だった。余程のトラブルでもない限り「気合いが入る」から「ピリピリする」に移行しないところが助かる上司だ。セミロングの髪をグルリと捻ってバレッタで手早く留め直した植草は、シヨルダ―バッグを肩に引っ掛けた。

縫製工場からのちよつとしたトラブルの連絡があり、思いの外時間を取られてしまっていた。まだ十分間に合うが、できるだけ早めに着いておきたいので焦り気味だ。

「あ、いた。外回り？カオルちゃんも？」

事務所に顔を出したシンが、少しガツカリした顔になった。

「連れて行きますよ。どうしました？」

植草はカオルが渡した資料をテキパキ最終チェックする手を止めず、トンと紙を揃えて茶封筒に入れた。呑気な上に頑固な社長へ、まともに対応している暇などない。

「うん、彼女のドレス、そろそろ決定しようかなって。採寸もしたかったし」

カオルも初めての営業に緊張気味で、バッグの中身を確認して髪を撫で付けた。

「シンさん、それ、勤務と関係ないですから。今日、帰りにアトリエ寄りますね！」

「ちよつと待つて」

今にも駆け出したい場面だというのに、シンは鷹揚に呼び止め、カオルの頭から爪先までをチェックした。

アトリエでも事務所でも、仕事の時は他のスタッフ同様ラフでいい。でも外回りだけはSHINEの営業として相応しい物を身に付けて欲しい。一緒に選ぶ暇は見付からないが、機会があったら適当に見繕うよう、植草に頼んでおいたのだ。

おろしたてのグレー地のスーツは、プレタポルテから選んだ割に

はサイズがピッタリで、ミントグリーンのカッターシャツも顔色を明るく映す。長年アパレルで働く植草らしく、彼女に似合う色と形を的確に選んでいた。

ただ、惜しむらくは…

彼はジリジリしている植草には構わず、奥の棚から太めのリボンを漁り、スーツと同じ色味のリボンを長く切ってきた。

身構えて固まるカオルの襟首に手を回し、第一ボタンで綺麗に蝶になるように結び、端を揃えて斜めにカットした。

「ちよつと、胸元が寂しかったね。緊急措置だけど、ギムナジウムみたいで可愛いよ」

「ギム…？」

「カオルちゃん！行くわよ！」

ノンビリマイペースに引き込まれそうになったカオルを植草が急かし、「ありがとうございます！」とだけ言い置いてバタバタと出て行った。エレベーターを待つ時間も惜しいらしく、階段を駆け下りる足音が遠のいていく。

「大変だなあ」

ぼつねんと残され、他人事のように見送るシンだった。

そっか：カオルちゃんの採寸と勤務は関係なかったんだ。僕、社長の筈なのに：そういうことはすぐに忘れてしまっ、悪い癖だなあ。ふっつと溜息を漏らし、シンはその後、たかるように集まるスタッフの「仕事」の話に対応を迫られた。

恐ろしいほどにデザインを生み出し、こだわりも人一倍強い癖に、会社としての機能には完全に大雑把なシン。事務所に来たタイミン  
グを、有能なスタッフが見逃すことはあり得なかった。

「先生、こつちの色指定が曖昧です。サンプル見てください」

「先生、PV用のオーダーメイド、もう上がってますか？」

「試作品、見てくださいね」

あー、もう。わかってるってば。

最近ようやく、スイッチを無理にでも入れれば、それなりに指示を出せるようになってきた。曲がりなりにも自覚と自信が出てきたのだ。

社員はびっくりするほど有能揃い。強情や我儘に付き合ってくれるスタッフに甘えさせてもらわなければ、仕事としては成り立たない服飾オタクのできあがりということ。だからこそ、彼らをできるだけ困らせないように働かねばならない。

自分はなかなか社長らしくはなれそうにない。でも、せめて最低限デザイナーらしくしなきゃいけない。多分きつとそういうこと。

「お前がここの頭なんだからな」

冷徹なレンの言葉が、常に恐れをはらんで念頭に居据わっていた。兄にしては、いい言葉だ。

「先生、なるはやでこつちのデザインチェックお願いします」

その兄の無茶苦茶な注文から、子供服にまで仕事の範囲を広げました。

緊迫感を持って声を掛けたのは、上園翠。仕事の総量を見ると、

KIDSに関してはどう考えてもシンの容量を超えている。古傷の後遺症と過労ですつと体調を崩していることもあり、思い切つて、子供服の新展開には彼女に頭になってもらったのだ。

もちろんすべてのデザインには目を通し、自分が納得したものしか商品にはしない。その過程抜きに「SHINE/KIDS」のタグは付けさせることができないのは当然だ。

翠の重圧は誰もが知るところ。切羽詰まった声色に他のスタッフは一度引き、シンは彼女のデザインと布サンプルを束で受け取った。「チェック、お願いします」

パラパラと、入念に一枚一枚見入る。

彼が何気なく口に手を当てただけ、髪を耳に掛けるだけでも、翠はビクッ過剰に反応していた。緊張感が空気を震わせている。

かっちりしたワンピースでシンの手が止まる。クリップと一緒にされた三色の布を確かめた。

「これ、ちよつとやり直しましょう。お受験ファッションは悪くないけど、これなら四分の一の値段で、通販で買ってしまう。布はいね。でも、もっとハイウエストの方が可愛い」

返却され、考え込んだ様子。つい、シンまで一緒に慌ててしまう。「あ、でも、 트레이ショナルが悪いんじゃないからね。SHINEの傾向とは少し違うかなって。ああ、いや、それでも翠さんらしいならいいんだけど、それともちよつと離れてるから」

こういうグダグダのフォローが悪いんだ、と恋人の渡幸範 ユキにも指摘されてしまうとところだ。でも、支えてくれるスタッフにプレッシャーを与えて平気でいるなんて、きつと一生、慣れることがないだろう。

「大丈夫です。今っぽくないかとは薄々思っていましたから。また考えます」

「あとこつちの七分袖は、少し物足りないかな。刺繍じゃなくて、ラインストーンならどう？」

「いいと思います。明日までに選んでおきます」

「ポケットの中央にギャザー寄せると、もつといいかも」  
「はい」

翠は必死でメモし、頭の中で注意点を直すとどンドン「SHINE」らしくなっていくことに、いつもながら驚嘆していた。シン「SHINE」なのだから当然と言えば当然だが、他人のデザインの隅々を見て的確に指示を出すという点に、シンの新しい面を発見していた。

そして、注文を付けさせないとバツチリ符号するものがデザインできない、もどかしさ…

仕方ない。これは自分のブランドじゃないし、実力が違う。吸収することなら山ほどある。大量のイメージ群を盗んで盗んで、いくつか文句の一つもなくデザインできるようになってやろう。

無理にエンジンを吹かし、キリキリと迫るプレッシャーを撥ね退けようと、必死な翠だった。

他にも幾つか注文を付け、シンは喋り疲れてアトリエに戻った。

ブロック違いの、簡素なマンションの一室。遮光カーテンで外界と隔て、新たに加わった幼児ボデイのトルソーを前に座った。

あんなに注文を付けられて、彼女は大丈夫なのだろうか？

デザインも服飾もみっちり勉強したが、師匠に付いて修行することなくブランドを立ち上げた自分には、彼女の立場や思考は想像しきれなかった。申し訳ない気がするが、否定したつもりはないし、こだわりを捨ててまですべてを委ねることはできない。

たくさん売れる洋服を作るうなどという大それた野望はない。ただ好きな物を創るだけ。だからこそ、好きではないデザインにSHINEと名乗らせたくはないのだ。

人間としての自信無さと、デザイナーとしてのプライド高さが、常にアンバランスに同居している。こんな社長、自分でもどうかと思う。

考えても仕方ない、とまた溜息を放ち、カオルのためのデザイン

に頭を戻した。真っ白い画用紙を前に、ぼんやりと考え込む。

兄の挙式の際、その妻である弥生の時のドレスは、ゴシック調で思い切り古風なものにした。純白ではなく重厚なクリーム系で、マタニティを恥じることなく目立たせず、一切締め付けずに綺麗なラインを描くことに執心した、珠玉のデザインだった。

弥生は独りきりで嫁入りし、身内も友人も唯一人として出席しなかったが、天城家の出席者数は大変なものだった。親族一同、医師であるレンの仕事関係、何より大病院の院長である父親関係の出席者が揃い踏みする、豪華な披露宴。

ホテルの式場は格式高く重い雰囲気、すべての要素がドレスと合っていたという自信がある。実際その後、出席した重鎮の孫娘や姪といったセレブから、オーダーメイドウェディングドレスの注文が何点も入ったのだ。あらゆる意味で大成功と言っていいたいだろう。

一方、カオルはまだ二十二歳の若い女の子だ。しかし顔や年齢に似つかわしくない落着きがあり、派手なことには委縮してしまうらしい。彼女の落ち着きに合わせてシンプルにいかがか、自分の思うままに若々しく創り、似合う自分を新発見してもらうか迷いどころだった。

ボデイラインを考慮しないとイメージも湧かないというのに、他の仕事でいっぱいいっぱいになり、なかなか採寸の時間が取れていない。今日は是非とも採寸を済ませ、ラフな候補から彼女のイメージを引き出し、方向性だけでも決めたいところだ。

完全に、仕事抜き。兄の結婚でもそうだったが、デザイン料はもちろん、材料費も一切貰うつもりがない。

ということは、社長の立場でスタッフに採寸や製作を指示することができないということの意味していた。自由な形態で働いているので、さっきのようについ勘違いをしてしまうこともあるが、会社のスタッフを巻き込まないという前提条件は守るべきだと理解している。

兄の時にも使った裏技ならあった。狡いようだが、製作の間は下

っ端のスタッフを退勤後アトリエに呼び、ご馳走と内緒の報酬で手  
伝ってもらうのだ。

とにもかくにも、採寸しなければ話にならない。

カオルちゃん、早く来ないかなあ。

結局そちらも諦めて仕事用のファイルを開き、今が旬の歌姫の写  
真を取り出した。

歌は哀しいラブバラード。プロモーションビデオで使うことにな  
る煌びやかな衣装の注文を受けていた。歌謡祭やコンサートでは、  
そのドレスを着て歌うこともあるだろう。

歌詞カードを開き、PVの監督と打ち合わせた際の、イメージと  
なるキーワード群のメモも見直す。

蝶、妖精、鱗粉、曇天、雫…

デモも聴いたが、正直歌のことはよくわからない。旬の歌姫も、  
顔すら知らなかった。…と言ったら、弥生が仰天していたほどの、  
どうやら有名人らしい。

歌詞が頭に浸透するまで読み返し、薄暗い部屋で瞑想し、まとま  
ったところでスケッチブックを開いたら、あとは早いものだった。

頭の中で、流星が尾をひく。

閃きは一瞬で、色や素材を運んでくる。

今までの経験や知識と新しいアイデアが、色鉛筆の先から迸る。  
時間を忘れ、カオルのことも忘れ、作業に没頭していた。

## SOMETHING OLD 2 (後書き)

今更ですが：アパレル業界とか、よくわからずに書いています。何種類かのマンガでの知識を基本にしてます。専門の方が読んだら「甚だしく違うだろっ！」と思われる部分があるかと思われます。

ここで説明することでもないのですが、シンは専門学校卒業と共に植草（元アパレルの大企業の営業）に才能を惚れ込まれ、半ば強引に起業させられています。植草は辞職してまで尽力しているお人です。彼女がいなければSHINEはなく、シンにとつては恩人です。まあ、そんなこんなでオリジナリティ溢れる、アットホームな会社なんだなあ、だからあり得ない営業形態なんだなあ、くらいに捏造をお許しくださいませ。

夕方までに三枚候補を描き、シンはドレス用の限りない布見本とにらめっこしていた。遮光カーテンの隙間からの光が弱くなり、気がつけばもう夜になっている。

目が疲れ、仕上がったものをファイルにしまった。途中で休憩用に淹れた紅茶が、飲む気を失うほどに不味くなっている。

玄関チャイムが鳴ったが、基本的に無視。スタッフならば勝手に入ってくるし、都合で鍵がない時は、大きくノックして声を掛けるだろう。ガチャガチャと鍵を開けられて、初めて顔を上げた。極度の集中で、予定も何もかも抜けていた。

「こんばんは、いますか？」

カオルが息を切らせて入ってきた。時計を見ると、いつもの退勤時刻を過ぎている。打ち合わせが長引いたのかもしれない。上気した頬を赤くさせ、自分のスペースであるデスクチェアに荷物を置いた。

「ああ、ドレスだね」

眉間を揉み解し、床の隅から彼女用のファイルを探り当てた。

「惨状ですねえ」

夢中になると、いつもそう。我に返って見渡せば、リビング中にボツの破った紙、各メーカーのサンプル表、色鉛筆などが散乱していた。

「ごめん、片付けるね。待ってて」

「いいですよ。少し休んでください」

すぐにゴミ袋を広げ、紙屑を片っ端からかき集めた。手際よくサンプル表をケースに戻し、リボンやレースも棚に分ける。

その間にシンは色鉛筆を色ごとに仕分けながら缶に立て、芯の尖っていないものは丁寧にカッターで削っていた。大きなことにはこだわらないし、散らかっても気にならないが、三つの缶に入る色鉛

筆を間違えるのも、円い芯のまま戻すのも大嫌いだった。

カオルは冷たい紅茶が目に入り、合間に湯を沸かしていた。片付く頃と同時に、シンの前に淹れたてのアッサムティーを差し出す。

「ありがとう。魔法みたいだね」

「魔法みたいなのは、シンさんの方ですよ。歌姫さんのドレス、凄いいじゃないですか。今日一日で？」

「まあ、打ち合わせの時から、ある程度のイメージは考えてあったから。それより、決まらないのはカオルちゃんのドレスだよ。早速採寸しよう」

さつと立ち上がり、裁縫用の道具ケースから、メジャーと黒い布を取り出した。

採寸？て、ここで？

ユウが事務所の奥で、裸体を曝して採寸されていた光景を思い出し、凍りついた。彼の趣味嗜好が女性には向いていないと知っていても、当然ながら抵抗がある。

「全部脱いで、これ羽織って。…あ、困ったな。嫌？誰か呼ぼうか」  
彼女が身を竦めたことに気付き、頭に手を遣った。特に仕事モードだと、男女の違いなど忘れてしまう気の利かなさに、ようやく気付いた。

女性スタッフを呼ぼうと電話に向かうが、カオルがその前に呼び止めた。

「いえ、大丈夫です。それ羽織っていいんですもんね。仕事以外でスタッフ呼んだら、私の方が気を遣いますから」

「そう？じゃあ、とりあえず外すから、できたら呼んでね」

長めに伸びかけた横髪をかきあげ、彼は紅茶を片手に奥の部屋へ入った。何をしてもなく美術書を眺め、待っていた。

カオルは急いで下着になり、頭だけ抜ける穴のある布を被った。躊躇しながら下着も外し、畳んだ洋服の間に隠す。

恥ずかしさを捨てないと、逆に気まづくなってしまうそうだ。一応、ユウのように裸体を見せる訳じゃないと知り、なんとか決行で

きそうだった。無理して明るく声を張り、シンを呼ぶ。彼は採寸表を片手に、チキチキと音を立ててメジャーを伸ばした。

「後ろ向いて。楽にしてね」

薄手の布越しに、メジャーの紐が押さえられる。肩幅をぴったりと指で支え、メモを取る鉛筆の音が聞こえる。

秋の拳式。半袖とは限らないし、長い手袋も要る。身丈、腰下、股下、腕の長さや手首から指先までも採寸を進める。

触れるのは最低限に、的確に声を掛けながら進める、完全に仕事モードのプロの指先。それでもガチガチに緊張してしまっているのは、確実に伝わっていた。そして彼女が申し訳なく思っていることも。

下手にフオローするよりも、とにかく素早く終えてあげよう。

「おしまい。ありがとう」

「いえ、こちらこそ」

カオルはそつと会釈して、着替えの脇にしゃがみ込んだ。安堵なのか項垂れているのか、背中が深く上下した。

旬の歌姫のデザインを手掛ける、旬のデザイナー。今をときめくアーティストにドレスを作って貰う実感が迫り、喜びと気後れが半分、採寸ごときで苦労させていることへの自己嫌悪が半分。

シンは気楽な口調で洋服を着るように言い、採寸表を持って引っ込んだ。

ブラウスのボタンを嵌め、貰ったばかりのスタイリッシュな新品のスーツを着、リボンもできるだけ元通りになるよう結んでみた。

シンは部屋に戻ると、カオルの体型と採寸表を見比べ、画用紙にうつすらと人間の身体を描いた。

「印象よりは撫で肩なのかな。脚は真つ直ぐ綺麗だ。…Aラインも候補に入れていたけど、やっぱりやめよう。もう少し…うん、こっちも…」

サラサラと鉛筆を動かす。仕事モードの真顔が解かれ、瞳が生き生きと光っていた。

「前から思っていたけど、カオルちゃんはデコルテがすつとしていて、いいんだ、うん」

前からとはいつから？と思うが、こういう人種は、きっと観察癖があるのだ。褒め言葉も褒めるためではなく、デザインのための冷静な判断。

嬉しいのは言葉ではなく、突然シンの鉛筆が動き出して、もう自分は全部任せて傍観していればいいという安心感によるものだった。肩は覆わず、脇の一点でつながった袖が下がり、肘で大きくスリットが入っていた。隙間からはレースが覗いている。全体的にはマーメイドのラインだが、左側はかなり上部からスリットが入り、膝どころか膝上十センチくらいは見えてしまっただった。そのスリットから下は長いトレーンに移行して流れていく。

「カオルちゃん、ハイヒールはどのくらいいいける？」

「いつもローヒールなんですけど…ブーツなら、八センチのが一足あったかな」

「じゃあ、十センチを想定しておくね。頑張つて」

すんなりやんわり、きつい注文が飛び出した。

仕方ない。ユウとは身長が二十センチ以上開いているのだ。覚悟しよう…

シンは諦め顔のカオルに目もくれず、熱中してラフ画を描いていた。

またしても、紅茶が冷めている。

この人、年間でどれだけの紅茶を飲まずに捨ててるんだろう。一日二杯、五百ccとして、二日で一リットル、年間三百日働いたとして、百五十リットル…くらい？

初めての外回り、歩き回った疲労、採寸の緊張…思わずぼーっとし、紅茶の河に流されそうになっていた。

「どう？露出は激しくないし、バランスいいと思うんだけど」

はっと現実に戻り、出来上がったデザインに目を寄せる。

大まかな輪郭ではスリットが厳しいと思っていたが、細いライン

で後から描き込まれた、下からはみ出るレースの束が厚くて安心できた。

「素敵：ドレス負け、しそうです」

シンの、大きくて包み込むような笑顔。

「僕のベスト。絶対に似合う。これは、カオルちゃんだけのためのドレスだよ。…僕のこと、信頼してもらえる？」

シンにとっても、散乱していたバラバラなイメージが急にまとまり、ジグソーパズルが完成した時のような達成感を感じていた。大人過ぎず、子供過ぎず、地味過ぎず、派手過ぎず。望んでいた地点に立つことができている。

スランプなど滅多にないが、このドレスに関してはイメージを拾うまでに時間がかかった。そういう点では苦労したと思えるし、デザイン通りの物に仕上がれば、苦労の分だけいい物ができると信じている。

自然と、右手を差し出していた。カオルも思わず、迷いなく握っていた。彼が触れられるのは、基本的に身内のみ。身内にカウントされていることに改めて気付き、カオルはデザインができたこと以上の嬉しさで赤くなった。

玄関チャイムが鳴り、すかさずドンドンと拳の音がした。

「シン兄、カオル、いる？」

ユウだ。カオルがいそいそと鍵を開け、迎え入れる。

「あー、いた。植草さんがこっちだろって言うから、来てみたんだ」

嬉しそうに、息を弾ませている。髪をクシャツと撫で付ける仕草は、妙にテンションが上がっている時の癖だ。

「どうしたの？今日、泊まりに行くって言ってあったよね？」

深夜ドラマの収録は、出番の分が昨日クランクアップし、ようやく連休が取れることになった。明日はカオルも休みなので、アトリエに来る必要などない筈なのだ。

「違う違う、シン兄にも用事。相談ごとなんだ」

がつつと脱ぎ捨てたスニーカーを無意識に揃えてやり、後に付いてリビングに戻った。

「シン兄、俺たちの新婚旅行のために、一肌脱いでくれ！」

「ちよつと、いきなり何言ってるの？」

「いいよ。何？」

戸惑うどころか嬉しそうに即答するシン。何が何だかわからないが、ユウがこんなに全面的に頼ってくるのは初めてな気がする。内容なんて、ある意味どうでもいい。僕にしかできないことじゃなきゃ、きつと頼みになんて来ない弟なのだから。

「つつか、ユキ兄にも頼みたいんだ」

兄のパートナーである幸範のことを、いつの間にか兄が一人増えたように呼ぶようになっていた。本来は姉しかいない本人も満更でなく、弟ができたと喜んでいた。

シンは考えもせず、カオルのドレスのレースを、ラフ画に丁寧に描き込もうとしていた。

「うん、いいよ。ユキも大丈夫だよ」

「シンさん、返事軽い！もつと慎重に！ユキにも確認しなきゃ」

ふいと顔を上げ、スケッチブックから外した絵を、ファイルに挟み込んだ。

「二人とも、明日は休みなら、夕飯食べにくれれば？ユキが今日はお鍋だつて言つてたから、人数が増えると喜ぶよ」

鍋：新緑の季節にどうかと思うが、ユキの料理の腕前は確かだ。

二人は顔を見合わせ、結局付いていくことにした。

扉の前に立つただけで、中から元気な犬の鳴き声が出た。シンキチだ。

シンが鍵を開けて入ると、ちょうど靴の整理をしていたユキが迎える。

「おかえり」

無遠慮に後頭部を捕まえて抱き寄せる。自然な動きで唇を寄せる直前、シンが顔を手で防ぐのが間に合った。

「ユキ、後ろ」

続いて入れず、赤面で俯く二人にようやく気づき、照れるでもなく身を離れた。

「おう、いらっしやい」

「あー、ども」

モゴモゴと挨拶し、気まずく入室するユウとカオル。余りにユキが堂々としているので、恥ずかしがる自分たちの方が変なのではないかと錯覚させられる。

シンとユキの関係は、普段は空気のように自然な存在だし、男同士なのにとても似合いだ。巷に溢れる男女のカップルを見るより、むさ苦しくもドライでもない。公共の場ではほど良い距離感を保ち、友達同士にしか見えない清潔感が感じられるほどだ。だからすつかり慣れたつもりでいるが、間が悪く「恋人」という空気を感じさせられることがあると、やはり男同士ということにどきまぎとしてし

まう。

「奥入つてて。こつち済ませるから。シン、これはまだいるのか？」  
黒い紐付きのローファー。普段ラフで楽な恰好ばかりなので、仕事で他人と会う時、数回履いたただけだった。紐なしの革靴を気に入って買つてからは、手に取ることもなかった。

「…特に、いらないよ。ユキが適当に考えて」

「そんな訳にはいかないだろ？んじゃ、こつちは？」

今度はスニーカー。凝った色遣いなのだが、誤って踵を何度か踏んで歩いてしまい、型崩れしていた。自分がやった癖に、折れた踵が一度目に付くと、履くどころか見るのも嫌になつてくるのが不思議だ。

「ああもう、いいよ、いらないよ」

「全部いらないんじゃ、話にならないだろ？まあいいや、夕飯にしよう」

仕方なく、古い方から何足かゴミ袋に入れ、大分省略して整理を終わらせた。

シンはほっとして、リビングへと逃げ込んだ。

「二人のお陰で助かったよ。あれが始まると長いんだ」  
ソファに沈み、眠そうにクッションにもたれかけた。

整理も掃除も至極ありがたいのだが、ユキが張り切るとシンまでが大変な思いをすることになる。いるかいらないかと言われるば、何でもいらぬような気がしてしまうのに、きちんと判断するまで許してもらえない。

物に執着しないシンと、常識的に線を引きたがるユキ。そこだけはどうにもわかりあえない点だった。

必要になつたら買えばいい。本当に長く必要なものなんて、限られているのに…

## SOMETHING OLD 4 (後書き)

毎日更新なので、1日ですんなり読み続けられるボリュームを考慮  
していますが、今回：ちよつと前半もたつき気味で反省です。もう  
ちよつとで本題入りますので、ご辛抱くださいませ(汗)

「手伝うね」

ジャケットを脱いで腕まくりするカオルに、ユキは冷蔵庫からビールと冷えたグラスを二つ、次々と渡した。

「もうほとんどできてる。あとは火にかけてそっち移すだけだから、先に飲んでな」

白いダイニングテーブルには空のガスコンロがあり、カオルがビールを置くと、カウンターの向こうから皿を寄越された。

ラップの掛ったポテトサラダ、スティック野菜、彩りよい温野菜の小皿。

「野菜、おいしそう」

「ああ、ほとんどシンのな。小食だし、油が重いと具合悪くなるから。お前らが来たからには、鍋の材料を足さないと。肉、あったかなあ」

軽い言い方をしても、実は深く心配し、胸を痛めていた。

シンは三年前に通り魔に刺され、腎臓を少し傷めていた。傷はすっかり治ったが冬の間は傷跡が疼くし、疲労やストレスに曝されると、容赦なく嘔吐や血尿といった形で体調を崩してしまう。レンによると、はつきりした病名の付かないもので、傷の後遺症かどうかも判別が付かない代物だった。

事件の直後に同居を決め、必死でシンの体調管理してやろうとしたが、食事に関しては本当に難しい相手。

偏食が激しい。食わなくても生きていけると勘違いしているのかと思うほど小食。意外と酒が好きで、考えもせず空腹にキツイのを流し込むという馬鹿もやる。何より絶望的なことには、まったく食に興味がない。健康になるために食べる努力するくらいなら、不調をひたすら我慢する方を選択してしまうほどの無頓着ぶり。

ライフスタイルはなかなか変えさせられないが、試しに半ベジタ

リアン食にしてみたところ、少しは調子が上向いた。高級食材が並ぶデパ地下で、有機野菜を吟味する日々の始まりだった。

「料理長！せっかくの夕食前に、寝てる人がいまーす！」

シンは集中が切れて完全に眠くなり、そのままウトウトとしていた。茶色い素直な前髪が分かれ、額が露わになっている。

「今からかー、微妙だな。まあ、ちよつと寝かせてやって」

「まったく、子供かよ」

背丈は二十センチ追い越したが、最近では年齢も追い越した気がする。外見・精神共に、年齢不詳な次兄だ。ユウが背もたれのフリースを腹に掛けてやると、ミノムシのようにモゾモゾと引き上げて顔を隠す。暗闇と、自宅のユキの匂いに安心し、急速に眠りに墜ちようとしていた。

「三十分くらい寝ると復活するから、飲んでつまんで待つてやって」

把握しきっているのが当然というその言い方が感動モノだった。

実際ユキがいなければ、シンは今でもアトリエで孤独を愛し、仕事以外の自己を削ぎ落として生きていただろう。否、あんな不摂生では、今頃病院か天国だったかもしれない。

「素敵だな。シンさんを大事にしてるんだー！って、全身で叫んでる感じ」

「あん？いつでも叫んでるよ、当たり前だろ？」

「聞いているこっちが恥ずかしい…でも、シンさん幸せ者だね」

ユキはにやりと笑って手を拭き、カウンターの上のシルバーリングを薬指に嵌めた。

「違うよ。俺が幸せなの。俺は尽くしたいタイプ。シンは、俺が尽くすのを構わないでくれるタイプ。これが普通に家事したりインテリアに凝りたい相手だったら大変だよ。こだわりがぶつかって、すぐ破局だろっね」

あっさりと言いのけ、具に火の通った土鍋をテーブルのコンロに移動した。

リビング一杯に、湯気と鍋の匂いが広がった。

「すげえうまそう。なんだっけか、この匂い」

「キムチ？じゃないな。ユキ、何？」

匂いに釣られてユウもテーブルに寄ってきた。カオルからビールを注がれ、席に着く。

「キムチも入ってるけど、だけじゃないんだな。韓国風と思わせて、スパイスとチリパウダーも入ってる。具は鶏肉、大根、モヤシ、餅、その他諸々、冷蔵庫の整理も兼ねて」

カオルはまた感心していた。自分が鍋をやったら、普通なら水炊き、辛いなら豚キムチ、と定番で終わっている。スパイシーな香りが男らしかった。

小皿にポテトサラダを移し、ユウの前に出す。

「さんきゅ」

ユキも微笑ましく、その光景を眺めていた。

「カオルも、尽くすタイプだな」

「えー？私の場合、相手によるんじゃないかなあ。ユウは、身の周りに限っては手が掛かるってだけ」

「なんだよ、俺、手が掛かってる？」

「ね？自覚ないし」

ユウを放って二人で苦笑し、ユキもウーロン茶のグラスを持ってきた。

コンロの火加減を見て、消えない限度の弱火にする。

「いいだろ？鍋は今更ちよっとなーっていう春に、辛い鍋。これだとシンも野菜だけ拾って食べるから、よくやるんだ」

グラスの縁を、水滴が流れ落ちる。

「シンさん、そんなに悪いんですか？仕事では全然……」

思わずヒソヒソ声になったが、ユキは大袈裟に手を振り、料理や小皿が過不足ないか満遍なく見回していた。

「いやいや、過労にさえならなければね。ただ、前は三日連続、不眠不休でデッサンしても変調なかったなんて言いながら、俺の前

じゃ暇さえあれば寝てばかりだから。そんなに疲れるのかと思うと、つい心配になる。…掛かりつけのお医者様に相談したら、不眠不休で今まで変調なかったのが異常なんだってどやされたから、寝てる分には大丈夫なんだろうさ」

親指で天井を指差した。

その医者とは、もちろん三階上に住んでいるレンのことだ。

シンが刺された時のレンの動揺といったらなかった。何しろ、自分と間違われての殺人未遂だ。普段は虐めるように征服していたシンのことを、抱き締めて泣いていた。

どやしつけたというなら、やはりそれまでの無茶な働きぶりを心配していたのだろう。

「寝てばかりって、要するに、ユキ兄の前だと安心するってことだよ。断言できるね。自分の城であるアトリエだって、ピリピリして碌に寝られなかった奴なんだ。二十八年分の不眠を解消していると思えば、あれっくらい短いもんだろ？」

薄味のポテトサラダを口に運び、ユウは自分でうんうんと納得していた。

「ごめん、うつかり寝ちゃった」

時計を見ると、ちょうど三十分経っていた。ユキの把握能力に恐ろしさすら感じる。

「寝足りたか？食べるか？ご飯は？」

のそのそと目を擦りながら席に着き、シンは箸を手にした。

「おかずだけでいい。いいなあ、僕も飲みた…」

眉間に皺を寄せたユキに、最後まで言わずに黙った。

半月前に体調を崩して、ようやく回復してきたところ。絶好調になるまで、アルコールは控えようと約束したばかりなのだ。

くすん、という音を立て、シンは鍋の中から大根を一枚拾った。

夕飯を終え、カオルが手伝って洗い物を片付けると、もう少し飲んでいけという話になった。シンはまた眠そうだったが、今度こそ温かいうちに紅茶を飲んで付き合っていた。

「ユウ、何か頼みごとじゃなかった？」

「それぞれ、待ってました。これ、エントリーしたんだ」

ポケットから四つ折りの、雑誌のページを出して広げた。

『男だらけのミスコンテスト！』

「ニューハーフお断り！健全な女装コンテストです。

賞金五十万円、副賞はフランス旅行！」

でかでかと募集する、テレビ局主催の大会だった。

昨年の大会の様子と優勝者の写真が配置されており、審査員は女性タレント数人と、会場の女性客の一般投票とのこと。

「いやー、なんとなく見てたらさ、優勝者がこれだろ？意外といけんのかなって思って。」

シン兄がファクション考えてくれたら百人力なんだけど。もちろん、ユキ兄にはヘアメイク頼みたいんだ」

「ははは、と腕を組み、ユウは軽い調子でのたまった。」

「ユウ、熱ない？大丈夫？どうしちゃったのよ」

「冗談に突っ込むという段階を遥かに超え、ひきつるカオル。」

「別に、何でもないよ。たださあ……」

「何？現状に不満があるなら、はつきり言ってよ」

「違っつて。カオル、新婚旅行に行くならフランスがいいって言う

てただろ？当分、そんな余裕はできそうにないからさ。好都合かな

って」

「

あっけらかんとした顔に、カオルは言葉を失った。

確かに、フランスがいいとは言った。しかし行かなくていいと散

々言った後のこと。

もうエントリーしてしまったなんて、どうしてこうも鉄砲玉なのだろう？ 思い込むと飛び出して、帰ってくるのがない。

「新婚旅行なんていいってば。そうだ、じゃあ、お正月にスキーにでも連れて行ってくればいいよ。それで十分だから！」

「どうして？ モンサンナントカで、スキーするのか？」

「違う！」

「なんだよ。行きたいんだろ？ できることなら叶えてやりたいの！ ユキがふふくん、と物言いたげに笑った。

「大事にされてんね〜」

「だあっ・から！ その気持ちも、どうして女装に向くのがわからないっていうのよ！」

シンは急に退屈そうになり、ガラステーブルに頬杖をついていた。「いいよ。旅行費用くらい、お祝いとして出すよ。わざわざそんな面倒なことしなくても」

「えーっ！ 頼まれてくれるって言った癖に！」

「…だって、ユウの女装なんて、特に見たくない。僕は、美しいものが好きだ」

女装の話だというのに、本気でユウがむっとしてしまった。シンに反してユキがじーっと切り抜きを見詰め、顎に手を当てて考えていた。

「いやー、ひよっとすると、ひよっとするかもしれないな。」

シン、見てみるよ。全部オーダーで一からドレス作らなくても、カジュアルで体型カバーしてる奴もいる。前にユウのサイズで作ったのをリメイクするだけでも、全然いけるだろ？」

シンが白けた目でユキを睨んだ。

「そういう手抜きは嫌いだ。ていうか、忙しいし」

「お前が無理なら、社内でデザインコンペさせれば？ 手抜きじゃなくて、真剣なお遊びをやらせたらいいじゃないか。別に、SHINEの服を着ての出場です！ って言わないなら、問題ないだろ？」

お遊び…コンペ…

シンは考え込み、萎縮した翠の顔が浮かんだ。彼女はKIDSを任されて、仕事としてのデザインを踏まえての緊張だったからまだいい。そのレベルに達しない下のパタンナーたちは、いつかデザインが実物となって誰かが着てくれることを、まだ夢見ているだけの卵ばかりなのだ。

お遊びというと聞こえが悪いが、彼らにとっては自分らしさを発揮してデザインを見せる、いい機会になるかもしれない。

ユキが乗り気だからという前提で、珍しく打算が働いた。

「んー、じゃあ、それでいい。カオルちゃん、説明が面倒だから、植草さんに通しておいてよ」

「わ・私ですかあ？…ユウ、責任取って一緒に来てよね」

恨みがましく彼を見て、乗せてしまったユキを見た。

ごくごく楽しそうな、他人事の顔…

ラグに座り、猫のように膝に寄りかかったシンの頭を、さりげなく指先で撫でている。彼は完全に身をもたれかけさせ、気持ち良さそうに半分目を閉じている。

「ユキ兄、さんきゅな」

「別に。俺が面白いだけさ」

「酷い。ユウの女装なんて、見たくないのに」

ユキは自信満々、余裕の笑顔を見せた。

「マジで？驚かせてやるよ。正直、このチラシを見る限りでは負ける気がしない」

コンテストの日付は十月。なんと、結婚式の一週間前の大イベントとなってしまうた。

呆れ果て、眩暈すら覚えるカオル。

「なんて無謀な人たちなんだろう…ユウ、ここまで無理を通して優勝しなかったら、結婚式取りやめだからね」

「ひえーっ！お前、恐ろしい冗談言っくなよ！」

「冗談かどうか、試したいなら手抜きしなさいな。…帰る。疲れた」  
スツールに置いたジャケットを羽織り、鞆を肩に掛けた。ユウも

慌てて切り抜きを畳み、最後に残ったグラスや空き缶を下げた。

「悪い。ちよつと見送れない。んじゃ、詳しい話はまたな」

「ういつす!」

シンが寝入り、ユキは立つ気すら見せなかった。気の置けない間柄だけで許される、パートナーを優先する態度。

「鍵、ちゃんと掛けてね!」

「あー、そういえば、夕方にでも愛莉の顔見に行けばよかった…」  
賑やかな二人がドアを閉めると、突然リビングががらんとして見えた。シンの寝息と、静寂…

「シン、ベッド行きな」

時間も時間。シャワーも浴びず、本格的に熟睡しかけている。

「仕方ないな」

膝の下に腕を差し入れ、横抱きに抱き上げた。

痩せてても一応男だから、と力むほどには重くない。そういえば、以前五十三キロくらいだと言っていた。

そこらの普通の女の子と変わらないじゃないか。むしろ、五十三キロより軽くないか？

完璧に健康体の自分が、シンを万全の状態に戻してやれないことが不甲斐なく、やりきれなかった。

シンの個室にダブルの白いベッドがある。壁際に横たわせると離れる瞬間、首に手が伸びてきた。

「このまま寝る」

「まだ片付けがあるよ」

眠そうに、心細そうに頭を振る。甘ったれるのは、過労の始まりのサインだった。

「下ろした途端に起きるんじゃ、愛莉と同じだぞ。鍵だけ掛けてくるから、待ってな」

早く安心させたくて、急いで玄関の鍵を閉めた。リビングの電気を消し、Tシャツを脱ぎながら自室に走り、パジャマ代わりのTシャツと半パンに置き替えた。

ベッドに戻ると、シンは薄目を開けて待っていた。眠るか眠らないかの瀬戸際で、シーツの冷たさを楽しんでいる。とろとろ、溶けそうな表情。

子供というより、もうペットの域だな。…可愛らしさの質で言ったら。

しかも、ドンピシャでシャム猫だ。

「着替えないのか？」

問いかけに答えるのが面倒で、目を閉じるシン。

「ほら、デニムじゃ腰が苦しいだろ？ 圧迫して痛んだらどうするんだ」

足を持ち上げて靴下を引っこ抜き、デニムのボタンとファスナーを外して引っ張ると、一緒に下がりそうになったトランクスを、慌てて押さえた。

「こら。起きてるなら自分で脱げよ」

「んー…」

嫌々ながら自力で細身のデニムを脱ぎ棄て、ついでにTシャツも投げる。ユキに抱き付き、薄い肌掛けを掛けられる時には、もう瞼を閉じていた。

気持ちいい。ユキの匂い、ユキの身体。

頭をくすぐるように撫でられ、揺り籠に揺られるように気分が良くなっていた。

子供のような、猫のような寝顔を眺め、ユキは弛緩したこめかみにキスを落とす。

もう、本気で寝てる…の割には腕がしっかり回り、最後に残ったグラスを洗うのも、日課の天気予報チェックもできそうにない。

「まったく。俺は抱き枕か？」

恋人とベッドに入って、他にもすべきことがあるうだろうに…と苦笑しつつ、彼もまた満ち足りていた。

翌日事務所に顔を出し、軽い休日出勤の植草に話を通した。彼女は一度は頭を抱えたものの、一番下っ端である新人二人限定のコンペならばいいだろうという話になった。

仕事中に手を取られるのならば許せる話ではないが、新人の実力を見定めるいい機会でもある。何より、社員教育など興味すら示したことのないシンの提案ということで、頭からの否定はできなかった。

帰り道、カオルはまだ複雑な表情で、ユウの腕を取って歩いていた。

彼は何故だかウキウキとし、早過ぎるヒマワリのような笑顔をしていた。

「どうしてそんなに楽しそうなの？」

「別に。これだけ強力な助っ人が確保できたんだ。嬉しくて当然だろ？収入とか休みとか考え出したら、当分連れて行けなくなるなって思ってたんだ。そしたらちよとど開いた雑誌に載ってて、これだー！って飛び上がった。ビビッと来てすぐエントリーしたけど、一人じゃ無理だったのもよくわかってたから。今、なんかいい感じ」

「…抵抗、ない訳？」

「面白そうじゃん。女装なんて、普通に生きてたら一生やらないもん。…なんつって、癖になつたりしてな」

「やはつと笑う冗談に、思わず背筋が寒くなった。」

「冗談は冗談のままにしておいてね。…あーあ、本当に、なんて私は馬鹿なんだろう」

「どして？」

「ユウの無鉄砲は嫌ってほどわかってたのに、フランスだなんて口を滑らせて。ごめんねー馬鹿で。ユウの馬鹿を忘れてた馬鹿で、ごめんねー」

話すうちに段々情けなくなってきた。半泣き口調になってしまう。口ばかりでも最大限に侮辱されたというのに、ユウはわざとか天然か、カオルの頭を撫で撫でフォローした。

「大丈夫、カオルは馬鹿じゃないって。ちゃんとして、本当に行きたいところを言ってくれたんだろ？いいんだよ、それで。よかつたなあ。ふざけてエジプトとか言われてたら、コンテストでゲットすることもできなかった」

ああもう。ああ、もう…

彼の愛情表現は、ともすると押し売りになりがちだった。自分を捨てて女装までして、結婚式直前に出場して、優勝しなかつたらどうするつもりなのだろう？

でも、多分そこが良いところ。呆れて口も利きたくないくらいなのに、不覚にも赤面してしまった。

私の方が尽くすタイプだなんて、嘘だわ。

深く息を吸い込むと、どこからか花の香りが届き、視界の端には大きな公園の桜がこんもりと盛りを迎えていた。

「優勝しなかつたら結婚取りやめって発言、撤回する。頑張つてね、頼りにしてる。フランス連れてって」

「ん、素直でよろしいね」

会話の切れ間を知っていたかのように、ユウのポケットから「ゴッドファーザー」の着メロが鳴り出した。

「げ、またかよ」

長兄レンからの着信だ。本人から「そういう嫌味はよせ」と毒づかれる選曲が、至って気に入っている。

「あいよ」

「お前、今日休みだろ」

「勝手にスケジュール把握しないでいただきたい」

「いいからすぐに来い。カオルちゃんもな」

手短に命令し、勝手に電話が切られた。思わずキョロキョロと見回して、刺客を探したくなる。

裏の仕事から手を引いて、もしかしてもつすごく暇人になったんじゃないか？

そう思いたくなるほど、最近は干渉が煩かった。しかし火急の用事もないのに、レンの誘いを断る勇気も持ち合わせてはいない二人肩を落とし、事務所から五分の高層マンションへと足を向けた。

「いらつしやーい！」

玄関を開けた妻の弥生は、春色で五分丈のＴシャツとスキニージーンズ姿だった。爽やかな出で立ちの背中にぶら下がっている、小さな子供が一人。

「ユーたん」と、カオったん

二歳になったばかりの愛莉は、舌足らずが可愛い盛りの子だ。「おー愛莉、ママのシャツ伸びちゃうぞ。こっち来い」

「いやあー」

ユウの誘いにぶんぶんと首を振り、おんぶから離れようとしなかった。

「ごめんねー、最近ダメなのよ。あたしか、何故かシンくん限定なの」

ヒソヒソと言い、顔をしかめてリビングを指差す。

あー、そうか。だから暇なんだ。

静まりかえっているリビングに入るのが、少し怖かった。

「こんにちは」

カオルが小声で言うと、ピリピリムードで雑誌を見るレンがいた。夜勤明けらしく、シャワーの後の髪がもたついている。

挨拶でもしようかと振りかぶったレンの目に、後から入った弥生の背が映った。それだけで瞳がうるつとし、自分が呼びつけた二人のことを忘れそうになっていた。

「レンさん、どうしたんですか？」

「愛莉が…うつ駄目だ。言えない。再起不能だ」

「昨日この子ったら、レンに強引に抱っこされて号泣したの。どう

せ一時的なものなのに、レンがむきになって、どうしてパパが嫌なんだ？って聞いて…返事、なんだったと思う？」

今にも吹き出しそうな顔で弥生が語り、レンが肘掛けに顔を埋めた。

「弥生、言うな」

「パパ、くしゃい！だって。あははは」

ケラケラと笑う弥生。あまりの暴露加減に、カオルは笑えなかった。

「はは、傑作！三十代で、もう加齢臭かよっ」

「…煩い」

一緒になって笑う弟にキツイ視線を遣り、ソファを顎で示した。

「本題の前に言っておくが、僕が臭かったんじゃない。コロナを着けたばかりだったただけだからな」

「大丈夫ですよ、レンさん。甘えてるだけなんじゃない？こんなに優しいパパなのに、嫌う訳ないもん」

「…だよな…だよな？弥生！愛莉に聞いてくれっ！」

失恋したての高校生並みに錯乱する姿は、珍獣のように面白い。しかし唾うととばつちりがくるので、フォローしながら手をつねって我慢していた。

「パパ好きだよ、愛莉。ママもいいけど、パパもいいんだよね？」

「ママしゅき。シンたん、しゅき」

母親そっくりのあっけらかんとした口で、愛莉が言い放つ。余りの即答にさすがの弥生も苦笑いするしかなかった。

「くっこの屈辱！弥生はともかく、どうしてシンが二番手なんだ！いつそのこと抹殺してやるのか…」

「レン、シンくんは自由にさせてくれるし、とにかくあの部屋が楽しいのよ。お絵描きは好きにできるし、シンキチはいるし、いつもおいしい御飯が出てくるし。ほら、ユウとカオルちゃんが困ってるわよ。愚痴を聞かせてどうするの？」

レンはまだ苦りきった顔をしていたが、籐のラックから旅行会社のパンフを取り出した。

「お前ら、新婚旅行はどうするんだ？何もかもが後手後手だからな、一応調べてみた」

「あー、それね。ちゃんと考えてあるから。カオルがモン…なんだっけ？」

「モン・サン・ミッシェル」

「なかなか覚えられねえなあ。そこに行きたいんだってさ」

嬉々としたユウの言葉に反応し、レンはヨーロッパ系のパンフを  
めくった。

「なかなか趣味がいい。個人旅行は不安だろうか？現地ガイド付きプ  
ランのツアーで、いいのがあったな」

「いいんだ。決めてあるから」

肝心の結婚式ですらすんなり決まらなかったのに？と怪訝な顔を  
向けると、カオルは頭痛を抑えるようにこめかみに手を当て、ひた  
すら苦笑で誤魔化している。改めてユウのイキイキした態度を見る  
と、碌でもないことを思い付いたに違いないと確信できた。

「何だ？今度はどんな益体もないことを言い出した？」

「ジャーン！これに出て、優勝する！貯え的にも余裕ないからさ、  
自力でゲッチュすることにした」

眼鏡を掛け直し、ペラペラの切り抜きに目を凝らす。

「……」

全面を二度は確かめてから俯き、切り抜きがブルブルと震えた。  
何も言えず、ゆっくりとビリビリ破り捨てる。後ろポケットから財  
布を出し、ブラックのクレジットカードをカオルに無理矢理握らせ  
た。

「フランスは綺麗な国だ。君はこれで、好きなところに行きなさい  
……ユウ、貴様にくれてやるもんは……」

突然パンフの束を振り上げ、ユウの頭頂部に一撃くれた。ためら  
いなく、勢いで真下まで振り下ろす。

すっぱあん！という音が木霊した。

「……つてえええ！」

「こんの……ド阿呆が！史上最悪の馬鹿か！」

静かに笑ったり、最低限の威圧でわからせるのがレンの常套手段  
だというのに、全開の怒鳴り声を上げてしまうほどキレていた。

弥生がレンの隣に座り、紙屑を拾って読んだ。

「レンったら、心配だからって、そんなに怒らないの」

膝の上の愛莉が紙を奪おうとするのを阻止しながら、取り成すよ

うに優しくいなした。

「心配なんじゃない！阿呆らしくて、気が狂いそうただけだ！こんなのに付き合う彼女の気にもなってみろ！よく結婚する気を失わないもんだ！」

視線がカオルに集まる。

当然反対だろ？と問い詰めるレンの瞳。

大丈夫だよ、と呑気にフォローする弥生の瞳。

本当の処どうなんだ？と不安なユウの瞳。

彼は拗ねたように唇を尖らせ、切ないような悲しいような表情をしていた。

阿呆らしいと思ったのはレンと同じだが、この状況でそつちに乘じるのは余りに可哀想な顔。いつもこの顔に負けちゃうんだよなあ、と、自分の愚かさを嗤いたくなった。

「まあ…慣れっここですから」

「はあ？気は確かか？もっと冷静に判断してみる。式の直前じゃないか。フランスごときで、結婚式の思い出を悪夢にするつもりか？」

「レン、言い過ぎだよ」

「…レンさんにとつては、フランスごときかもしれないけど。でもユウが必死で考えてくれたことだから…まあ、私が出る訳じゃないし、どっちでもいいかなって」

「カオルっ！」

感極まり、ユウがカオルを横から抱き締めた。床に着きそうなほど頭を落として脱力したレンの背を、遠慮なく愛莉が積木で叩く。

「もう、今すぐそのカードで、二人揃ってフランスでもどこでも行ってくれ。頼むから、天城に泥を塗るような真似は諦めてくれ」

「…嫌だね。人の金で新婚旅行したって楽しいもんか。絶対出場するし、意地でも優勝するからな」

レンが声を振り絞って、珍しくも哀願口調になった。しかしユウは意固地に腕組みし、カオルも遠慮勝ちにカードをテーブルに置い

た。煌めくプラスチックの黒には、ほぼ無制限の金額が詰められているが、対比したユウの決意と努力も同じだけ価値があると信じてみたくなってしまった。

レンもカオルも天邪鬼。今回ばかりは、取り乱して頭ごなしに反対したレンが失策だった。

「ユウは馬鹿だけど、人を当てにしたいくないのは私も同じです。そこまでして行きたい訳じゃないし」

弥生はアイステイーを飲み、ニコニコ能天気全員を見回した。

「カオルちゃんてカッコいい〜！ほら、レンの負け。カオルちゃんには敵わないんだよね」

レンが、静かに笑い出した。合理的な脳が容量を超え、壊れかけている。

「…ふ…ふふふ…わかった。よく、わかった。じゃあ、こうしようじゃないか。コンテストには出る。できれば偽名でも使って欲しい処だが、とにかく出ると。しかし結婚式が一週間後ってのは、いくらなんでも無茶。そうだな？弥生」

「うーん、ま、余裕があるに越したことはないのかなあ？結構忙しいもんね」

レンはラックの底に眠っていた厚いウェディング雑誌を出した。

「ばん！と重い音を立て、二人に差し出す。」

「そういうことだ。式を延期して、どうせなら披露宴もやるように考え直せ」

なんとか取り戻した不敵な笑みは、絶対に引き下がらない決意を示していた。

ええっ？そうくる？

ユウとカオルは困って顔を見合わせた。

結婚の報告をした時から、ずっとそうしると口出しされていた。

三男とはいえ、天城家の男子。それなりの格式を大事にしると。

日頃影の薄い父親ですら、公営で小さな教会での結婚式だけだと言った時には考え込んでいた。

雑誌には幾つも折り目が付いており、「天城家に相応しい」大ホテルや教会がピックアップされていた。レンも一応気を配り、年齢のイメージと懸け離れた重々しい雰囲気の場合は外してある。客観的に考えれば、素敵な式場であることには間違いない。

しかしそれでも、ユウはともかくカオルは、派手な披露宴に抵抗があった。人数比や顔ぶれのバランスや、余計な問題も絡んでくる。地味な自分がドレスを纏い、ユウと腕を組んでキャンドルサービスをする図など、想像にも及ばない。

ユウにとっては結婚が大事で、カオルのことはもつと大事。結婚式だけだろうが最大級の披露宴だろうが、まったく構わない。彼女が納得する形を取るのが望みだった。

口を尖らせ、まだジンジンとする頭を押さえて文句を言う。

「だからさー！その話は終わつたろ？」

「再燃したんだよ！お前がおかしな話をするから！」

「前にも言いましたけど、うちから出席する親族、祖父だけですよ？釣り合いが悪いし、質素にやりたいんです」

カオルの発言に、弥生が首を捻った。

「どつちでもいいと思うけどね。あたしなんか親族はいないし、友達も招かなかつたよ。でも意外と変な目では見られなかつた気がするな。おじいちゃんや友達が来るなら十分じゃない？」

「あ…そっか。ごめんね。弥生ちゃんのことを言うつもりじゃなく

て、私の性格の問題ってどうか…」

レンと弥生の結婚披露宴は、席次票に「新婦友人」の表示がなく、八割以上が団塊の世代の男性ばかり。社名や役職の小さい文字が並び、目がチカチカして読み切れなかった。当然のように黒のスーツや燕尾服が並び、黒・黒・黒…

ユキと共に数少ない友人席の後方に席を用意されたカオルだったが、普通に紺色のパーティードレスを着ているのに、何故か違和感がある色彩感を放っていた。隣のユキも黒スーツで一時的に髪を黒に染めていたし、すぐ後ろの親族席も親世代の女性は全員黒留袖なのだから、当然と言えば当然だ。

そんな中に舞い降りた、天使のような弥生のウェディングドレス姿。自信に満ちた笑顔が美しく、会場からは溜息が漏れた。スピーチはどれも長くて退屈だったが、前もって弥生がリサーチしておいたカラオケ好きの重鎮に卒なくアドリブを頼むよう根回しし、誰よりも楽しそうに手拍子する新婦の姿に会場全体が和んだのが印象的だった。

自分には、あんなに気の利いたことなどできない。視線を集めて余裕の態度でいられた試しなどないのだから、きつとすぐにボロを出す。

弥生と自分を比較しても仕方ないのは承知の上で、尚委縮させられていた。

レンは眉間をを押しさえて考え込んでいたが、不意に携帯を握った。コールする間にも、何やら策略を練っている口で、カオルのことをチラリと窺っている。

「弥生のことをとにかく言うつもりがないなら、釣り合いは気にしない方向ってことだな。…ああ僕だ、ちよつと上に来い。結婚式について家族会議だ」

問答無用の呼び出しはシンにも使われ、彼はものの数分でやってきた。ユウとカオルと分厚い結婚雑誌を見て、大方の事態を察して

いる。

「シンたんだあ！」

ラグの上にぺたりと座ったシンに、愛莉は身じろぎして弥生の膝から降りた。

「抱っこ？おいで」

むむう、と不機嫌に拍車がかかるレン。

大体の話をかいつまんだところで、シンは手にしたファイルをユウに渡した。

「きゃーん、可愛い！」

ユウより先に弥生が横から覗き込み、高い声を上げる。昨日はコンテストの話でドレスの話が吹っ飛び、ユウも初めて見たデザイン画に驚いていた。

「さすがシン兄！カオル、よかったな」

恥ずかしそうに頷くカオルを余所に、レンも思わず感心していた。頭の中だけで、ぐるぐると作戦が完成しつつある。

「式の話は置いといて、ユウに見せてなかったから。ユウは長身で胸板がしっかりしているから、淡色のフロックコートを考えてる」

「新郎なんて、この際オマケみたいなもんだからどうでもいい」

レンが話をスパッと切り、手を合わせて考えていた。

「時にシン。これだけ豪華に手の込んだドレス、たった一時間弱の公民館に毛が生えたような教会での式で終わらせて、満足か？」

話が不味い方向に流れかけ、カオルは慌てて手を振った。

「その後、ちゃんとパーティーがありますから！」

「友達同士の、だろ？二次会と変わらないじゃないか。これがちゃんとした披露宴だったらどうだ？カオルちゃんはカラードレスも映えるだろうな。弥生はピンクが似合っていたが、彼女なら、何色が似合う？」

シンは作戦に乗らないようにそっぽを向いていたが、職業病か、制御不能にイメージが膨らんでくる。大きく広がり過ぎない、シルク素材でストンとしたAライン、マーメイドとは対照的に、パフス

リーブか…いや、思い切ってノンスリーブもいい。露出と撫で肩が気になるなら、長いストールを持ってきて…

自然と夢を見るような顔付きに変化したのを悟り、レンは成功を予感していた。

「弥生はどう思う？」

「披露宴は楽しかったよ、その時だけはお姫様だもん。ユウはどこちでもいいんでしょう？カオルちゃんはどうして嫌なの？」

「…身の丈に、合わないことは」

「それは聞いた。しかし、腐ってもユウは大病院の院長の息子だ。個人だけで結婚するんじゃない。家のことも考えれば、披露宴くらい普通。金銭的なことを気にしているなら、親は親らしい額の祝い金を用意しているし、トータルでプラスになることは確かだ。こつちの父親の立場を考えれば、今のプランの方が身の丈に合わないんじゃないか？」

「冗談以上の意味で、彼女を追い詰める趣味は持っていない。レンはきつい口調にならないよう、無意識に気を付けていた。

彼らが自立したい気持ちは認めるし、真田家のことも考えると、嫌味な言い方をするのが酷だともわかっている。赤貧とまではいかないだろうが、手狭な古い道場で子供相手に剣道を教えているだけ。両親はおらず年金暮らしの祖父が頼みの綱なのだから、二家族で金銭感覚が違うことは否めない。

お互いの立場を考慮しなくてはいけないことを踏まえると、何もかも一切を持たない弥生の方が、余程身軽で話が簡単だった。

弥生はレンの心の内を測りながら、ストローで氷を崩していた。自分たちの披露宴を思い出し、ふと懐かしい気持ちになっている。

「あたしなんて一人だったけど、お義父さんもお義母さんも泣いて喜んでくれた。小さい頃から知ってるカオルちゃんなら、あたしの比じゃないんじゃないかなあ。…おつとごめん、あたしは中立。自分たちの思うようにしなきゃね」

彼女はそれきり口を手で押さえ、夫の尻馬に乗らない意志表示をした。レンは内心で弥生を味方としてカウントしたが、喜んだ顔を見せないように、敢えて不機嫌そうに問い質した。

「他に、わざわざ退ける理由なんてあるのか？」

「…恥ずかしいから言いません」

「子供じゃあるまいし」

「子供なんです！」

ユウが庇うように割り込み、レンを睨んだ。

「虐めるなよ。俺がわかってるんだから、いいんだよ」

「じゃあ、まず言ってみろ」

「なんで俺が暴露すんだよ」

「…僕もわかるな、多分。…あ、言わないけどね」

黙っていたシンが、柔らかい笑顔で味方した。

「なー、シン兄」

「ね、ユウ。…でも。僕はカオルちゃんが納得した上で、披露宴までやった方がいいとも思ってる。うちでは最後の結婚式だし、親のことを考えてっていう兄さんの言い分もわかるから。それでお色直しがあつて、カレードレスを着てくれたら、僕も本望。あ、これは個人的な余禄だけどね」

旗色が悪くて慥然としていたレンの瞳が、きらりと光った。ユウよりも自分よりも、誰より頑固なシンがこちら側に付いたのだ。勝

利の予感確信へと昇格された。

「教会はまだキャンセルできるんだろう?」

「多分。公営だし、時間あるから」

「じゃあ、もつとよく話し合え。何度も言うが、結婚は二人だけのものじゃないんだ」

愛莉が振り下ろした鋭角な積木が爪先を直撃し、低く呻いた。

「痛っ!…はー、疲れたな。とにかく夕方まで寝る」

すっくと立ったレンの背を、愛莉が投げキッスで呼び止める。

「パーパ!」

「なんだい愛莉っ!」

久々に呼ばれ、可愛いキスマまで飛んできた。今までが嘘のように顔がにやけ、両手を差し伸べる。愛莉はシンの膝上のまま、大きく手を振った。

「パパ、バイバイ!」

余りに嬉しそうな別れの言葉に撃沈し、彼はとぼとぼ静かに出て行った。

ずっと口を手で塞いでいた弥生が、ぷはっとな解放された。

「苦しかったあ。あたしお喋りだから、黙ってるのって辛いんだ。

ねえシンくん、ユキは何て言ってるの?」

「ユキ?いつも通りだよ。カオルちゃんを世界一綺麗にしてみせるって豪語してる。コンテストに関しても、負ける気がしないって」

「彼らしい。ねえ、カオルちゃん、任せちゃえば?味方はたくさんいるんだから。レンだって、お義父さんの立場とか、本当は関係ないんだよ。ユウのことですらオマケ扱いで、たいして考えてないんじゃないかな。ただただ、お姫様気分で最高に幸せな顔してるカオルちゃんを見たいだけなの」

「…恥ずかしいから」

「ん?いいよ、理由は言わなくても」

「違うの。見られるのが恥ずかしいって理由を言うのが、恥ずかしかったの」

へ？と首を傾げる弥生。

ユウが我が意を得たり、と頷いた。

「カオルは恥ずかしがり屋さんだからな」

「…その言い方が、今何よりも恥ずかしいんだけど」

シンは、船を漕ぎ始めた愛莉を自分の方に向かせ、密着するよう  
に抱き直した。父とは違って無臭の気持ちいいシャツに顔を埋め、  
全身でもたれ、安心感で急速に眠りに落ちている。

「怖いんだよね、カオルちゃんは。コンプレックスを持つ理由なん  
てないのに」

「理由…って。だって、弥生ちゃんみたいにスタイルよくないし、  
顔もキツイもん。折角のドレスなのに、人前で竦み上がるのがどれ  
だけ格好悪いか、リアルに想像できちゃう」

えーっ、と弥生が飛び上がって驚いた。

「カオルちゃんの方が背は高いし、脚もすらっとしてるのに！まあ、  
胸はあたしの方が大きい自信あるけど。顔だって、ずーっと前にユ  
ウが自慢してたよ。俺の彼女は猫みたいに可愛いんだって」

ユウがぶつとんで、アイステイーを嘔き出した。必死のゼスチャ  
ーで、それは言うなとサインを送る。

一瞬遅れて弥生が悟り、顔色を失った。

レンが結婚相手を紹介した食事会。ユウとカオルが同席している  
ところに、初対面という設定で弥生が現れた。本当は初めてでない  
どころか妙な薬でおかしなことになる、思い出したくもないすった  
もんだがあつたのだ。

今の弥生のセリフを吟味すれば、初対面の設定以前の言葉だと気  
付いてもおかしくない。

しかしカオルは幸いにも結婚式に頭が向いており、言い回しに多  
少の違和感を感じたものの、完全に見過ごしていた。

嘘が苦手な性格を捻じ曲げて貫き通し、疑われる機会がないこと  
で守っている秘密。危うく、墓場まで持っていく筈のそれを洩らす  
ところだ。ユウと弥生は、内心冷や汗モノだった。

## SOMETHING BORROWED 4 (後書き)

「phantom honeymoon」からご覧の皆様へ。

弥生は元々別人で、裏の世界を持つレンに救われることにより、新しい戸籍で生きています。

元の名前の「沙織」は死亡したことになっており、「弥生」の友達  
は地方であり、特に踏み込んで親しい間柄もおらず、よってたった  
一人での嫁入りになりました。

ユウとのゴタゴタは「Brother Complex」に、レン  
との恋愛・過去の話は「family」に入っております。

本来「読めばわかる」が正解だと思っておりますが、今回は宣伝が  
てら・・・^^

また、昔の黒いレンがお好きな方は多いと存じます（読者数の推移  
から見て）

「LOVE FLOWER」から、腑抜けになったと思っっているの  
は、カオルだけではないはず。

しかし、人間そうそう変わるものではありません。

気が早い宣伝ではありますが、次作では本性を曝すことになります。  
今作がメロメロパパだからといって、諦めないで大丈夫です（笑）

長い後書きでゴメンナサイ。続きもぜひ、お楽しみに！

ユウと弥生の秘密のことなど露知らず、シンが残念そうにカオルの顔を見詰めていた。

「カオルちゃんは綺麗なのに、勿体ないな。僕のことを信頼してくれるって、言ったよね」

「はい」

「それって、そのドレスを着た自分のことを信頼できるのと同じってこと。堂々と胸を張ってお姫様気分を満喫してくれるのが、僕に対する一番の賛辞なんだ、本当は」

彼女は俯き、言葉を噛みしめていた。

身勝手な自己主張でなく、義兄とプロ、両方の立場から優しくアドバイスしてくれている。ある意味、レンからの毒舌よりもキツく感じていた。

シンは愛莉を揺すりながら、カオルに間を与えてくれている。ユウは、まだ不穩に動く心臓を隠すようにアイステイーを飲み干し、旅行パンフのモン・サン・ミッシェルを眺めている。

弥生がふーっと長い呼吸で空気を変え、両手を着いて立ち上がった。

「シンくん、重いでしょ？寝かせてくるね」

シンは片膝を立てて愛莉を持ち上げた。日頃、ペン以上に重たい物を持たない生活。大事な荷物を手渡した途端に脱力したが、弥生は対照的に軽々と抱き上げ、寝室へと消えた。

シンは、唇をキュッと引いているカオルに向き合い、楽な体勢に座り直した。

「カオルちゃん、落ち込まないで。押し付けるつもりじゃないんだ。納得できたらやればいい。納得いかないのに大がかりな披露宴なんてことになったら、それこそ兄さんの好き勝手にされてしまうから」

「…考えます。でもね、シンさん」

「うん」

「自信がないだけで、ドレスが着たくないんじゃないの。カラードレスだなんて聞いたら、やっぱりドキドキしちゃう。だから前向きによく考える。もし披露宴なんてことになったら、またご迷惑掛けでもいいですか？」

矛盾は承知の上。見られるのは恥ずかしくても、綺麗なドレスが嫌いな女の子なんていない。我儘めいたお願いで反応が怖かったが、シンからは春の陽気そのままの表情が返ってきた。

「妹のドレスなんて嬉しくて嬉しくて、迷惑なんてあり得ないよ。それに、コンテストと結婚式の時期がずれると、僕も助かるんだ」  
満面の笑みで見守っていたユウが、きよんとする番だった。

「ユウ、時期がずれるなら、コンテストに邁進できるよね？」  
「あ、ああ」

「最低八キロ、痩せて。特に腕の筋肉落としてね。それだけで、衣裳の幅がぐつと広がるから。よかった、痩せたらフロックコートが似合わなくなると思って遠慮してたんだ。」

それからユキの友達に、エステの勉強している女の子がいるんだって。修行がてら実費でやってくれるらしいから、夏から通って。当然脱毛も頼んで。あとは所作だね。ガニ股で歩かれたら堪らない。そっちは自習にお任せするから」

口調がどこまでも平坦なのが、恐ろしさを掻き立てた。

「くああ、予定通り結婚式した方が楽だな、こりゃあ」

レン兄ほどじゃないけど、シン兄もたまにS入るよな。自覚なく、しかも嬉々として…

「シンさん、もしかして乗ってきちゃってます？」

「僕、手抜きは嫌いだもの」

仕事用の、大人っぽい笑顔になっていた。話が思う方向に伸びたことで、ウキウキとした光を放っている。

きつとこの瞬間にも、フロックコートの色やスタイルを想像し始めているのだ。迷惑でも何でもないことが表情でわかり、カオルも

ようやく安堵できた。

「さすがドロプロですね。でも無理は禁物ですよ。飽くまでお仕事優先で！」

「歌姫さんとデザインコンペの大仕事があるから、結婚式が延びるとその面でも好都合だね。身体は大丈夫だよ。嫌でもユキと兄さんの目が光ってる」

急にプライベート用の、ふんわり笑顔を取り戻した。

他人であるカオルが、シンの笑顔の意味を区別できるようになったのは、ここ二年くらいのことだろうか。

幼い頃から、シンは「優しいけど大人しい、ちょっと変わった近所のお兄ちゃん」というだけだった。

それがたまたまSHINEにアルバイトとして入り、同時にシンの前にユキという存在が現れて、恋愛関係の纏れの余波で迷惑を被り…

一世一代の大恋愛を成就すべく奮闘し、落ち込めばフォローし、気が付いたら本当の兄のように慕う気持ちが出てきたのだ。

実質的に面倒を掛けることになるシンが、嬉しいと言ってくれるなら。

彼の言葉は、当事者であるユウが強力に提案してくるよりも、自然に後押ししてくれた。

無鉄砲と優柔不断のコンビで、今までもグズグズした流れだったのだ。予定通りでも延期でも、どこかしらには迷惑を掛けることになる。どうせならば、懸念材料だった天城の両親を喜ばせられる方が、カオルにとってもいい。

割り切ってしまうえば、それは単純明快なこと。

主役であり主催者であったとしても、自分たちだけのための拳式じゃない。みんなに喜んでもらいたい。華々しく披露するのではなく、寛いでもらって、食事を楽しんでもらって、ユウの親族の顔を覚えさせてもらう。注目されると思うのではなく、シンの作品を純

粹に見ていると思えるよう、努力しよう。

そう考えれば、なんとかなりそうじゃない？

…うん、できる。できるよ、きつと。

思わずユウに視線を遣れば、全部わかっているという表情で微笑んでくれていた。

気付いてみれば、茶色い光はシンと同じ、優しい色を映している。

紆余曲折、遠回りした彼女の心は、ようやく決着を迎えていた。

結婚は二人のものじゃない

親のことも考えて

なんだ…物凄く癪だけど、どれもこれもレンさんが言った通りじゃないの。

どんなに的確な忠告でも、素直に聞く気にさせてくれないのが、レンのレンたる所以なのだ。自分の馬鹿さ加減にも愛想が尽きるが、そんなレンに勝ちを譲るのもなんだか悔しい。

いいんだ。成人したって、どうせ子供なんだから。

そんなことを気にするよりも、ジュンとアキに知らせておかなければ。手間を掛けさせるが、彼らにも時間的余裕が生まれた。気の置けない友達だし、許してくれるだろう。

面倒だと思っていた段取りが、楽しい準備に変えられそんな気分になっていた。

SOMETHING BORROWED 5 (後書き)

大して気にされる方もいらっしやらないでしょうが…

シンのセリフでカオルを「妹」と言っています。敢えて「義妹」とは言わせませんでした。(話す時の発音は同じですけどね^^;) 立場を表わす時には「義」を付けていますが、心の近さを表す時には抜いています。表記がまちまちになりますが、個人的なこだわりです。

評価・感想で誤字として指摘したくなる方もいらっしやるかと思いますが、スルーしてくださいとありがたいです。

シンの場合は、弥生を「義姉」から「姉」にすることは、一生ないと思います。カオル限定ですね。

蛇足ですが…ちなみにレンは、ユキを「義弟」としてすらカウントしておりません。存在は認めていても、立場は認めたくないのです。カオルのことはシン以上に「妹」として見えています。プライドが邪魔をして、一生言わないでしょう。そういうお人です。

祖父の重三の部屋から、明かりが洩れていた。声を掛けて襖を開くと、イヤホンを片耳に座イスでテレビを見ている。

「じいちゃん、ただいま」

「おお、カオルか」

ただいまという相手はカオルしかないというのに、昔から必ず「カオルか」と確認する癖。家族が減っても、変えることができなかった。

「ちよつと、話があるんだけど」

「なんだ」

イヤホンを外し、リモコンのスイッチを押した。

黄色つぼい、古い電灯の埃が気になった。次の休みには掃除に入ろう。

お互いが自立し、ほどほどの距離を保って暮らそうと約束してから十年以上。事態が変わるのは仕方がない。毎朝元気に畳を掃いているが、目も耳も少しずつ弱り、細かいところに気が回らなくなってきた。しかし背筋は定規のようにピンと伸びている。頭もしっかりしているし、その点では安心感がある。

「結婚式のことだ」

「ドレスだのなんだのってことは、わしに聞いても無駄骨だぞ」

「わかつてる、もうそれはいいの。今更なんだけど、日を延期しようと思ってる」

身体ごとカオルに向き、くわつと目を見開いた。

彼の常識では、結婚式の延期というのは、破局寸前まで話がこじれた末の解決策を意味している。主にレンの口出しにより、式場の決定まではモタモタとしていたのだ。首を突っ込まないようにしているうちに、大変なことになってしまったのかと危惧した。

「ああ、あのね。いろいろ考えて、やっぱりレンさんの主張が正し

いと思うの。あっちのご両親も、ちゃんとした披露宴を望んでるみたいだし…派手にするつもりはないんだけど、何もしないっていうのは悪いかなって。でも長時間のフォーマルな席で、じいちゃんが大変じゃないかも心配だから」

「…そういうことか…何のそれしき、まだまだ負けん。ただ、あれだ…今時で洋風の宴なら、箸だけ用意しておいてくれ。あと、日本酒な」

そそくさとテレビを点けてイヤホンを耳に突っ込み、素っ気なく話を打ち切った。

寂しいのだ。

道場で自ら躰けたユウが相手なら、いつでもいいと思っていた。しかしいざ直面すると、嬉しさよりも寂しさが先に立ち、真剣に話を聞く用意がない。

カオルも重々承知している。ユウと相談したい時は、できるだけ自宅に呼んで一緒に食事をするように努めていた。しかし学生時代とは時間の遣い方が激変している。なかなか長く接することができていなかった。

襖を閉める直前手を止めて、かくしゃくとした横顔を目にとめた。

「じいちゃん」

「まだ何かあるのか？」

「ううん…いろいろありがとうね」

「ばっ馬鹿なことを！早く寝ろ」

「おやすみなさい」

自室に戻り、祖父に話したことをユウにメールした。ユウも実家に電話し、レンに負けたと報告した、という返事があった。

本来ならば二人揃って両家を訪れるのが筋なのだろうが、ユウの仕事が不規則で、近いうちに実行する目処が立たなかったのだ。ちやんとそれも伝えて謝っておいてね、と釘を刺したが、「忙しくてさっ、悪いな」という軽い謝罪が目には浮かぶようだった。

次は…無論、アキに電話だ。

メールでは、うまく伝わりそうにない。ちゃんと言い訳しようと思つと、だらだらの長文になってしまつたろう。そしてそれを誤解なく読解する相手でもない。

「あ、私。今大丈夫？」

日程を変更すること。披露宴をするから、正式なパーティーから二次会に変更してほしいということ。そして、その経緯…

「いいじゃん！SHINEのドレスでお色直しまでなんて！いいなあ。あたしの時、貸してくれない？」

ぎやはは、と冗談で笑い飛ばされて心が軽くなった。

二次会に変更しても快く承諾してくれるなら、硬くて面白くないかもしれない披露宴に、無理して友人を招かなくても済む。

父親の病院関係者の面々と、頭が赤やら青やら、スーツなど着たことがないという楽しい連中が同席すること自体、どこか無理がある気がする。仲の良い友人との二次会が待っていると思えば、披露宴の重圧も我慢できそうだ。

そう言つと、アキも同情の相槌を寄越した。

カオルが人見知りなのは、彼女も知るところ。自分ならここぞとばかりに二回はお色直しをし、医療界の重鎮の祝辞に、投げキッスで応じることすらできるだろう。もし、挨拶の最後まで眠らずに聞いているならね…とまくしたて、二人で笑った。

「ノンちゃんは？最近どうしてるって？」

「占いの館、順調らしいよ！週末はアウトレットモールに出張して、タロットやつってるって」

恐ろしいほどよく当たっていた占いを、結局商売にしまった。完全に出来高制の世界なのに、その度胸と自信に感服する。

「あたしももつと頑張らなきゃ。パーティーのことばかり考えて、自分のことみたいに今からウキウキしてんのよ。お陰で仕事は上の空！」

アキは短大時代から渋谷のショップでバイトをしており、卒業後

もずっと働いていた。つい最近、社員に昇格したと喜んでいた。

「こつちのために、またバイトに降ろされないように気を付けてね。責任持てないんだから」

「そうだよねえ。もしクビにでもなったら、それこそ結婚しちゃうか！」

「わー、そんな話出てるの？」

飄々としたジユンがプロポーズをしている場面など、まったく想像できない。

「出てるなら、こんな言い方しないってば。三十歳くらいまでなら待っててあげようかなあ、と」

ライブをやれば、面識のないファンが集まってくれるくらいにはなっている。しかしメジャーデビューとか、バイトを辞めてやっていけるとかいうレベルまでは程遠かった。音楽に対してプライドのあるジユンが、おいそれと結婚して安定しようなどと思う訳がない。「先は長いね、いろんな意味で」

「あ、一抜けしたような言い方だな！いいいいよ。ユウがもって人気出して、こつちにファンを流してくれるのが頼みの綱なんだから。ドラマの放送が始まってからお客が増えたような気がするの、絶対ユウのお陰だもんね」

例えモデル業の方でファンになったとしても、世間様が歌を聴いてくれる機会を増やしてくれるなら、ジユンとしては文句ない。逆に、作曲はほとんどがジユンの手によるもの。ユウにしてみれば、自分にいくら人気が出ようと、ミュージシャンとしてやりたいと思ったら彼抜きには成立しないのだ。

要するに、持ちつ持たれつ。バランスの取れた二人ユニットということ。

しばらく話し、ジユンにもよろしくと言って電話を切った。

窓の向こうに、細い月が輝いていた。敢えて電灯を消し、眺めてリラククスする。

遠く離れて逢いたい時は、月を鏡にすればよい…

月よりも遠いあの人と話すことなど望むべくもなく、誰かと話したくて、その誰かを求めるなら今はユウしか思い付かない。ベッドに座って月明かりを浴び、携帯の眩しい画面を開いた。

SOMETHING BORROWED 6 (後書き)

最後の数行に出てくる「逢いたい人」というのは、処女作の「幾望の月」に出てくる未来人・ナツネのことです。

本当はつらつら彼のことを想うモノローグが入っていたのですが、さすがに長く書くには今更な気がして、大分割愛しました。

今作から読んでくださっている方のため、この部分を全部消去してしまおうかと思ったのですが、カオルのに無理でした。

最初から全部読んで下さっている方が、ふわっと懐かしく思ってくださいれば、それも悪くないかな^^わからない方、シリアスな小ネタくらいに思ってください。

数コールも待たないうちに、ユウが電話に出た。

「ユウ？」

「ああ、どした？メール読んだ？」

「うん」

「…どうしたんだよ」

励ますような優しい響き。会って直接話すより遠く聞こえる声に、長い付き合いをもともせず、胸が疼いてしまう。

「ちよつと、声が聴きたくなった」

次の朝が早いと話していたが、今はギターでも弾いていたらしい。ぼろん、とクラシックギターの絃の音がする。

「俺も聴きたかったよ。何でだろうな？昼間ずっと逢ってたのに。」

「カオルさあ。本当に納得してる？大丈夫か？心配だよ」

「納得したから、やつと動けたんだよ。…皆を振り回して悪いと思ってる。ごめんね」

「逆だよ。レン兄なんか、ぐいぐい割り込んでくるだろ？天城の都合だなんて言い訳振りかざしてさ。質素にやりたいっていうのは、俺も凄くいい考えたと思ってた。俺たちらしいって。でも今日話してて、俺も凄く披露宴やりたくなった。だからレン兄を強く撥ね退けられなかったんだ。ごめんね」

「格式のこと？私の方が気が回ってなかったんだから謝らないですよ」

電話口の向こうが、ふふ、と柔らかくなった。

「違っつて。親の立場なんて俺も気にしてなかった。ていうか、今も別段気にしてない。」

シン兄って、やっぱり天才だよな。あのドレス、カオルが着たらどんだけ綺麗なんだろうって思った。全世界の人間を招待して、この世界一綺麗なのが、俺の嫁さんだぞーって、叫んでやりたい気になった。ちよつとした結婚式だけじゃ、やっぱり勿体ない」

かああ、つと頭に血が昇る。

たまに臆面もなく齒の浮くセリフを言う癖があるのだが、本人は全然自覚していない。自分に至っては、リアクションのストックなど持っていないというのに……

携帯を握る手も顔も熱くなり、思わず立ってしまった。所在なくデスクチェアに移動する。やっと一言捻り出そうとした返事は、自分らしくも陳腐なものだった。

「ユウったら……」

「お世辞だなんて言うなよ？カオルは誰より綺麗だよ。何着でも、シン兄がいいって言うだけ着たらいい。緊張することなんてない。俺がずっと横にいるんだから。な？」

返事が、何も出なかった。まるで初めての告白を受けたかのように、喉が詰まっていた。

「カオル、愛してるよ」

「……」

いつまでも、聴いていたい声と言葉。圧倒されてしまう。

「ほら、なんだよ黙っちゃって。返事は？」

「ユウ、困る。潰されそう」

「何に？」

「心が、いっぱいなの」

「うん」

「私も、愛してる」

自分とは違い、軽くいつでも愛情表現できる彼女ではない。丁寧に絞り出すような上ずった声が鼓膜に当たり、ユウの脳を撃ち抜くように、甘い衝撃が走り抜けた。

どうして明日、朝六時からロケに顔を出すなんて言ってしまったのだろう？

初の演技は緊張の連続で、初めのうちは昼食の弁当も喉を通らなかつた。

自分の出演シーンは既にクランクアップしたい。だからこそ気

楽になった今、全体がどう動いているのか、プロの役者がどんな風に演じているのか、一歩離れた位置から眺めて勉強したかった。

仕事は貪欲に、全力で。そんなレンやシンを見てみると、のうのうと休んでなどいられなくなってくる。しかし今だけは、カオルの目の前にいないことが悔やまれてならなかった。同じ会話を抱き締めてしていたのなら、天にも昇る幸福を感じられただろうに。

夏が来ていた。

当初の公営の教会は解約し、都心で便利な、落ち着いた雰囲気のホテルを予約した。レンと弥生の結婚式場ほど大きなホテルではないし、披露宴の収容人数も多くない。きっと文句の一つでも言うだろうと覚悟していたが、レンもあっさりと賛成した。

父親関係で言えば、三男なのだから自分の時ほど大勢は招かない筈だ。お前らしくていいんじゃないのか？とすんなりスルーされ、むしろ驚いてしまった。

実はこの長兄、二人から聞くよりも先に母親からホテルの名を聞き出し、仕事帰りに下見にまで行っていたのだ。結婚式場を探しているが、彼女が都合悪くなったので一人で来たのだと言い訳し、ホテルマンから一通り説明まで受けた。

成程、と思った。

会場は確かに広いとは言えない。チャペルも狭く感じたが間接照明が暖かく、外国の誰かの家に招かれたような気持ちになれる空気だった。そして別の出口から外へ抜けると、真っ先に東京湾が目に入る。

式が真冬になったことだけが気になったが、ホテルマンによると招待客には防寒具を渡し、写真撮影などの時間を調節することで問題なくやっているとのこと。

あいつらにしては、なかなかじゃないか。

弥生に話すと「そこまでやる？普通！」と手放して呆れ笑われたので、本人たちには絶対言うなと釘を刺しておいた。

いいじゃないか別に。反対している訳じゃない。ただ…そう。面白いだ。

父親が影薄いまま淡々と、自分が呼びたい大量の招待客リストを

用意していたので、実家に帰った際にそちらもフォローしてやった。「お父さん、人数的に全然入りません。僕の時の半分にしなないと。それから、奴の音楽友達が来ることもお忘れなく。少々頭のおかしいのがいても大丈夫な相手かどうか、よく吟味してください」  
なんていい兄なんだ、僕は。

愛莉に嫌われている現状は変えられず、相変わらずの激務にも関わらず、裏の仕事がなくなった分だけ暇になったことを実感していた。

裏稼業のなくなったレンの、今の趣味：身内への介入、のみ。  
そんな自分に、気付かず이었다。

「お疲れ様です！お先に失礼します」

シンが居住して引き籠っていた頃とは違い、事務所にアトリエの鍵を置けるようになっていた。カオルがアトリエにいる意味がなくなり、基本的に事務所です仕事するようになっていた。

彼女の場合、実働隊のパタンナーたちに比べると早く帰れることが多い。帰り際、飲み物が切れてないか、夜食の準備は必要ないかと気は配っていたが、用もないのに居残っているのは邪魔になるだけだ。

皆のカップを回収して洗い、帰宅するところだった。

「待って、先生から」

翠が幾分ピリピリとして、受話器を手渡した。

自分はKIDSでキリキリ舞いしているというのに、シンは呑気にも、仕事外でカオルのドレスにかまけてしまっている。否、仕事は完璧なのだが、のんびりした態度の電話を受けると、つい穿った見方をしたくなる。

プライベートがないことで仕事の顔しか見せなかった時代、ストイックで破滅的な彼に好意を寄せていた。デザインはデザインだから、仕事とその他のライン引きも曖昧。それは確かにシンらしいとも言えるが、翠としては複雑な心境だった。

「すみません。…はい、カオルです」

カオルは神経を尖らせている翠の横で受話器を耳に当て、ついつい硬い口調で電話を受けた。ピリピリは正確に伝わっている。こちらまで楽しそうに会話してしまつたら、とばつちりが来てしまいうだ。

シンの声は至つて柔らかく、これでは翠の神経を逆撫でするのも無理はないだろう。

「よかつた、まだいたね。仮縫いの途中なんだけど、シルエットまでできたからアトリエに寄ってくれる？こつちを見た上で、そろそろカラードレスも相談したいんだ」

「すぐ行きますね」

返事を短く切り、翠に会釈してビルを後にした。

夏本番。日の長い夕方が、ゆらゆらと暮れようとしていた。エレベーターを上がり、事務所から持ち出した鍵で開ける。

「お邪魔します」

ソファもガラステーブルも隅に追いやられ、リビングの真ん中にトルソーが一台据えられていた。なんだか部屋中が布だらけに見える。

材料が散乱しているのはいつものこと。しかし、数日前にはなかったドレスの基本形が、首のないそれに着せられていた。トレーンが長く、床一面というほど広げられている。

「本来、こういうのは事務所の奥で作るのが正しいね。狭くて困る」  
シンが苦笑し、彼女が布を踏まずに進めるように手を貸した。

「凄い…」

「まだまだこれからだよ。着た状態で、裾のフリルとレースのバランスが見たいんだけど、試着いい？」

確かにスリットは入っているが、裾には何も付いていない。今着たら、太腿まで露わになってしまう。

「わかりました」

余裕で頷いた。採寸の時とは場合が違う。ドレスが目の前にある

高揚感が勝っており、脚を露出する躊躇いを打ち消していた。

シンはトルソーから仮縫い状態のドレスを外し、動かさなくても足を入れられるように床に置いた。

「くれぐれも、仮縫い段階だから気を付けて。それから、下にこれ使ってみて」

真新しいシルクのコルセットを渡され、シンは一旦、引き戸の奥に下がった。

カオルはコルセットの着け方を研究し、なんとかドレスに足を踏み入れた。持ち上げるが、見た目よりも布地が硬くて重い。トレーンが後ろで邪魔し、一人では無理だと思われた。

「シンさん、あの、着れません！ていうか、ちょっと待って！」  
がらりと入って来られたら、太腿どころの騒ぎでない一大事だ。着た形になるように前を隠してしゃがみ、もう一度声をかけた。

「そうか、慣れないと無理だったね」  
布を避けて三步で近付き、シンが腰下の重い布を持ち上げて手伝った。真っ赤になって胸を引き上げたが、コルセットで背中が隠れているのが、なけなし程度の救いだった。

きついファスナーがギギツと音を立てて上げられ、姿勢を正すと不完全とはいえドレスを身にまとっていた。がっしりと守り込むようなフィット感は、妙な安心感をもたらしてくれる。そして同時に感じる、違和感：

「あのー、ちよつと、気になるんですけど」

「どうしたの？」

「すーっごくウエストがきつくて、胸がスカスカなの」

シンは上から下まで眺め、うんと頷いた。

「いいよ。ウエストはきつくて当たり前。披露宴ではどうせ食べられないしね。胸も下着の補正前提だから、計算通り。デザインにこだわらないなら、下着も他社にオーダーで注文しておくけど、どうする？」

「自分で変に選ぶより、プロの採寸表にお任せした方がいい気がします」

楽しげに頷き、彼はドレスと共布の長いものや、銀系が薄く入ったレースを手にとった。そして膝の前に座り込み、定規とメモを用意して幅を測り始めた。

ドンドン、とドアが叩かれ、シンが開けに行った。

新人スタッフたちが二人揃って顔を見せ、ドレスへの感嘆で、急に賑やかになった。

「レースのギャザー寄せたり、モチーフ作ったり、いろいろ頼んでるんだ」

「すみません、よろしくお願いします」

「カオルさん、綺麗っすねー！」

紅一点ならぬ黒一点でSHINEに入社した三浦が驚嘆する。もう一人の、小柄で地味な佐野も憧れの眼差しを送っていた。服飾の専学を卒業したばかりの新人。食い入るように師匠の後ろに控え、バランスを決める作業に見入っていた。

測り方、なんて基本はわかっている。定規と筆記用具があればいい。どのバランスでシンが納得し、何層のレースを美しいと思うか。その美的感覚を盗みたい。

カオルはただ立って、言われるままに左脚を一步踏み出したり、お辞儀を試みたり。

幅を決めるとドレスを脱ぐことになり、締め付けるコルセットからも解放された。

もしかして、ユウだけじゃなくて、私も痩せなきゃダメかもしれない…

和気あいあいと社内コンペの話しながら手を動かす二人に後を頼み、美術書の並ぶプライベートゾーンでカラードレスの打ち合わせをする。

見本として結婚雑誌を開き、色やシルエットの好みを突き合わせた。

「方向性はこれでいいね。僕ももう少しイメージをまとめて、できたら今週中にデッサン仕上げておく」

「シンさん、私が言うのもなんですけど、本当に無理しないでくだ

さいね」

外が暗くなつたせいか、蛍光灯の下で見るシンの顔は、うっすら青白く見えた。

「うん。歌姫さんのドレス、もうじき納品だから。やっとこっちに手が掛けられるようになったんだ。彼らが頑張ってくれば、マーメイドもあと一息」

あとはお楽しみだから、と帰され、夕方の蒸し暑さの残る街を歩いた。

歌姫のドレスはスタッフの手に渡り、事務所の奥に鎮座している。ねつとりと肌に吸い付きそうなシルエットのドレス。純白なのにウエディングとは印象が被らないほど、セクシーなものだ。

ラインストーンの蝶が腰と胸に舞い、背中には立体的に膨らんだレースの翅が踊る。

その納品&リハーサルの場合、シンと植草にくっついて同席できることになっていた。

シンが知らないということで、アトリエ内ですっかり「歌姫さん」と定着してしまつたが、若干十七歳で天才アーティストと持て囃されているMILLIE ミリというミュージシャンだ。

ユウには散々羨ましがられたが、これも役得。飽くまで仕事だし、ちよつとしたご褒美があつたついでいい。

誰もが知っているアーティストと自分が、同じ人が同じ時期に作ったオーダーメイドのドレスを着るということが、現実感なく嬉しかった。

キッチンでかたことと音がし、肉じゃがの匂いがしていた。

シンは指定席であるラグの端に座り、モチーフの花を作るべく、せつせと手を動かしていた。

ドレスの共布をリボン状に長くし、結び目を芯にして巻き、花弁に見立てて縫い付けていく。トレーンにまで大量に付ける計画で、大雑把ながらも最大と最小、両方のサイズを見本として用意したかった。それさえあれば、あとは三浦と佐野に数を増やしてもらえばいい。

たった二つだけ。手慣れた作業な筈なのに、今夜はなんだかうまくいかない。考え事をしているからだろうか。

「シン、食べるぞ」

頭の中は、カオルのカラードレスの構想で一杯だった。色は寒色系がいいという希望だったが、シンの頭の中で、かなり微妙な色の選択をしようとしている。青という青でなく、緑との中間に近く、とにかく早いうちに、あらゆるメーカーのサンプルを浚って選ぶうと思っていた。気に入ったものが見つからなければ、染色から頼まないといけない。その工程と期限までも見積もっていたのだ。

さつきからユキが何事か日常の話をしていたが、碌に耳に入っていない。うつすらと申し訳なく思うが、生返事を承知で話しているとも思っている。しかしさすがに夕食が冷めそうだと危ぶみ、ユキがわざわざ肩を叩きに来た。

「おい、もうよせよ」

「あ、うん」

仕事、特に手作業のものは、極力家に持ち込まないようにしていた。約束している訳ではないが、デッサンすることはあっても、針を握ることなど滅多にない。習慣を曲げてでも作業しているのは、ひとえに多忙故だった。時間が足りない。SHINEとしての仕事

が優先なのは自分も三浦たちも同じだが、それにしても予定より遅れてきている。

スタッフは、通常の仕事の後に好意で来てくれている。今日も必死に手を動かしていたが、疲労の色が濃く、早めにお開きにしたのだ。

終えようと思ったところまで終わらないと気が済まない、悪い癖。後ろ髪を引かれる思いで、裁縫道具を片付けた。

「手、洗ってくる」

くらっと、立ち眩みがした。ユキが冷蔵庫を覗いていたのを幸運に思う。大したことなくても気遣われてしまうのが、悩みの種だった。

視界が明るく戻ると同時、胃の違和感が始まった。頭もズキズキし、作業がはかどらなかつたのは、考え事よりも疲労だったことを遅れて自覚した。

ああ、少しまずいかもしれないな…

慣れっこになりつつある症状を解消しに、リビングを出た。

「早くしないと、味噌汁が冷める」

ユキは箸を揃え、冷たい麦茶を二つ用意した。クーラーを弱めに付けていたが、なんとなく蒸している。ビールがあれば言うことないが、シンに付き合って禁酒していた。

「ごめん」

笑い顔を作っていたが、戻ったシンの顔色は明らかに蒼い。椅子を引く手が力加減を失い、かくつとおかしな動きをした。

「シン、お前」

「何でもないよ。食べよう」

不承不承、黙り込んだ。遮るような言い方に心配が募る。

シンは食欲なさそうに、トマトを突いていた。ユキの後ろの壁を見詰め、考えに耽っている。

「シン、集中して食べって」

「ん」

はつと我に返り、嫌いな種を選び落としたトマトを一口に入れた。碌に噛まず、また壁を見る。

ユキが動いた。最終手段を取り、シンの隣の席に移動する。焦げ目が付くまで焼いた椎茸を半分に千切り、シンの口元に持っていく。「あーんしな」

大人しく口だけ開け、目を閉じたまま噛んでいた。醤油の香ばしさが口に広がる。その香りであろうやく、自分で口に入れたのではないことを思い出していた。

飲み込んで、ゆっくり一息入れようというところで、また唇に箸が当てられる。いいよ、と言おうとした口に豆腐が入ってきて、完全に我に返って喉に通した。

「自分で食べるから」

「そんなこと言って、こうでもしなきゃ食べないだろ？」

「食べるよ」

「顔色悪い。吐いたのか？出血は？」

「…大丈夫だよ。薬飲むから」

ユキが悲しそうに箸を置いた。茶碗に触れて、カチンと寂しい音が鳴る。

「シン、そういうことはちゃんと伝えてくれ。隠してて、いいことなんてないから」

「心配させる」

「言わないと、余計心配だよ」

「心配して、無理に食べさせようとする。僕にだってペースがある。今浮かんでいるものを覚えておかないと、逃げてしまったイメージは二度と戻ってこないんだ」

茶碗と同じ音色が、ユキの胸の中でも響いた。眉尻を下げ、唇を固く閉じて返事を考えている。その間が、静寂が、シンにとっては怖い。

せっかく作っただんだぞ。無駄にしないでちゃんと食べ。

そう言って怒ってくれれば、気が楽なのに。

でもユキは、僕がそう思っていることを知らない。

彼の口から出た返事は、やはり気遣いの言葉だった。

「…そうか。無理することはないけど、でも少しは身体も気にしない」と

「わかってる、わかってるよ。でも辛い。プレッシャーなんだ」

シンの体調に不安を覚えているのは、ユキに限った話ではない。

実際に変調を味わい、ビクビクしながら手洗いに立つのは、他の誰でもなくシン本人なのだ。

一言「辛い」と口にすると、不安が留まることなく噴出した。静かに手を組み、俯いて角の崩された豆腐を見ていた。

「身体のことなんて、ちゃんとわかってる。出血なんてたまのことだし、したとしても薬を飲んで少し眠れば、ちゃんと回復する。吐くのだって、その時さえ我慢すればスッキリして終わるんだよ。こうして、直後に食事できるくらい…」

苦しい時もあるけど、もしかして一生付き合うことになる体質かもしれない。体調に振り回されるのは嫌だ。一回甘えてしまったら、二度と創作できなくなる気がする」

言い尽くすと、もう後戻りはできないように感じた。どれだけ我儘を言っているかわかっている。ユキを傷付けていることも。彼が、どれだけありがたい存在かということも。

全部、全部わかってる。

情けなくて涙が浮かび、ぐしゅっと手で拭いて席を立った。

説明なんてできない。言葉で伝わる訳がない。必死で語り尽くす、体力がない。

今甘えさせてもらうとしたら、包むような優しさではなく、放っておいてもらうことだった。

リビングには、ぽつんと座ったままのユキが残された。

シンが自室に籠ると、彼は重い身体を引き摺るように、料理を下げた洗い物をした。

料理が無駄になるとか、好意が無にされたとか、考えようと思つたこともない。余つて捨てる食材には申し訳ないが、手間に関しては、苦痛だと思つたことなど一度もないのだ。

自己満足、か。そうだな、そうなのかもしれない。

口を真一文字に引き締めて皿を洗い、シンクの隅を磨いて光らせた。コンロや換気扇も掃除し、リビングまで綺麗にする気になった。エアコンのフィルターを掃除し、テレビ台や窓枠をササツと拭いて回り、モップを掛け、何もかもをきちんといた位置に整頓した。

部屋中がピカピカになってしまつと、所在なくソファに寝転んだが、無音の暗闇で眠るような気分でもない。

何の気なしに付けたテレビは、深夜のテレフォンショッピングだった。そのわざとらしい演出。出演者は絶えず騒いでいるのに、不思議なほど淡々とした、繰り返しの映像。

妙に安心できた。朝までずっとそれは続き、ソファで軽く眠るにはいい子守唄だ。

一人のベッドで落ち込んでいるシンの様子は想像できず…否、切なすぎて想像することを拒否し、直視しないようにしていた。

ストレスに打ちのめされ、自滅している彼を癒やせる唯一の存在…幻想だ。

心を無にして掃除に励んでも、彼に辛い思いをさせている事実が無くなる訳じゃない。

自分がストレスを与えている張本人なら、今扉を叩いても可哀想なだけ。できることなら今すぐ抱き締めたいけれど、機嫌を取るためだけに謝り、この先の健康管理を投げるつもりもない。今は、距離感が測れない。

シンはきつと、今の自分以上に自己嫌悪してる。それでもすぐに謝りに来ないのは、意地を張っているのではなく、徹底的に自滅しないと動けない性格だから。

それを認識しているだけでも、相当に理解できている証拠だと自負している。

シンを信じて、少し放置してあげよう。心配する余り、お節介の加減を見失っている自分にも、頭を冷やす時間が必要だ。

うねうねとした悪夢にうなされ、いつも以上に早く目が覚めてしまった。

シンキチが、ケージの中で爪を鳴らしてソワソワしている。切り替えるように伸びをし、壁に掛けてあるリードを手にした。

翌日も、シンはアトリエで忙しくしていた。上の空、自滅警報発令中。体調悪化のオマケ付き。極力事務所に顔を出さず、簡素なソファで休みながら仕事をしていた。エネルギーを使うデザイン作業はやるだけ無駄だが、ノロノロとでも色の手直しをしたり、指定の説明メモを確定させたり…調子が悪いからといって、完全に休める身分ではない。

夕方にはまた新人が揃い、途中になっていたレースのギャザー寄せに取り掛かった。申し訳なく思いながら、単純作業をすべて任せ、横になっていた。

ああ、嫌だ。今、まさに体調に振り回されている。でも、動きたくない。

どんなに嫌な流れだろうと、昨日のイメージを棒に振ることはできなかつた。寝たまま色鉛筆の束を床に置き、白い画用紙に色を塗った。青を置き、黄色を掛け、試しに隅でモスグリーンを載せ、力尽きた。

新人たちはシンの顔を見て血相を変え、できるところまではやるから任せてくれと頑張っていた。どちらにしても、今日のところは戦力になれそうもない。結局シンは、彼らの夜食の金を置き、作業を指示して先に帰宅した。

自宅の玄関の鍵を開ける時、言いようのない不安と違和感を感じた。シンキチの、帰宅を歓迎する鳴き声がない。

廊下もリビングも真っ暗だった。ユキの勤務時間はとくに終わっている。彼が出勤した後に起床した時、シンキチは確かにケージで水を飲んでいて、ということとは、一度帰宅しているのは確かだ。

散歩は必ず早朝。もし夜、突発的に散歩に出たとしても、夕飯の気配すらさせていない事態など考えられない。

胸に暗い靄が広がる。

リビングの中は、妙にすっきりしていた。ユキによって普段から片付けられているが、ラグが真っ直ぐ敷き直され、フローリングのラインとピッタリ合っている。クッションの置き位置も整えられているし、普段は使わないテーブルセンターも掛けられている。そして、花瓶には数輪の白い薔薇…

「ユキ…」

深く落し込まれるような、空虚な感覚。

暑さに負けて腰窓を開けると、大通りを車が行き交う、ゴーツという地鳴りが聞こえた。ただ熱風が頬を撫でるだけで、少しも涼しくない。

騒音が耳に付き、耐えられなくてまた窓を閉じる。クッションを抱えてソファにすっぽり収まった。エアコンのスイッチを入れ、静かに身を横たえる。

浅く眠った。昔のような、失うものがない自分勝手な沈没ではない。大事なものを失うと、こんなにも現実感が持てないものかと、遠くで驚く自分がいた。

本当は、一口でも食べて薬を飲まねばならない。わかっている、冷蔵庫を開ける勇気も、薬を用意して飲む気力も持ち合わせていない。

夜半に、はっとして目が覚めた。物音がしたと思ったのは、願望混じりの勘違いだった。鳥肌が立ち、部屋が冷えすぎている。エアコンを調整し、ついでにテレビのスイッチを入れた。

昨夜、うつすらとテレビの音がしていた。ユキは朝、テレビを点けない。今日、帰宅してテレビを見るほどの時間はなかったと仮定すると、チャンネルは昨夜のままということになる。

それは、テレビショッピングの番組だった。

口紅の濃い女の司会に、商品の宣伝をする社長が大袈裟にまくし立てている。野暮ったくて太身のダブルスーツに、一瞬で嫌気が差

す。

ピンクダイヤモンドのトップが付いた、二連のネックレス。お揃いのイヤリングもセットで、まさかの六万八千円？この大きさの石で、そんなに安くできるものだろうか。まがい物じゃないのかな？まがい物。

移ろい、そよ風でもぶれてしまう心。

僕は一体、何のために生きているのだろうか？ユキのためなら、仕事など簡単に辞めるなんて言っていたのに。いいや、今でもそう思っているつもりなのに。

死に物狂いで予定と創作をこなし、それがさほど苦痛でないからこそセーブすることができない。そのために彼を振り回し、哀しい想いをさせているに違いないのに。

突きつけられて考えないと、普通の人が簡単にわかることがわからない。僕は、馬鹿だ。

深夜にも関わらず、彼は戻らない。もしかすると、ずっと？

彼の愛情を真正面から否定した罰だ。駄目な自分に対して、いい気味だとまで思う。他人事のように、自分を無視した。問題から目を背け、今夜だけでも逃げられるものなら逃げたかった。

そうでないと、壊れてしまうから。

## SOMETHING NEW 4 (後書き)

明日は番外編の短編を公開します。短編といっても2〜3日に分けての投稿という形を取るのです、その間本編はお休みさせてください。短編「安らかに眠れ」は、「family」の緑青3の直後の話です。

私としてはシンやユキが我が子のように可愛くて、ナチュラルにラブシーンを書きたくなりました…

ぬるいR15ですので、ここまでの物語を読んできださっている方には、大した抵抗ないかとは思いますが。

しかしBL色が強いので、拒否感がある方は、本編の更新をお待ちくださいませ。

以上、お休みの予告&短編の宣伝でした

SOMETHING BLUE 1 (前書き)

本日、遅めのアップとなりました^^；  
3日ぶりの本編をどうぞ。

植草が豪快に運転するバンが、収録スタジオに到着した。シンがどよーんとした空気を放ち、外ばかりを見ている。

「久々？今日に限って？なんとかしなさいよ」

「無理ですよ！せめてユウがいてくれないと」

事務所を出る前、植草とカオルがヒソヒソと言いつたが、ユウは既に郊外のロケに参加していて連絡が取れなかった。

社長なんだから、ピシツと体型に合ったものを着てくださいね！とスタッフが用意したスーツの、身頃が少し余っている。

ユキと同居して一度はふっくらとした筈なのだが、その時の採寸で作ったものがスカスカということは…やっぱりまた痩せた？

ユキが付いていながら、というのは正しくない。聞く限りの体調から言つて、彼なしにここまで維持することはできていなかっただろう。

カオルは時たまシンの様子を窺い、当たり前障りない会話を振っていたが、返事もなかなか返らなかった。

大きなロビーを通り、廃墟を模したセットの組まれたスタジオに入室した。プロデューサーや監督と挨拶し、MILLI様と書いてある控室へとドレスを運んだ。

「おはようございまーす」

ミリは腰までの長いくるくるの茶髪を一本にまとめ、テレビの印象とは違う、地味な格好だった。ヘアメイク前なのだからスッピンは当たり前だが、それでも顔のパーツが大きく美形で、華は隠されていない。

しかし…こういうものなのかしら？

ミリは椅子から立ちもせず、携帯を片手に握ったままだった。長い脚を組み、PVの台本を前に広げている。ペットボトルの蓋ですら、マナージャーが開けてやって前に置く。

「あー、エビアンだ！国産って言ったじゃない！」

その上、まだ文句を垂れている。

直後にヘアメイクのスタッフも到着したが、仲のいい専属スタッフらしく、こちらを放って親しげに世間話を始めてしまった。

カオルは植草と、廊下のトルソーを中へ運んだ。動きのあるデザインと繊細で華奢な作りなので、ハンガーという訳にはいかず、廊下でも美しさと嵩張り方で人目を惹いていた。

メイクし始めたミリが、到着したドレスに目を留めた。

あつと息を呑む。

そうでしょ？綺麗でしょ？

カオルが内心勝ち誇った瞬間、彼女は初めて立ち上がり、大声を上げた。

「違う！これ、言ったのと違う！」

上の空だったシンがはつと顔を上げ、目を合わせる。植草が間に入り、愛想笑いを浮かべた。

「あの、何度も打ち合わせて決定した筈ですが」

「違うよ！形はこれだけど、色が…そう！別のデザインのと色だけ差し替えてくれて伝えたもん」

ヘアメイクの女性が無言で下がり、あつという間にプロデューサーと監督が顔を出した。

「ミリちゃん、どうしたの」

「あ、大竹さん、ミリ、シルバー調に変更してくれて言ったよね？」

「あー、そっぴやそっぴだね。電話した筈だけだな」

「いえ、受けていませんね」

「しかしミリちゃん、これも凄くいいよ。どう？ダメ？」

「ダメ！このデザインで、シルバーじゃなきゃ！イメージが変わっちゃう」

やいやいと総出で懐柔しようとするが、彼女は一向に軟化する気配がなかった。

プロデューサーにしても、SHINEの事務所に自分で電話した訳でなく、スタッフに伝言してのこと。結局どこで情報が寸断されてしまったのか、解決することができなかった。

シンは疲れに耐え、珍しくイライラして眺めていた。ミリに対してではない。彼女より倍も三倍も年上の大人たちが上辺だけの笑顔でご機嫌を取り、犯人探して時間を潰している。そんなこと、どうだっていいのに。

すっと、立ち上がった。メイク道具が広がるカウンターを背に、ミリはまだまくしたてている。

「じゃあさ、リハだけこのドレスでやって、モニター見て考えようよ。もしかしたら、白でもいいと思えるかもしれない」

「ダメだと思つたら？本番を遅らせられるの？延期して、限られた日数で作り返せるの？」

植草も、困り果てた声になっていた。

「それは無理かと。作り直しは構いませんが、日数については…」  
シンは下らない言い合いを余所に、メイク道具の中に見つけたそれを手に取る。

「これ、もらえます？あと、こつちも貸して下さい」

白熱した中での、唯一凧いだ声。怒鳴るよりも際立ち、一瞬室内が静かになった。

「ええ、どうぞ」

ヘアメイクのスタッフが怪訝そうに頷くと、シンは蓋を取りながらドレスの前に立った。一番太い、刷毛のような化粧筆で銀粉をたっぷりと取り、ラインストーンで描いた蝶の翅の隙間を埋めた。全身を銀にするには足りないが、飛翔する蝶の軌跡を描くように、立膝を付いて大胆に粉を付けていく。

背後に回り、最後に残った粉を翅に振り掛けた。筆の柄でガラスの瓶の底をコツコツと叩き、完全に空になった。

呆気にとられた控え室の面々。ミリが頬を紅潮させ、ぱち、ぱち…と手を打った。

「どうかな？僕は、全身シルバーより、ずっといいと思うんだけど」  
「…いい、これで…ううん、ミリこれがいい！」

「どンドン崩れるから、他の番組に使い回すことはできなくなってしまったけど…」

「いい。PVとテレビじゃ、最初から全然違うもん」

監督たちは肩の荷が降り、感謝感激の握手を求めて出て行った。  
シンも続いて出ようとしたが、ミリが扉に立ちはだかつて止めさせた。小悪魔的な上目遣いを正面から受け、彼はたじろいだ。

表情ではなく、他人に至近距離に割って入られたことによる動揺しかしミリに、その個人的事情は伝わっていない。

「ねえ、シン先生？もしミリが、これでもダメだって言ったらどうしてたの？」

彼は息を吸い込み、一步後退した。ミリと距離を取ることで、なんとか穏やかな口調を保つことができた。

「スタッフにお任せだね。植草さんたちは有能だから、僕よりいい考えを出してくれる」

「でも、そうしたらこのドレス、お釈迦だったよ」

「これはあなたのためだけのドレスだから。あなたがダメって言うなら、存在自体に意味がない。それに、出来上がったモノにはそんなに執着心ないし」

「そんなものなの？凄い作品なの？」

「僕が言うのもなんだけど、ドレスはただのドレスだよ。重要なのは、あなたの歌をどれだけ引き立てるかどうか。応急処置でも、気に入ってもらえてよかった」

できるだけ変に思われないように。できるだけ大人らしく、デザイナーらしく。

頑張つて投げかけられた柔らかい笑顔に見蕩れ、ミリの瞳がくつきりとハートになっていた。カオルは見逃さず、内心ハラハラと見ていた。

無理無理！ちよっと、シンさんも気付いてよ！口説いてると思わ

れても仕方ないセリフ、言っちゃってるってば。

「ミリ、次のドレスもシン先生に頼む！んで、一杯宣伝してあげる！」

会話終了の気配に、シンは完全に気を許した。人に何かアドバイスできる身ではないが、今後も注文されるのならば…という思いで、先を続けた。

「ありがとう。次こそ、連絡ミスがないように」

「わかってる、もん」

「マネージャーさんやスタッフさんを、大切にするんだよ。一人では、こだわりを貫くことなんてできないから」

「…はい」

マネージャーが、驚愕の瞳でミリを見ていた。他人からの忠告や進言を素直に受け入れるところなど、初めて見たのだ。

ミリは一瞬しよぼんとしたが、すぐに復活してシンの腕に腕を絡ませた。

「ミリ、シン先生に惚れちゃった！好き、付き合って！」

シンは両手を挙げて飛び退いたが、ミリは心の底まで勘違いしていた。

「先生、照れてる！かわいい！」

壁に背を当てたシンが、ズルズルと脱力した。不眠に体調不良にユキがないという精神的疲弊。やっと仕事が片付いて気が抜けたところに、突然接触されたショック。あわや貧血を起こしかけていた。

「わあっ先生？ちょっと…申し訳ありません、体調が優れないようなので、失礼します！」

植草とカオルの二人掛かりで抱えるように退室し、後ろから「えーっ！」というミリの声が追い駆けてきた。命あつての物種だ。高額のオーダーメイドを頼んできたクライアントを完全無視し、真っ青なシンを車に押し込めた。

逃げるようにシンを車に乗せると、植草だけがプロデューサーと書類を交わすため、スタジオに戻った。ぐったりと気分悪そうな彼と、カオルだけが取り残される。

「大丈夫ですか？」

「参った」

「どうなることかと思いました。大人、言いなりなんだもの」

「偉いよ。大人相手にあれだけ自己主張できるんだから。…自分の歌なんだから、こだわるのは当然だよ。彼女が正しい」

肘を着き、姿勢を崩す。

あの時の彼女は、見方を変えれば自分自身だった。ただ、少し攻撃的だけ。

「さすが。でも、最後のはもう少し早く、気配をキャッチして欲しいとこでしたね」

「カオルちゃんに言われると、何故か余計にショックだけど」

「それは一体、どういう意味なんでしょうね？」

冗談めかして拗ねたカオルに、ふ、と乾いた笑いを返した。初めて物に色が着いて見えるような感覚。そして、胸の痛みに襲われる。

「でも、シヨック療法で我に返った。現実に戻された。やっと今、目が覚めたみたいだ」

「…何があつたんです？」

「ユキに、嫌われた。帰りたくない…」

口元は笑った形を成して声も笑っていたが、俯いた横顔は角度が悪く、目の表情を隠していた。

「帰りたくないって」

「ユキのいない部屋に、独りでいることなんてできない」

「出て行っただんですか？まさか」

「昨日、戻らなかつただ。シンキチもない。今日、荷物でも取

りに戻っていて、彼の部屋が空っぽだったらどうしよう、なんてね」  
隠れた瞳から落ちた涙が、頬を伝った。手で拭う精神的余裕があることですら、カオルにしてみれば成長を感じてしまう。以前の彼ならば、仕事どころでなく寝込んでいた筈だ。もしくは、開放した冷蔵庫の前で、光を見詰めて無我の境地まで飛んで行くか…

「そんな人じゃ、ないと思うけど」

「それくらい酷いことを言ったんだ。仕方ないよ。僕は泣く資格もない。だからこそ、部屋に戻って…確認、するのが…怖…」

徐々に二つ折りになり、手で顔を覆った。昨夜彼に直接は言えなかった、止められない想いが溢れてくる。

カオルはポンポンと丸い背を叩き、上から下まで何度も撫でた。接触恐怖症気質の彼をどれだけ安心させられる行為なのかはわからないが、少なくとも拒絶されてはいない。ユウほどの効果はなくても、フオローする余地がありそうだ。

「大丈夫！大丈夫ですよ。じゃあ、アトリエに泊まるんですか？」  
激しく首を横に振った。

無人のアトリエは、マンションの部屋と大差ない。仕事色の簡素な部屋にいたら、鳴らない電話を気にしなくて済むよう、身体を壊すまで徹夜で働き続けるだろう。

携帯ですら、鳴らないか気にするのが嫌で自宅に置いてきたのだ。アトリエで過ごすのは無謀な試みだと思った。

カオルは溜息を吐いた。アトリエで一緒にいてあげたいが、昔のような不安定状態になったら対処に困る。ユウはロケの後、一緒に出演したモデル仲間を招いて、自宅で飲み会だと言っていた。彼の部屋もダメ、と。

レンさんの家…は、無理だろうなあ。同じマンションだし、何を言われるか…

「とにかく、現状把握しましょうか」

「？」

「私が、ユキに電話して、聞いてみますよ」

「だっ！駄目だよそんなの！僕が傍にいるの、わかるに決まってる！」

初めて顔をまともに上げた彼の顔は、狼狽を絵に描いたように才口口としていた。

「いいじゃないですか」

「嫌だよ、代理なんて…子供みたいだ」

頬と睫毛を涙でグシャグシャにして。

そうでなくても十分子供みたいなんだけど…と突っ込むのは、ちよつと可哀想かな？

「それに…電話なんかで、はっきり嫌いだって言われたら…立ち直れない」

瞳がウルウルとし、唇をへの字に強張らせた顔。これ…どっかで見たことある？

ああ、なんだ。ユウがいじけた時そっくり。

ユウに弱いから、この顔に弱いんだとばかり思っていた。でも本当は、この顔に弱いからユウに甘くしちゃうみたい。

カオルは一度出しかけた携帯を、ジャケットの内ポケットにしまった。

それなら、きちんと対面して「嫌い」って言われた場合、立ち直れるの？なんて意地悪は、言わないでいてあげよう…

「じゃあ…遊びに行きましょっか？」

「…？」

「お酒は飲ませられないから、オールでカラオケ！事務所のスタッフも誘って。駄目？」

「僕、歌なんて…」

「歌わなくていいの！っていうか、私も音痴だし。他の有能なスタッフさんが、頑張って歌いますから！みんなの大事な先生は、お金だけ出してお茶でも飲んで、ソファで寝てたらいいんですよ」

聞いてみると思いの他、悪い考えではない気になった。どの部屋だろうと、静かな中で孤独を感じるのには耐えられない。

ちょうど植草が戻り、車のエンジンを掛けた。カオルが説明し、大きな仕事の打ち上げという名目で宴会という運びになった。

全員を連れて居酒屋に入ったが、シンが飲めなかったため食事をメイにし、早々とカラオケに移動した。普段はインドアどころか引き籠りの社長が参加ということで、スタッフはかなり調子が狂っていたが、若手は完全な奢りで盛り上がった。明け方まで歌い…正確には、シンはただ聴いて浅く眠り、すっかり日が昇ってからの帰宅になった。

朝が来たところで、事態が変わった訳ではない。シンがタクシーを呼び止めたので、カオルは慌てて近付いた。

「帰れますか？」

「帰る。先延ばしにしたら、どんどん帰れなくなる。ごめんね、わかってただけど、また弱音吐いた」

「…弱音を吐いてもらえる相手に指名してもらえないなんて、光栄ですよ。気を付けて、ちゃん帰ってくださいね。気が変わらないように！」

何度も釘を刺す口調がどことなく母親と被り、思わず笑った。

「カオルちゃんは、きつといい母親になるよ」

「…っ！私、真剣に心配してるんですよ？」

「もう行く。じゃあね。ありがとう」

タクシーの運転手が待っているので乗り込み、ドアがぱたんと閉まった。気丈に手を振っていたが、決意が鈍らないようにするので精一杯だった。

重い足を引き摺ってエレベーターを降り、ドアの前で鍵を取り出すと、微かに犬の鳴き声がした。

「！」

慌てて解錠し、勢いよくドアを開ける。

目の前ではユキが腕を組み、仁王立ちで待ち構えていた。明らかに不機嫌で、口が真一文字に引きしめられている。

「こら。無断外泊とは何事だ？携帯は不携帯だし、アトリエにも事務所にもいないし、カオルは電話出ないし、ユウも弥生も知らないって言うし！」

憔悴しきって肩を揉む。疲れ切った仕草。ドアを閉めて一歩入ると、思いがけずに抱き寄せられた。

「ユキ…だって、ユキは」

「まったく…事故にでも遭ってないか心配した」

「ちよつと、待ってよ。ユキがいなくなったから、怖くて帰れなかったのに」

「…ああん？」

身を屈め、恐ろしく怪訝な顔を寄せ、上目遣いで睨みつけられる。「何言ってるんだよ。法事で実家に一泊するって、前日に言ってる？」

「わからないよ、そんなの…」

胸がシクシクと痛み始めた。ほっとしているのか悲しくなったのか、勝手に涙が湧いてくる。

話した？前日ということは、きっとドレスの花を作っている最中だ。そんな集中状態の時のこと、覚えている訳がないじゃないか！「部屋が綺麗で、シンキチもいなくて、花まで飾って…通販のテレビなんて嫌だ。もう、戻って来ないって、言われてる気がした」

「早とちりか？馬鹿だな。そりゃあ、ちゃんと仲直りしないで出た

のは悪かったけど…

部屋は気分直し兼ねて大掃除しただけだし、シンキチだって、世話のために連れて行っただけだろ？花は、店に飾ってあったの生き残り。入れ替えるからって、捨てるには勿体なかったから。…テレビに至っては意味不明だぞ」

苦しみを堪えていた分なのか、涙腺の蛇口が壊れてしまった。優しく言われれば言われるほど、零れる涙を止めることができない。顔を押えて立ち尽くしていると、突然ひよいと軽々しく肩に担がれた。情けない悲鳴が漏れる。

「ユキ、落ちる！」

「じゃあ暴れるな」

スーツ用の革靴を問答無用に脱がされ、自室へと放り込まれる。弾みを付けてベッドに落とされ、ジャケットも脱がされた。間髪入れず、キスが落ちてくる。

「泣き虫め。全然、俺の話聞いてないんだな」

「ごめんなさい」

「白い薔薇が、別れの印な訳がないだろ。忘れた？俺にとっては、お前の象徴なんだから」

「ごめん・なさ…」

「俺より仕事を優先させるのはいい。でも、自分の身体を一番先に考えて欲しい。俺がお前に怒るとしたら、ただその一点だけだ。シン、人間っていつか死ぬよな。いつか消えてしまっけど、これは、この身体は、使い捨てじゃないんだよ。違うか？」

死ぬという言葉に、ぐさりと来るものがあつた。ひたひたと近付いてくる時間切れを思う。…怖い、と。

正直言つて、昔は大した抵抗のない言葉だつた。自ら進んで死を考へることも少なくなかつた。でも大事な人の口から出たそれは、驚くほど恐ろしいものとして突き刺してきた。

もつと一緒にいたい。

いつか死が分かつまで、離れたくない。

そしてその時は、できる限り先がいい。

「…違わ、ない」

「お前が自分をないがしろにしていると、辛い。お前の怪我、俺のせいだから」

「それは違うよ！」

微妙に大きくなってしまったワイシャツのボタンが、上から順に外される。手が滑り込み、真っ先に腰の傷跡に触れた。労わるような優しい指先。

過労が原因。後遺症じゃない。でもタイミング的に、身体にガタが来たのは刺されてからのことだし、ユキは全部一括りにして背負おうとしてしまっている。

「違いやしない。俺は俺のせいだと思いたいんだ。お前を一生護りたい。俺が好きか？」

「誰より好きだよ」

「じゃあ、俺のために協力してくれ。俺のために、無理するな」  
心の問題にすり替えられてしまうと、説得の言葉が継げなくなる。わずかに否定しようとした唇も容赦なく塞がれ、ただの吐息しか紡げなくなった。

ユキの部屋で、携帯のアラームが鳴っていた。目覚ましよりもずっと後に設定されている、出勤を促すための音。気にもせず降り続けるキスに衝動が高まり、止められなくなりそうに困っていた。

「ユキ、仕事…」

「本つ当に、曜日感覚もないのか？月曜は祝日の振り替えて法事、昨日は実家から戻って、午後から店に出た。それで今日は？」

「…店休日」

「よくできました」

ワイシャツを脱がせ、ユキもTシャツの袖を抜いた。深く熱いキスを繰り返して、熱気が高まったことで、ユキは自然とエアコンのリモコンに手を伸ばした。スツと素肌を撫でる冷風に身を竦ませると、構うなと言つように身体を覆い尽くされる。

耳元を柔らかくして温かい声が掠めていった。

「眠いか？」

「…少し」

「当分、眠らせないよ」

甘えて手を握ると指を口に含まれ、指の間の敏感な部分にも舌を感じる。お返しに逆の手に頬ずりしてキスすると、唇を割って親指が侵入してきた。お互いの粘膜を感じ取ろうと瞼を閉じ、薬指のリングの冷たさまで味わった。

広くて白くて物足りないような部屋が、濃密な空気で満たされた。ユキが触れる場所、キスする場所。次々と熱が集中して、冷風なんてすぐに気にならなくなっていた。

なんて馬鹿なんだろう、僕は。持て余すほどの愛情を、たった一晩で諦めて、手放してしまおうとするなんて。

まがい物…ピンクダイヤモンド。

愛情が偽物だから、疑ったんじゃない。本物だから、自分の値打ちが不安になるんだ。

— 昨日の夜から飲んでいない薬の袋…

愚かしい性質が治せるものならば、今このきっかけしかないのだから。

「カーオールー…!」

夕方、珍しく不機嫌な顔で事務所に顔を出したユウは、真つ先に彼女を睨んで指差した。

「どしたの？」

書類を手に、戸惑う。彼女はオールでカラオケの後、植草の自宅に連行され、少しの仮眠の後にバツチリと仕事させられていた。

八月の決算が迫っている。事務所に行ってしまうと植草もカオルも落ち着いて処理できなくなるので、まるで個人レッスンのように濃密にレクチャーされ、ようやく出社してきたところだった。

事務所は通常営業中。全員寝不足ではあったものの、フレックス制を取っているため、火急の期限を抱えている者以外はゆつたりと仕事していたようだ。大きな納品後の和やかなムードの中、新人二人だけがキリキリと動き回り、業務と同時進行で、五時から設定されているコンペの準備に追われていた。

ユウは赤い眼をしてガラス戸から入り、カオルの頬を優しくつつめた。

「ユキ兄から連絡あつて…俺、友達放つたらかして、シン兄のこと捜してたぞ。携帯見なかつたら」

「ええ、どうして？」

ユキからの電話で胸騒ぎがし、飲んで騒ぐ友人三人を置き、心当りに走った。…といつても、泣く子も黙る引き籠りのこと。思い付くのはユキと同じ処しかなく、諦めて帰った後も、心ここにあらずに盛り下げてしまった。

昼前にユキからまた連絡があり、カオルや事務所のスタッフでいたと聞き、八つ当たり気味の気持ちでやって来たのだった。

「普通の兄貴なら、知らせる必要なんてねえよ。普通に飲みに行ったり遊んだり、喧嘩でヤケになつて浮気外泊できるような兄貴なら

でもシン兄を連れ回す時は、必ず連絡してくれ。どこで野垂れ死んでるか、自閉でくたばってるか、事故にでもあってるか、それくらいしか想像できないから」

「ごめん。だつてユキがいなくなつて、怖くて帰れないつて言うから。まさかユキから連絡がいくなんて思わなかつたし。せつかく楽しんでるのに、そんな事情言つたら水差すと思つたんだもん。…ああ嫌だ、本当にごめんね。携帯をジャケットに入れたの、忘れてた」  
皺にさせたくなくて、支給されたスーツはロッカーに置いてある。昨日の夜、バッグに入っていると思ひ込んで、確認もせず私服に着替えたことを思い出していた。

普段ならばしないミスだが、シンの様子が気になり、慌てていたのだ。今日も精力的な植草のペースに付いていくのが精一杯で、一日中、携帯があるか気にすることもなかった。魔が差すとは言うが、タイミングが悪過ぎる。

「じゃあユキ、帰つたの？」

「端からシン兄の勘違いだよ。喧嘩つつう喧嘩でもないし、深読みし過ぎ、傷付き過ぎ。…ユキ兄、ただ法事で帰省しただけだし、ちゃんと泊まりつて言つてあつたんだつてさ」

ユウは八つ当たりをやめ、肩の力を抜いてカオルのデスクチェアに腰を下ろした。

「人騒がせな…！」

どれだけ心配したか、と脱力する思いだった。

「まあ、反省してるみたいだから許してやるべ」

「…ユウって、シンさんにはとことん優しいよね」

「ん？何？どういう意味」

「他意はないけど」

「他意はなくても、その甘さが仇となることもあるがな」

背後からぬつとレンが現れ、ユウが椅子から転げ落ちた。身体に合わない小さなチェアのローラーが滑り、倒れたままからからと回る。

「どついう登場の仕方だよ！」

「なに、聞けばコンテストの衣装を決定するって話じゃないか」  
眼鏡をくいと上げ、休日ファッションの腕を組んだ。

「お休みなのに、暇：なんですか？」

カオルが何の気なしに言った言葉が、彼の胸をぐさりと貫通した。  
「嫌なことを言うな、君は」

「あら、嫌でした？」

今のレンには、昼間の自宅に居場所がない。弥生は気を遣って愛莉を差し向けようとするが、何をやっても逆効果。無視して雑誌でも読むか、論文の準備でもすれば楽なのだろうが、なんといつても愛莉は可愛いのだ。

可愛くて可愛くて、構わずにはいられない。

両手を開いて迎えようとすれば逃げられ、機嫌がよくて接近できると、嫌がるのを承知でつい頬にキスをしてしまう。

もちろん泣かれてしまうので、そうなるともう、どこかに出掛ける他ない。

弥生だけが育児で大変な思いをすることになるが、意にも介さず送り出してくれる。本音を言えば、自分がいて愛莉が泣くよりも楽なのだろう。

「天城の顔に泥を塗るな、なんて言ってた癖に、何でわざわざ……」  
「泥を塗らせたくないからだ。いいかユウ。お前、半端なことをして優勝を取り逃してみろ。：わかつてるな？」

内心の不機嫌がユウに向かい、ぎらりと瞳の刃を突きつけた。ひい、と蒼くなり、カオルの後ろに隠れる、仔犬のような弟。くるりと巻かれる尻尾と伏せた犬耳が、心の目にははっきりと見える。

従順な弟を怯えさせるのは、なかなか甘美な遊びの一つ。そう、愛莉に嫌われた穴を、半分くらいは埋められるだろうか。ドレスよりも、この顔を見に来たと言っても過言ではない。もう半分はもう一人の方へのお説教で埋めようと思っているが、とりあえずまだ来ていないらしい。

## WEDDING DRESS 2

「あら、お客様ですか？」

簡易キツチンから佐野が現れ、足を止めた。一目瞭然にSHINEの服で身を包む男が何者なのかと値踏みする。

「俺とシン兄の、兄貴。コンペが見たいんだって」

「見たいから来たんじゃない」

「暇だからですよねー？」

カオルが入れた茶々に顔をしかめ、意味もなくユウの後頭部で拳をぐりぐりさせた。

「いつてえ！」

「いい嫁さんだな。いっばしに嫌味が言えるようだ。：お邪魔しても、構わないかな？」

スタッフにだけは爽やかに笑みを送り、彼女はぽつと頬を赤くして奥へ下がった。

言われてみれば、師匠によく似ている。しかも：ちゃんと男らしい色気を、全身から放ちまくっているではないか。

佐野の入った扉の奥が、色めきだって騒々しくなった。

「そういうのだけは顕在なんだな」

一点だけ痛む頭を抱え、ユウは立ち上がった。

直立すれば、レンの頭など見下ろすほど。なのに：どうして真っ直ぐ見下ろすのがはばかられるのだろう？向き合って見下ろすと、それだけで何か大変なことをしてかしてるような気がしてしまう。

昔ほどではないとしても、幼い頃から培われた支配関係を、ゼロにすることなど不可能。

スタッフが仕事の手を止めて集まり、小さく寝癖を付けたシンと、絶好調という表情のユキが最後にやって来た。

「あれ、兄さんまで」

「シン、失踪はやめたらしいな。お前に限り、そういう振る舞いは

禁止だ。わかつたな」

「僕に限りって」

意味を量れず、不服そうな表情のシン。

レンも昨夜、弥生がユキからの電話を受けた後に帰宅し、話を聞いてそのまま飛び出しそうになった。ユキが思い付く以外に、彼の居所なんて心当たりないでしょ？と弥生が必死で止め、ようやく我に返ったのだ。

まんじりともせずソファに座り、電話と携帯が鳴ったらすぐに出られるように待機していた。事故：まさか、また人違い？

ぞつとして、眠るきつかけを失っていた。

心配しているレンのことを弥生が心配し、深夜になってリビングに戻ってきた。帰宅時と同じ格好でただ座っているレンの頭を倒し、柔らかい膝枕をすることで、ようやく眠れたのだ。

それが、ただの勘違いだと？カラオケだと？愛莉の件といい、以前なら抹殺に値する。

しかし強く責めると、うっかり心配してしまったことが露呈される。カオルという鋭い突っ込み屋がいるところで、迂闊な発言などしてはいけない。仕方ない、それこそ泣き寝入りだ。

ユキは職場から持ち出した、大きなメイクボックスをデスクに置いた。

「それ、何？」

警戒するユウ。にやりと笑いを返し、最大限に機嫌がいい様子。

「お前、着もしないで選ぶつもりか？これだけ人を集めておいて？とにかく、これで綺麗に顔を洗え」

クレンジングフォームを渡され、簡易キッチンに追いやられた。

「あーあ。とうとうだわ」

カオルはうなだれ、成り行きを見守っていた。

「髭は薄いな。下顎が細いのは合格。眉、手え入れるぞ」

プロ御用達の化粧品に囲まれ、女性ほどには肌理の細かくない肌

を埋めるように、ドーランを叩き込んでいく。カオルが手付きのよさに感心した。

「ユキって、こういうこともやるんだ」

「ま、専門にしてた頃もあったから」

得意気な彼に、ユウが口を挟む。そういえば遙か昔に、レンがユキのプロフィールを並べた時に、そんな経歴が入っていた気がする。「なんでVERTESに入ったの？」

「こら、口開けんな。理由はいろいろ、大人の事情」

表情こそ変えなかったが、昔のことなど話すつもりはない。例えシンが相手でも。それこそ…いろいろあったのだ。

「だから成人式シーズンは、メイクを引き受ける分、俺だけ異常に忙しいよ。商売繁盛、言うことなしってな」

アイメイクにはかなり力を入れ、特に下瞼の際のラインには凝っていた。付け睫毛を二重にし、薄く細くカットした眉に、丁寧に一本一本描くようにオリブ色を乗せた。頬紅はかなり薄く、リップラインは女性らしい形にはみ出させてラインを書き、セクシーなベージュで仕上げた。

ウィッグも幾つか持っていたが、とりあえず茶髪のロングヘアを被せた。

「よし、完了！衣装がどんなかわからないから、今風ギャルにしてみた。はやりの垂れ目メイクと、エロい唇がポイントな」

途中からは見ていられなくなり、下を向いていたカオルが、初めて完成形を直視した。

「い…いやあ〜！」

半泣きで両目を隠す。化粧物ではなく、恐ろしくデカいギャルが目の前にいたからだ。

しかも、顔だけは滅法可愛い。出来がいいだけに不自然だ。

「あれ、駄目か？ユキ兄、鏡は？」

普通の男声に苦笑し、ユキは鏡を差し出した。

「ひえ〜、これ、俺かよ！可愛いじゃん！…って、自分で言うのは

おかしいか」

「いや、間違いじゃないな。全然外れてない」

レンが神妙な顔で頷いた。ユキの腕前にはケチの付けようがなく、あれだけ拒否していたコンテストですら、面白いものだと思えそう  
な気がした。

「お前が妹じゃなかったことを、初めて残念に思った」

「やめてくれ！もし妹だったら、何をされていたことかわかったも  
んじゃない」

「ユウ？人聞きの悪い冗談はやめないか？」

スタッフの前でにっこりと笑いかけ、ギャルの口が引きつって  
いた。

「ユウさん、じゃあお願いします」

奥に入り、三浦と佐野が力を合わせ、彼に衣装を着けさせた。漏れてくる声にカオルは耳を塞いでいたが、男の身体と作り物の胸を綺麗に見せるため、時間を取られているようだ。

佐野の衣装が一番手。

白いシャツの袖をまくり、赤いループタイをひらめかせたカウボーイならぬカウガールファッション。赤いタータンチェックのテングロンハットを、敢えて被らず首の後ろに引っかけている。バランスを取るよう、ベルトも同じ種類の赤チェックで揃えてある。わずかに伸縮性のあるデニム生地で極限に細く仕上げたボトムと、フリンジ付きのブーツ。

ドアを開けたユウは女性になりきり、斜めに流し目を送り、銃を撃つ真似をした。

「きゃーっ！」

撃たれたスタッフが、興奮して頬に手を当てる。

男なのにこの場の誰よりも女っぽく、普段とはまったく違う姿。もちろん、長身だけが異常に目立って、その点が気持ち悪いと言えば気持ち悪いのだが…

シンは柔らかな顔で見守りながら、厳しい目で判断していた。

ファッションとしてはありきたりと言えはありきたりだが、あれだけピタリしたデニムを仕上げる力があるなら、今以上の仕事を与えられるかもしれない。彼が見ているのは、女装がどうかという点だけではなかった。

次は三浦だった。

白いホルターネックのロングドレスだ。作り物の胸を下からしっかり支え、大きく横に張り出した男の肩が、妙に華奢に見える。二の腕はかなり筋肉が落ちているので見られるが、どうしても筋張っ

た印象の肘から下は、サテンの長い手袋で隠していた。

ドレスの中では本格的なコルセットで締め付けられ、さすがのユウの笑顔も強張っている。足で背中を押し、カ一杯紐を引かれた時には、口から内臓が噴出するのではないかと思っただほどだ。

その分、体形は女性らしさが増した。ウエストはくびれ、タイトなシルエットで裾まで伸びている。左脚の太腿からスリットが入り、かなりの露出だ。スリットには大振りなレースが顔を覗かせている。「これ…」

シンが質問するより前に、三浦がぴよこんと頭を下げた。

「先生、すみません！パクリました！」

下半身のスタイルだけは、完全にカオルのドレスを真似ていた。

シンは組んでいた脚を下ろし、真っ直ぐに背を伸ばした。

「別に、僕は構わ…」

「先生、待つてください！」

シンの口が開くのを待っていたかのように、すかさず翠が厳しい口調で割って入った。

「簡単に、構わないなんて言わないでください。新人の力を試すコンペでもあるんですよね？オリジナルでないなら、私は納得しません」

曲がりなりにもKIDSを任されている彼女の言葉に、三浦はシンと萎れている。

「翠さん、簡単になんて言ってないよ。先に謝るってことは、何か理由があるんじゃないかなって思ったから」

瞳に促され、三浦はしょぼしょぼと話し始めた。

「あー、あの…これ、ユウさんのウェディングドレスって設定で作りました。」

俺、カオルさんのことが気になって。顔もスタイルも綺麗なのに、試着してもなんとなく委縮してて勿体ないっていうか…余計な御世話かもしれないけど、俺が今ユウさんをプロデュースするなら、似てるドレスで堂々としてもらって、マイナスイメージを吹き飛ば

せたらいいな、とか思ってた」

カオルに視線が集まり、対応に困る。

好意はとても嬉しいが、翠の視線は強いままだ。こんなことのために、三浦の立場が悪くなってしまうたら、どうフォローすればいいのだろう。

どんな顔をしたら申し訳なさが伝わるか、ただ目を伏せて遣り過ぎしていた。

「先生はきつと何も言わないから、私が言うけど。コンテストと、カオルちゃんを思い遣るということは別問題」

声を荒げた翠を、シンが手を挙げて止めた。

「いいよ、コンセプトはわかった。これに決めよう」

「先生！」

「カオルちゃんのドレスは、SHINEというブランドの商品じゃない。それこそ別問題だよ。それにスタイルを冷静に比べて、三浦くんのドレスの方が舞台映えするんじゃないかな？」

「それは、まあ…確かにそうですね」

不承不承、翠は首を縦に振った。

全員の投票でどちらにするか決める手筈だったが、それより先にシンの言葉で決まってしまった。

順位を争わない女装として見れば、佐野のカウガールも十分魅力があった。しかしどうせならきつく締めあげて露出させ、女らしさを強調した方が有利だという意見が多く、どちらにしても三浦のドレスが採用になっていただろう。

佐野は残念そうではあったが、納得してはいた。

「洋服は、人を包むだけじゃなくて、その人となりを表してしまうものだよ。だから特にオーダーのものは、着る人や場面を理解しないよね」

師匠が製作の間にさらりと教えた言葉を、ライバルの三浦は理解し、自分は見逃してしまったのだから。

「二人とも、ありがとな」

ユウの感謝に、シンがキラッと目を光らせた。

「ユウ、その恰好でその声はいけないよ。気持ちを乗せないと、本番でボロが出る」

「そ、そっか。ありがとね…って、こんな感じ?」

小首を傾げた仕草が、戸惑い口調の割には自然で、佐野も三浦もどん引きしていた。事務所を笑いが包んだ時、ドアが開いて弥生が顔を出した。

「こんにちはあ」

初めて中に入るの恐る恐るだったが、楽しそうに眺めているレンが目に入り、カオルの横顔も見えた。そして奥で煌びやかなドレスを着ている…あれは、一体誰?

「弥生」

レンが驚いて声を掛け、親指でドレスのユウを指差した。

「やだ、これユウくん? まっさか! へえー!」

仰天し、挨拶も忘れて間近に近付き、ジロジロと眺め回した。

「へへ。化けたろ? 愛莉、ユウだよ。びっくりしたか?」

弥生を追ってきた愛莉に両手を広げ、不用意に接近した。途端に、つんざくような叫び声…

「やべ、悪い」

「ユウ?」

シンの、また厳しい視線。

「あーっといけない、ごめんね、だった」

裏声にしてみたところで号泣は止まず、彼女はくるりと後ろを向いて走った。先にいたのは、レン。

「パパ〜!」

膝にひっしとしがみ付き、泣き続ける。ユウが愚かにもフォロー

しようと思ってしまったので、パニックに陥っていた。

「愛莉、愛莉… パパでいいの？」

うるっとした表情でぎこちなく抱き上げると、首にぎゅっと顔を押し当てられた。

柔らかい。涙で湿った温かい頬。軽くて重くて、抱き心地のよい身体。くあく…可愛い！にやつく顔を隠そうともせず、口調だけは冷たく取り繕った。汚い動物でも見たように、しっしつとユウを手で払いのける。

「ユウ、愛莉が怖がっているだろう？変態は去れ」

「変態とは何だよ、勝手に来ておいて」

「ああ、そうだったな。じゃあ愛莉、帰ろうか」

もう他に何もいらぬという表情で、彼はさっさと空いたままのガラス扉を抜け、エレベーターのボタンを押した。

「ええ、もう？あーん、みんなごめんね。お邪魔しました！」

来たばかりの弥生も、仕方なく後に付いた。泣き声がエレベーターに消え、ビルを出るとまた大きく窓から入ってくる。

「嫌われたな。おっと、叱られないうちに着替えちゃおう」

「ユウ、待って」

シンが上から下まで最後に眺め尽くし、そつと背を押した。

「脚がもつたいない。ラストスパート、頑張つてね」

「ダイエット？ダイエット…のことだよな？ダイエットか…」

巷ではバナナダイエットがはやっていたが、流れに乗らずに豆腐をチョイスしていた。朝に一丁、晩に一丁。あとはひたすら水とサプリ、我慢！

仕事半分、趣味半分のジム通いも減らし、相乗効果で体重と筋肉が落ちてきていた。でも、まだ足りない。

「シン兄、そろそろ本業と心身に差し支えそうなんだけど」

「ハリウッドのプロは、すぐに痩せてすぐに戻すものらしいよ」

「ここハリウッドじゃねえし！」

ぎゅうぎゅうで簡単には結び目が解けないコルセットを外しても

らい、ウィッグも取り、顔に張り付いているようなメイクを落とす、  
ようやくさっぱりとした。

「俺、男でよかった」

せいせいとする息を整え、まだ複雑そうなカオルと共に事務所を  
後にした。

空気は熱を纏い、夏休みを思わせる家族連れの目立つ街並みは、やけに楽しそうだった。

何に落ち込んでいるのか、ただユウの姿にショックを受けたのか、カオルは呆然と歩いていた。

もっと、空を見たらいいのに。ほら、あんなに青く笑いかけている。

「どうだった？あれじゃ不合格？」

「…なんか、混乱してる。私と同じようなドレスなのに、ユウの方が全然綺麗だったじゃない。あれで私に自信持てって言われても…ねえ？」

「まあた。どうしてそう曲解するのかな。カオルは、頭が良過ぎるんだ、きっと」

「褒めてないし、フオーじゃないし。まあいいや。とにかく綺麗だったよ。コンテストに関しては、少し安心できた。頑張ってたね」「ん」

こてんとユウの腕に頭を預け、春までと比べてその感触が変わっていることを実感する。ベッドでならば、もっと目の前に見せつけられている筈なのだが、少しサイズが変わってしまったTシャツで感じる変化の方が何故かリアルだった。

汗ばむ夏は、あまり手を繋がない。それより、ちょうどいい位置にあるベルト通しの穴に指を引っ掛ける方が安心できる。ユウの手はその時々により。肩に回したり、守るように背に当てたり…今は、後者だった。

「あー、空、青い。雲、白い…夏かあ」

気が抜けて、カオルがぼつりと言う。

「てれぱっすいー、だな」

「え、何？」

斜め四十五度に見上げられた視線が、いつも通りの角度なのに、殊更仔猫を感じさせる可愛らしさを放っていた。

きついアーモンドの瞳。疑問形に上げられた眉。薄く開いた唇が…  
ぶつちやけて言おう。そそられる。

「なんでもない。それよりさ。お詫び、して」

「お詫び…？ああ、昨日の連絡義務について？」

帰宅前に携帯をチェックしたが、ユウからもユキからも着信履歴がずらりと並び、今更ながらに彼らの心中を察していた。ユキに事情を説明して、快く許されて退社したばかり。

「ご明察！俺の、楽しい夜を返して」

「…それは、ごめんてば。いつまでもどうしたの？らしくない」

怪訝な視線に身を翻して立ち止まり、ユウは彼女の耳に唇を寄せた。

「きやつ！」

「今日、泊まって。最高に楽しくさせて」

囁き声に真っ赤になって、後ずさりする。

「なんか、フルメイクの顔思い出すと…そんな気になれないんだけど」

周囲を気にして肩を竦める様子が、嫌がる態度が、堪らない。

ずーっと気付かなかったけど、もしかして俺、SかMか言ったらMなんだろうか？まあ、天下一のドS兄貴に可愛がられてきたんだから、むしろ必至か？

でも今は兄に倣い、たまには意地悪で追い詰めてみたくなった。

「そんな気って？俺、何も言っていないけど」

「…馬鹿！」

最大限に赤くなり、彼女はツカツカと横を素通りして早歩きし始めた。

「おい、待てって。置いてくなよ」

大股で簡単に追い付くと、カオルは迷いなくドラッグストアに入った。

「買い物？」

「…歯ブラシ、そろそろ替え時だから」

手にしたのは、オレンジとブルーの二本。

宣言ない承諾に、店内にも関わらず、衝動的に抱き締めていた。

空いた店内、目くらましになる派手な陳列と商品のポップ、大音量の店内放送。これだけの条件が揃っていても、彼女は誰が見ているかと警戒して身じろぎする。

「やめてっば！本当に怒るよ？」

「カオル。アレも、そろそろ買い時な感じ」

「ユウ、今日おかしー！」

「暴れても駄目。今、発情中だから。だってカオル、ヤバいほど可愛いんだもんなあ」

店員の足音がしたので解放してやったが、恥ずかしさで潤んでしまった瞳に、完全ノックアウト。

勝手に突っ走りそうな意識をぐっと堪え、結婚式に向けて伸ばしかけの髪をくしゃくしゃと撫でた。

「そんな風に思うの、ユウだけなんだから」

「十分だろ？」

え？と訊き返す無防備な頬に、素早く一度、軽くキスした。

「婚約者に褒められるなら、十分だろ？俺は一生、褒めるよ。たとえ倍の体重になっても、皺だらけのおばあちゃんになっても、毎日毎日、可愛いって言う自信がある。それじゃ不満足？」

「…く…」

伏し目がちに、口だけが動いた。

「聞こえない」

「不満足、じゃない！ユウの馬鹿！」

まっかつかでレジへと走っていったカオルは、ユウにとって、やっぱりどうしようもなく可愛らしかった。

最後の一言ですら贅辞としてしか聞こえず、満面の笑みでレジ前の必需品を購入した。

じいちゃんの手前、滅多なことにはなりたくない。レン兄じゃあ  
るまいし、な。

まだ頬に赤味が残り、口を尖らせたカオルが店の外で待っていた。  
何事もなかった顔で肩に手を回すと、定位置のベルト通しに指が絡  
まる。

歩道に、一つになって歩く影が伸びていた。

ワインを開けるのは久々だった。

愛莉に嫌われたからとヤケ酒で飲むのは本意でない。ワインに対して失礼だ。透明な液体が、グラスの中でゆらゆら煌めいている。

三十分前に見た、シンの怯えた表情と、気まずさに俯くだけの幸範を思い出す。苛々が戻ってきそうになり、頭を振って追い払った。今は祝杯の時。奴らのことは忘れよう。

「レン」

風呂上りの弥生が寄り添い、自分のグラスを差し出した。

「コルトン・シャルルマーニュの白。飲みやすい」

「ありがとう」

グラスを合わせ、軽く乾杯した。何に？決まっているじゃないか。

「シンくん、改心した？」

祝いたいのはそっちではないんだが…

ふう、と休日の終わりに溜息を漏らし、一口味わった。

「シンの癖に嘘を吐こうとしたからな。不機嫌だったところだよ」

「シンの癖につて、酷いセリフ」

「僕相手に嘘を吐き通す自信なんてない癖につてこと。二週間分の薬を、トータルで丸々四日分もサボってたんだぞ？心優しい僕も、さすがにキレた」

腕に、弥生の頭を感じる。そのまま眠ろうとしているかのように体重がかかる。

「そつだよー。レンは優しいもんね。心配で心配で、堪らないつて顔」

「…弥生、嫌味や冗談は、受け取り手の理解力も必要だよ？」

「ふうん、それはそれは」

明らかに適当な、気持ち良さそうな返事に、何故か癒される。

彼が今日事務所に行ったのは、何も女装だけを見るためだけでは

なかった。弥生はたまに会っているようだが、自身がシンを見るのは久しぶり。しかも、きちんと飲んでいれば薬をもらいに来る筈の期限を、とっくに過ぎている。

顔色はさほど悪くなかったが、また少し痩せたように感じ、シンの帰宅を見計らって三階下の部屋を訪れての診察だった。薬はもうないと見え透いた嘘を吐くので正座させ、仕事のペースも含め、洗いざらい白状させた。減っていない薬を前に、幸範もついでに並べたのお説教が：そう、三十分以上は続いただろう。

いつもはスルスルとうまくかわして逃げるシンも、今度ばかりは真摯に受け止め、しおらしく聞いていた。

奴は一体、自分の身体をなんだと思っっているんだ。あれだけしっかりと説明し、服薬と休息を指示していたというのに、あっさりとは無視しやがった。シンは病気だ。原因は腎臓でも過労でもない。完璧なる仕事中毒だ。

人のことは言えないと思っていた。以前までは。しかし人間というものは、身に重大な変化があったら、適応して変化するものじゃないのか？大事なものができれば、それを守ろうと思うのが必然だろう。

それが…幸範にすっかり寄りかかって、更に仕事に熱中できると勘違いしたとしか思えない。幸範も幸範だ。甘えさせるばかりが能だなんて、カオルと同類だ。

思い出してピリピリし始めたレンに気付き、彼にワインを注いだ。

「レンは優しいよ？本当に。兄弟にも、愛莉にも」

「弥生にもそうしてるけど？」

「そう？」

疑問形が返ってきて、不安を覚える。いつもの弥生の返答ではない。

「よかったね。愛莉が戻ってきて。これで、レンに愛莉を頼んで、私一人で買い物に行ったりできるようになったならいいんだけど」「いいんだけど？」

「ちょっと、つまらない」

たまに発せられる、女性特有の思考回路。レンの唯一苦手とする分野だ。

「僕と愛莉が仲良くできるのが、つまらないのか？」

「そういう意味じゃないんだけどな。気付いてる？愛莉に嫌われてから、こうして話す時間が増えたこと。レンが愛莉を愛してくれて、凄く嬉しい。でもレンたら、極端なんだもん。今だって、愛莉が振り向いたお祝いぐらいのつもりだったんでしょ？」

愛莉に夢中になるレンを見て、ずっと思ってた。あたしのこと、もうお母さんとしてしか見てないんだな、って」

弥生が隠し持つ鋭さを発揮すると、太刀打ちができなくなる。言われてみれば、確かにその通りだと思う。言われなければ、今にも能天気な愛莉のことを話しているところだった。

彼女の表情は見えないが、寂しい癖に満ち足りた顔をしているのが、なんとなくわかる。そういう女だ。

「弥生。僕は君に夢中だよ。愛莉に夢中なのは、君に似た愛らしい瞳をしているから。それくらい、わかってるだろう？」

「誤魔化そうとしてない？」

「じゃあ、賭けようか？」

トリートメントの香る頭を胸に抱き寄せ、ソファにそっと押し倒す。ノーメイクでも十分大きな瞳と長い睫毛を見て、本能的に悟る。

こんな風に、じつくりと見詰めるのは、随分久しぶりだ。どれだけ長く話そうと一緒に過ごそうと、真剣に相手にして心を伝え合わなければ、見ていないのと同じこと。

久しぶりに心を込めて見詰められた弥生も、それを感じて赤らんだ。

「何を賭けるの？」

「もう一人産んで、僕に似た子供が出てきたら？愛しているつもりでも、必ずどこかに疑問が浮かぶだろう。僕に似ているの？って。愛莉と同じようには、手放して愛せない。だからそれで証明。僕は

弥生を愛しているから、愛莉を愛してる」

「…屈折してる」

そんなこと、周知の事実だろう？と微笑し、頬を撫でてキスをする。思いのままに長く繰り返すと、彼女の瞼が赤く染まり、瞳の中にレンだけを映している。

夫婦として身体を重ねることはあっても、こうしてキスに愛情を込めて伝えることは、やはり久し振りの気がする。愛莉の母親としてしか見ていないなどということはないが、怠慢と指摘されても仕方がない振舞いだったかもしれない。

「下らない賭け、試してみたいか？」

「ん…どっちでも。レンの好きなように」

「じゃあ、神の意志に任せようか」

吐息の合間に、弥生がぶつと吹き出した。不思議に思っただけを覗くと、彼女は邪魔な眼鏡を外させた。まだくすくすと笑いつつ、丁寧に眼鏡の蔓を畳んで置いた。

「レンの口から、神だなんて。それこそ、神懸かり的な冗談みたい」  
「そうか？」

レンの頭に手を回し、子供にするのと同じ仕草で撫で下ろす。髪や頬や鼻や顎や、愛莉が受け継いだパーツはたくさんあるというのに、往生際の悪い言い訳までが愛おしい。昔は見えなかった本質が見えれば見えるほど、愛情が増してしまう。

「変わったね。前は無神論者だとか、神という言葉以上に意味のない単語は存在しない、なんて難しいこと言ってたのに」

レンも思わず苦笑した。

「そう、だったな。確かに変わったのかもしれない。君が愛莉を産んでくれたからだ。ありがとう、弥生」

無から有が生まれる。育まれた生命は間違いなく十月十日を数え、奇跡のように間違いのない「人間」が現れる。しかも愛した女性から、その人に似た要素を持つ子が出てくるのだ。

そんな奇跡を目の当たりにして、感動しない輩がいるだろうか？

僕は馬鹿だ。自分でそう思うようになったのも、弥生を愛してからのこと。大馬鹿者の僕は、僕に似た子でも溺愛できる種類の馬鹿だろうか？それとも愛莉ばかりを可愛がり、隅に追い遣ってしまう種類の馬鹿だろうか？

そう聞いたら、きつと彼女は即答するだろう。

前者に決まっている、と。レンは馬鹿みたいに優しいんだから、と。

いいだろう。賭けでもギャンブルでもなく。

神の意志を試してみよう。

コンペの後、シンは早々に帰宅したが、残りのスタッフは片付けを後回しに連日の宴会となった。レンから電話が入り「お騒がせしたので」と、寿司の出前が差し入れられたのだ。

そんな翌日、コンペの後片付けは終わっていない状態からの営業開始。当然、全員が追い立てられて始業していた。

シンが顔を出すと、三浦は作品が邪魔にならないよう、トルソーごとドレスをアトリエに運んで帰ってきたところ。佐野は丁寧に帽子をケースにしまっていた。

全員揃い、植草ですら珍しく事務所仕事。

好都合：かな。

シンは佐野を呼び寄せ、改めて作品を手に取り、じっくりと細かいところまで検分した。

「たった一度のコンテストのためなのに、随分些細なところまで丁寧に作ったね」

「そんな、当然です。誰より先生が、手抜き嫌いじゃないですか」

「ああ、ごめんね。馬鹿にしたつもりじゃなくて。このステッチなんて、カメラには映らない部分なのによって感心してた」

心外そうな佐野をフォローし、デニムも帽子も小物も、すべてチェックした。

「翠さん、ちよつと」

「はい」

翠は書類のチェックを中断し、即答で近寄った。

シンへの想いは断ち切ったつもりだったが、先日のカラオケで、皆を楽しそうに眺める表情に、チクリとした痛みがぶり返していた。

皆が歌ったり喋ったりしているのを、彼は黙ったまま幸福そうに眺めていた。その癖、眠たくなってソファに寄りかかった横顔を盗み見ると、とんでもなく寂しそうな色を浮かべている。それこそ、

どこも見ずに…

寝入ってしまった後、涙が一筋落ちたのを見たのは自分だけだった？

昨日初めて見たユキの存在に、改めて条件が違うことを思い知らされる。新人へのキツイ一言も、もしかしたらその動揺から来たのかもしれない。プロ意識がまだ足りない自分が、悔しい。

翠の葛藤など知らず、シンはあっさりと佐野の背を押し、彼女へと向かわせた。

「佐野さんを専属で助手にしてください。それから、SHINE/KIDSの今後について…これからは、最終的なデザインチェックはちゃんとするけど、もう少し踏み込んでお任せしたいと思います。外部のコンペなどに参加する際にも、担当者は当然翠さんの名前で提出するから、もっと自由にやってみて」

「先生…」

「もちろん相談ならいくらでも受け付けるけど、今までみたいに全部が全部、僕のゴーサイン待ちっていうのは、あまりいい形式と思えないから」

シンの言葉は優しく棘がないというのに、その瞬間、翠の中で走り続けた気力が切れかけた。割り切って、思い切って、平静に保っている師匠の顔が、むしろ自分にとっては完全な無関心に見えてしまっていた。

手を、放されてしまう。手抜きなんてできない人なのに。どんなに忙しくても、全部を見ないと気が済まない性質なのに。私の手だけじゃない。SHINE/KIDSというブランド自体を、シンが放り投げようとしている。そうとしか思えなかった。

「先生、無理です。そんなに、私ダメですか？嫌になるくらい、KIDSの展開に納得いつてないんですか？」

張りつめた声に、スタッフが静かになる。

注目を浴びていることを知りつつ、一度浮かんだ涙が止まることはなかった。

シンは困り、同じく困った佐野と顔を見合わせた。しかし、佐野の瞳に答えが書いてある訳もなく

「そんな、翠さん、逆だよ。信頼しているから」

「でも、無理です。私は、先生と同じデザインを描くことができませぬ。先生に具体的に指示されないと自信の持てない未熟者なんです。投げ出さないください」

ずびずびと洩まで出、そのまましゃがみこんだ。来年のデザインと試作に手間暇がかかり、徹夜続きの精神に、このプレッシャーはきつすぎた。

ぼん、と肩に手が置かれる。申し訳なさそうなシンの顔が、間近にあった。思えば初めて触れられた彼の手は軽く細く、ぎこちなく気遣っていた。

「僕が、余りに細かく注文しすぎたんだ。最初からもっと任せればよかつたのに、ごめんなさい。佐野さんは仕事が丁寧だし、細かい点で、僕と好みの傾向が似てる気がする。キャリアの差は激しいけど、翠さんが指導しながら、もし余りに路線からはみ出したら佐野さんが指摘できるような、そんな感じでいい仕事をしてもらえたらって思ってたんだ。」

大丈夫だよ。翠さんは凄く才能あるし、僕も全然無関心じゃないから。成り行きを見守って口も出さずだろうし、まさか全然違うと思ったら、はつきり自分の手に戻すかもしれないし、逆にもし…僕が必要ないくらいに発展したら、将来別ブランドとして独り立ちしたっていい」

野心溢れるプロならば、魅力ある提案。確かに遠い将来と思えば、夢の実現だと思える。

しかしどうして今？自信ないまま「思う通りにやれ」だなんて…「そんなこと、急に言われても。今まで通りではいけないんですか？先生に逐一許可を頂いて、先生がデザインしたと胸張って言える商品でないと、SHINEでなくなってしまう。それが怖いんです」シンは黙って辛そうな笑顔を浮かべ、立ち上がった。既に全員が

こちらを見ているので、改めて声を張る必要がない。

「平山さん、あなたにも将来的にメンズをお任せします。二年後を目途に、追々やり方を相談しましょう。同時に三浦くんは専属でそちらに入って勉強してください。僕は当然、レディースに専念します」

突然の発表に、場がどよよとした。シンは静まるのを待ち、デスクにもたれて両手を組んで下ろしていた。

無力感で、哀しい笑顔になる。

どうして僕はすべてに責任を持つことができないんだろう？いや、任せることも責任の一つだって、散々悩んで決めただ。

基本的にポジティブで明るいユキが、お説教が終わってレンが帰った後、堪え切れずにポロポロと泣いていた、その顔を想っていた。大事な人も、大事な仕事も失いたくない。仕事を辞めなくて済むためには、ペースダウンすることも必要なのだ。

シンは全員の視線が集中しているのを感じ、ペコリと頭を下げた。「急にこんなこと言い出して、みんなにはご迷惑かけます」

キツとした表情で、植草が手を挙げた。

何の相談もなかったことに、苛立ちを募らせている。

「本当に迷惑です。理由をきちんと説明してください！」

シンは深呼吸し、決意を込めて口を開いた。

「その方が、いいと思ったから」

「そんな子供みたいないな！そりゃあ先生は働きすぎで、こだわり過ぎで、相手をするのもウザいくらいですけどね。今更、こんな変更を」  
「そう。今更なんだ」

ここまでで喋り過ぎて、息切れがした。間を取る振りをして呼吸を整え、疲れた口をまた動かす。皆が納得するまで、説明し続けるつもりだった。

「今更、気付いた。気が弱い癖に、どれもこれも手を出して、納得しないと進まなくて。皆を信頼しているから我儘言えるんだって思っていたけど、むしろどこか信頼していないから、全部自分で見なきゃ気が済まなかったのかなあ、なんて。」

でも、社内コンペで生き生き自由にデザインする二人を見たら、単純に嬉しかった。日が浅くても、ちゃんと僕の意思は伝わっている。もちろん、翠さんのデザインも。僕に気を遣わなければもっと伸び伸びやれるのに、縛り付けられない方がいい」

一番隅っこで、カオルがじっと観察していた。

それはそうなんだ。きつと本音なんだ。でも、それが全部じゃない。  
い。

スタッフが微妙に肯定の方向に色を変えたのを悟り、解散してしまわないうちに、と口を開いた。

「シンさん、この際、全部言った方がいいです。弱音でもいいから。」

「ご指名が欲しいのは、私だけじゃないですよ」

敢えて真つ直ぐに、傷付けてしまいそうなほどの強い目線を送る。どうか伝わって欲しい。みんな、わかってくれるということが。

「はい！僭越ながら、俺も！」

三浦が、勢いよく手を挙げた。酷く狼狽している。

「先生、アトリエに長く居させてもらって、佐野とずっと心配してました。あのことなら、きちんと話した方がいいと思います！」

佐野もおおずとおと三浦を見、深く頷いた。

シンは参った様子で天井を見て、髪を一度掻き揚げた。少しの間を持って、口を開く。

「…それが信頼の証になるなら…そうだね、やっぱり言った方がいい。」

ぎりぎりまで様子見にしてもらっていたんだけど、そろそろドクターストップ、というところですよ。…自己管理が悪いのが原因だつてわかってるんだけど、体質と体調と性格が、限界まで悪循環を起こしているって、主治医に怒鳴られる始末で。

仕事を減らして、常に過労の現状から抜け出さないと、生死に関わる可能性もある…って、これは半分脅しだと思ってるんだけど」

はは、と静かに乾いた笑いが、事務所に響いた。誰も釣られず、呼吸の音すらはばかられるように黙っていた。

シンも十分に意識していた。「このままいけば」という仮定で兄の説明する今後が、半分しか脅しでないことを。

昨夜のお説教のことなど知らず、そこまで酷かったのかとカオルは驚愕していた。自虐的とも取れる澄んだ笑顔を、普通に見ていることなどできない。

目を逸らせば、初めて見る植草の涙があった。怒りに燃えた横顔に、シンに対する、仕事を共有する者としての深い愛情が浮かんでいた。

余りに体調不良の時は、シンは事務所には顔を出さない。確かに

彼女にも覚えがある。用事があつてアトリエに行った時、ただ毛布に包まり、言葉少なに応じていたことを。

勝手に、自滅中だと判断してしまった。でも過去を振り返れば、自滅中は言葉で応じることすら不可能だったのだ。

体調が悪いのを、自滅しても返事ができるまでに成長したと勘違いし、そつと知らん振りした方がいいのだと思い違いをしてしまった。

植草は深く悔い、涙が乾くまで黙っていた。自分からは不調を訴えられない社長なのに、どうして自分がもつと推し量り、叱咤激励して休養を与えなかつたのだろうか。カオルから情報は仕入れていたが、どんどん上乘せされる忙しさにかまけていた。

よく考えれば、それはユキがいたからこそその油断に他ならない。多忙でも、昔は事あるごとにシンの体調と精神状態を気にしていた。しかし彼が現れて精神状態は安定し、フォロー地獄から脱却したことで、すつかり気を抜いてしまつていたので。

どうして打ち明けておいてくれなかつたのか。そんな想いももちろんあるし、今は何より、漫然と過ごした自分に対する怒りばかりが頭を占めていた。

しかし彼女はポジティブ気質であり、自分が自滅する場面ではないことも自覚している。重苦しい空気を打ち払おうと、彼女はトツプらしく振舞つて手を叩いた。

「よし！了解したね、みんな！要するに、先生を殺したくなかつたら、死に物狂いで仕事して勉強しろつてこと！翠、あんたが泣いてる場合じゃない！デザインでの即戦力はあんただけなんだから、笑いなさい！自分のブランドとして奪い取るくらいの野心がなくて、どうするの！」

彼女の腕を無理に引いて立ち上がらせ、植草は明るく言い放つた。叱られるとばかり思つていたシンは力が抜け、へなへなと椅子に座り込んだ。「ああっ！」という腕に囲まれ、苦笑する。

「大丈夫大丈夫。本当に、ご迷惑をおかけします」

座ったまま、また頭を下げると、神妙な溜息が湧きあがった。  
彼は幸せ者だった。取り囲むスタッフの皆に愛されている。植草は張り切って全員を仕切り、仕事の続行を指示した。カオルにはシ  
ンを送るように言い、タクシーを呼んだ。

タクシーに乗り際、植草は決定事項としてシンに伝えた。

「先生、本決まりになっていた冬のコンペ、取り下げましょう」

作品数の多いショーほどではないが、大々的なコンペも相当に精神的負担だ。シンにとっては、他者と競うという点は、大したプレッシャーにはならない。しかし発表時には当然人前に入るし、フォーマルな席ほど彼を追い詰める。

しかしシンは、責任感から首を振った。

「あれはやるよ。だってもうエントリーして」

「先生？」

怒気を含んだ笑顔に怯む。口を閉ざして迷い、溜息を吐いた。

「今更、大丈夫なのかな？業界から干されたりしない？」

「それくらいでこの天才を干すような業界なら、こっちから願い下げだって怒鳴ればいいんです。我儘なのが先生の長所…でしょう？」

タクシーに押し込み、乗り込むカオルに「よろしく！」と手を振った。

「大袈裟だな。こんな近距離なのに」

「…シンさん、カラードレスも、もういいですからね」

カオルも決意していた。生死の問題と結婚式のドレス。天秤に掛けるのも馬鹿馬鹿しい、些細な問題だ。シンはコンペよりもショウクを受けた。

「そんな。せつかく形も生地も決まったのに」

「仕事のコンペをやめるのにこっちをやるんじゃ、意味がないでしょ？私にも立場がありますから」

残念な気持ちを極力表わさず、さばさばと聞こえることを願う。

でも、シンの気持ちを考えたら、余りに残念でなさそうなのも失礼だろうか？

「嫌だなあ。まだ言わなければよかったよ」

歩きなれた街道を見て頂垂れるシン。後悔から急にだるくなり、眠気を感じた時にはもう、マンションに着いていた。

必要などなかったが、カオルの心配顔を消したくて手を借り、白い冷たい掌を感じながら自宅へ戻った。

ソファに寝転んでエアコンを入れると、すかさず傍のタオルケットを掛けられる。うつすら目を閉じて考えてから目を開けると、今の喉にちょうどいい、熱くも冷たくもない紅茶が置かれている。

勝手知ったる人の家とばかりに、カオルは夏の陽に乾ききった洗濯物を取り込んでいた。

「お昼はどうしますか？」

「やっぱり、いい母親になれるね。くるくる動く魔法使いだ」

「家事だけですよ、得意分野は」

健康的な笑顔で布団を奥に運ぶ彼女は、ユウが長年惚れるには十分理由があると思える魅力を備えていた。

カロードレスをやめるだなんて。いつそのこと、あれを強行突破で仕上げてから話せばよかった。性懲りのない、深い後悔に胸が沈む。

冷蔵庫を遠慮なく開け、昼食を考えるカオルの背を見詰めていた。モデル体型とはいかないが、うなじも肩甲骨も綺麗なものは知っている。広めに背筋を見せた寒色系のドレスの後ろ姿が、目に浮かんで離れなかった。

「カオルちゃん」

「はい。あ、お昼、素麺にしますね。胡瓜もトマトもあるし、焼き茄子も作りましょっか」

「そうじゃなくて」

すっかり頭を切り替えて忙しそうに彼女が、こっちを見てくれるのを待つ。

大きな鍋をコンロに掛け、続きがないのを不思議に思い、カオルはやっぱり手を止めた。

「どうしました？」

「あのね、やっぱりカラードレス作るうよ」

「シンさん！」

咎める口を、優しく遮った。

「その代り！ユウのお色直しのタキシードは、正式に事務所に依頼する。平山さんの実力を試す、メンズの頭としての初仕事にしてもいいし、また社内コンペしたっていい。その分、僕は確実に楽にできるから」

カオルは迷い、考えている。あと、もうひと押し。

「僕の悪しき性質なんだ。作品は分身と同じ。もう形になりつつあるイメージを捨ててしまったら、迷子になってしまふよ。このままじゃ結婚式当日に後悔ばかりして、気が違って死んでしまふかも」  
多少大袈裟に表現すると、彼女は包丁を手にしたまま立ち尽くしていた。

「だって、そんな迷惑掛けられませんよ。事務所に顔向けが…」

「妹のドレスを作るなんて、全然迷惑じゃないって言ったよね。作りたいのは僕の我儘。駄目かな？兄の我儘、聞いてもらえない？」

「う、だって…そう言われてしまうと、本当に困るんですけど」

シンの執着気質も職人氣質も、頑固者だということも知っている。こうなってはもう敵わない。

「じゃあ、条件があります！」

「はい」

満面の笑みになると、パーマを当てたらそのままレンになってしまいそうな端正さが際立った。

あれ、密かにちょっと勝ち誇ってない？うまく誤魔化されたかな？

そうは言っても、負けは負け。レンならば「狡い！」と責める勢いを持てるが、病人で優しいシンに、文句をつけることなどできない。

「私も、作業を手伝います」

「それはいいよ、大変だから。三浦くんはタキシードに行くだろう

けど、佐野さんには引き続き手伝ってもらうつもりだし」

「じゃあ、結局一人減ってるじゃないですか。見えない処、単純作業で下手でもわからない処だけ、でいいです。それも無理なら、夜食出したりゴミ捨てたりでも」

「ユキが錯乱するほど心配してるから、アトリエでは作らないと思う。だから夜食もゴミも気にしないでいいよ」

「それが条件！私だって、今錯乱するほど心配なんです！

ビーズ付けたりするくらいなら手伝えるでしょ？私も、私のドレス制作に参加したいんです。一生のことだから、思い出に！妹からの我儘、聞いてくれませんか？」

カオルなりの、最後の一押し。シンと同様、情に訴える作戦。

彼はうーんと考え、納得を付けた。

「じゃあ、来た時は報酬として、佐野さんと一緒にご飯食べて帰ってね」

「は？そんな。だって、作るのユキでしょ？」

「僕が期待ほど食べないから、いつも残って可哀想なんだ。口に出さずに、寂しそうに後片付けされるのがプレッシャーで喧嘩しちゃうたし。大勢だと、僕も楽しくて食べる気になれるかもしれない。これが条件ね」

条件に条件が上乘せされ、なんだかおかしな会話になっていた。

「それから、カオルちゃんも忙しかったら無理しないこと」

「それ、シンさんに言われるのは心外！」

確信的に冗談めかし、くすりと笑い合った。湯が沸き立ち、カオルは慌てて料理に戻った。

コンテスト当日。早朝から、ユウはカオル・シン・ユキと共にテレビ局に向かった。ユキが美容室のオーナーの車を借り、ドレスやメイク道具、応急用の裁縫道具を一切合財積んでの移動。本来ならば三浦が来るべきなのかもしれないが、早くもメンズの相談に入つた彼が欠勤するのを、植草と平山が許さなかった。

大勢が一同で使う控え室に入り、用意する。シンは貧血と車酔いで、ぐったりとパイプ椅子に座っていた。

ユウが周囲の出場者を見ると、ほとんどがヘアメイクだけを連れているが、中にはたった一人で衣装を抱え、メイクを始めている強者もいた。

とりあえず、三人も連れてやって来ているのは自分だけらしい。ガキの使いじやあるまいし、と恥ずかしいが、自分では何もできないのだから仕方ない。

チラシによると芸能人の参加もありで、お笑い芸人などが数人は出場するらしい。彼らは当然、別室だ。

「ぼーっとすんなよ。メイクするぞ」

ユキはメイク道具を広げ、パイプ椅子に促した。

車に乗ってしばらくは暑く、汗が浮いていた。トイレで洗面し、あとはユキの腕前を信じて目を閉じるだけ。

カオルは付き添い名目で付いてきていたが、実は特にやることなどない。ゴミを捨てたりしつつ、他の出場者を盗み見していた。

エントリーの後に書類選考があったので、いくらなんでもこの人が…という男はいないようだ。むしろ、どこからこんなに華奢で細面の男たちが集まったのかと思うと、テレビの凄さを感じさせられる。

「様になりそうな人ばかり……」

柄にもなくオロオロし、シンの横に座り込んだ。シンが、ポソリ

と面倒臭そうに言う。

「大丈夫。ユウの長身は、舞台上では絶対に映える。司会者と近寄り過ぎると、遠近感で気持ち悪くなるから気を付けて」

ユウはドレスに合わせてヒールの靴を履いている。結果、百九十センチを超してしまっていた。

綺麗なドレスを着た女装のユウは、舞台やテレビ画面ならばいい。しかし確かに、彼を自然に見せるのならば、身長二メートル以上の司会者が必要だろう。

「って言われてもなあ。つうか、新婚旅行の資金だから俺が出るのは当然だけど、シン兄が出たら、即効で優勝だったよな」

シンが一瞬きよんとし、神妙に考えた。

自慢にも何にもならないが、確かにこの出場者の中で考えれば、一番小柄だ。

「そうかなあ」

「そうかもね。シンさんなら…小柄で痩せてるし、肩幅も狭いし」大勢の男たちがメイクしたり半裸でドレスを整えたりしている、浮足立った異空間。シンも具合が悪い中、なんだか投げ槍な楽しさを覚えていた。

「そう？じゃあ、次回出てみちやおうかな」

人前に入るなんてとんでもない。ただの雑談。全員が了解して、笑おうとした時

「シン」

ユキが真剣にアイコンを引きながら遮った。

メイクへの集中力だけが原因ではなく、至って無表情…

「何？」

「こんな酔狂、出場なんて考えるなよ」

「…ただの冗談だよ。どうしたの？」

「冗談ならいい」

妙な空気が流れた。

…ユキ、怒ってる？

「なんだよユキ兄、別にいいじゃん」

「よくない」

アイメイクを受けるユウとすら視線を合わせず、丁寧に顔を作り込んでいる。彼が何を考えているのか、シンですら読めなかった。

「ユキ、やらないよ。大丈夫だから怒らないでよ」

「…怒ってないけど、そういう冗談は、やめてくれ。」

こんなコンテスト、金かアイデンティティーかが目的じゃなきゃ出ないだろ？

お前が金に困ってない以上、アイデンティティーのためってことになるじゃないか。見事に化け過ぎるのがわかっていて、やらせるような趣味はない。女装のお前なんて見たくない。俺は今のままのシンが…」

筆を動かしながら、思わず内心の葛藤を語ってしまった。淡々と最後まで言ってしまう直前に気付き、こほんと咳払いして言葉を濁した。

そのまま続くのは「好きなんだ」という言葉しかないのは明白。

シンは困ったように赤くなり、ユウとカオルは居心地悪く黙っていた。

「ほら、一丁上がり。時間的に丁度いいな。着替える」

短髪にフルメイクが余りにおかしくて、さつさとウィッグを装着した。艶のある茶髪のロングヘア。大きな縦ロールが肩に掛かるように巻かれている。

「カオル」

そのまま椅子で見ているカオルに、ユウは赤くなってドアを指差した。

「乙女の着替えを見るなよ。出て」

「乙女って」

「恥ずかしいだろ！し…下着とか、さ」

例え女装でも、いや女装だからこそ、恥ずかしさに拍車が掛かる。トランクス姿を見られるのとは、訳が違う。

「あ…そっか、いやだ、私ったら」

赤くなつた顔を両手で隠し、カオルは先に会場へと入つた。営業でテレビ局にも出入りする機会のある植草の計らいで、関係者席を手に入れることができたのだ。

ちようど一般客が入場し、採点などについてADから説明されている最中のようだ。

胸が、ドキドキしてきた。

モデルとしての仕事を全うするユウじゃない。新婚旅行なんて馬鹿馬鹿しいもののために、女装なんて馬鹿馬鹿しいことを本気でやるうとしている、そんな馬鹿を見守るためにここにいるのだ。

そう。こんなに馬鹿馬鹿しいことを。ただ、私のためだけに…無理してダイエットし、エステもして、女性用のウォーキングを習い、本気で賭けている。

旅行に行きたいからじゃない。彼の努力のために、どうかいいところまで行って欲しい。彼の望みは優勝のみ。それならば、自分も優勝を祈ってあげようと思っていた。

その頃控室では、最後の試練が幕を開けていた。

「ユキ、その紐、もっと引っ張って。あと5センチはいける筈」

「無・理、だっ…!」

「ごうか？」

「足で腰を押さえて引かないと、転んじゃうよ」

言われた通り、靴を脱ぎ棄てて腰を押さえつけ、コルセットの紐を力の限り引くユキ。

「ぐあっ!」

カエルの潰れるような声を出し、壁に手をつけて必死に耐えるユウ。一切の動揺も容赦もなく、更に引くように指示するシン。

紐を留めてしまうと、きついなりに安心感が出てくるのが不思議だ。

「あー、朝食抜いてきてよかった。つうか、この分だと時間的に昼も抜き…だな。ステージで貧血起こしたらどうしよう」

「僕じゃあるまいし。ユウなら少々抜いたって大丈夫。プロ、だもんね？」

につこりとするシンに、ヤケクソで親指を立てて見せる。手早くドレスとハイヒールに足を入れた。

「あれえ、お前、渡じゃん？」

真っ赤なチャイナドレスに身を包み、準備万端の男が驚きの声を掛けた。

ユキは警戒した目線を上げたが、化粧で誰だかわからない。ただ確かに声に聞き覚えがあり、嫌な感じがした。

「俺！TWINKSにいたテツ！今は別の事務所だけどな」

思わずぎくり、と肩で反応した。シンとユウが不思議そうな顔をしたのを見て、テツという男はニヤニヤと二人を見比べた。

「へえ。そんなことやっぺんだ。…大変、だな」

「女装に比べりゃマシだ。悪いが忙しい」

袖を通したままで放置されていたユウの背中のファスナーを留めてやり、完全に無視を決め込んでいた。

「そういう態度、取る？」

ユキを気にしているシンの視線がバレバレで、テツの意地悪心を刺激したようだ。

「今は、この子なんだ」

座ったシンの目の前二十センチまで迫り、怯えた顔を眺め回す。

背けた顎を持ち上げようとしたテツの腕。咄嗟に、ユキはそれを捻り上げていた。

「つてえな！何すんだよ」

「それはこっちのセリフだ」

「その様子じゃ、話してないんだな」

「勝手だろ」

テツは気に入らなそうにふんと鼻を鳴らし、今度はユウをじろじろと眺めた。横柄な態度で頭に血が昇り、ユウも一歩踏み出してガンの飛ばし合いになった。傍目には大柄な美女同士で滑稽な様子だが、その場の空気は完全に殺気立っている。

「何だよ。文句あんのか」

「別に。こんな大女、見たことねえと思ってよ」

「うっせえな。やるかコラ」

「ユウ、やめる。こんなの相手にすることない」

冷たく割って入ったユキの言葉が、更に気を悪くさせていた。

「てめえは、昔っからそうだな。都合が悪いと逃げやがって。お前から、こいつの前歴知らないんだろ。教えてやろうか」

ユキの手が伸び、テツの胸を壁に力強く押しつけた。

「…じゃあ、賭けしようぜ。こいつが俺より高得点出したら、黙ってやるよ。俺が勝ったら、洗いざらい話してやる。…なんだその顔。自信ないってか？」

口を真一文字にして濃いメイクのテツを睨みつけ、勢いよく手を

離れた。

「勝手にしろよ。別に構わない」

「…逃げんなよ」

無言でメイク道具を片付けるユキを蔑んだ目で見て、テツは出て行った。

「…なんだよ、あれ！ユキ兄、誰？」

「昔の、仕事仲間。昔のことをいつまでも根に持ってたんだ。気にするな、ザコキヤラだ。…ユウ、普通にできさえすれば、お前は負けない。だからしくじるなよ」

ユウを一瞥した瞳が、何気に冷たい怒りに燃えていた。

「優勝、すれば問題ない。だよな？」

「その通りだ。行ってこい。客席から見てる」

シンは不安を抱えていたが、ユウの言葉が虚勢であり、たった今の出来事で動揺しているのも見えていた。

「ユウ、大丈夫。僕が認めたドレスなんだ。誰にも負けない。」

うっん。勝ち負けじゃなくて、ちよつと毛色の違うファッションショーだと思って歩いてくれればいいよ」

遙かに背の高いユウを背伸びでぎゅつと抱き締めると、戸惑いながらも身を屈めて応じた。

「マジで照れるから。つうか、屈むと吐きそうだ」

「たまには、兄らしく励まさせて欲しいな。…じゃあ、行ってらっしゃい」

「おう！」

「おう、じゃないよ」

「おっと。じゃあ…行ってくるわね、お兄ちゃん」

頬を赤らめて投げキッスを送り、ユウも出て行った。

ユキは丸めたティッシュを捨て、数々の化粧品をボックスに仕舞い、シンと共に客席に移動した。

カオルの左隣にユキが座り、シンもその奥にすくとんと腰を下ろす。

車酔いは治っていたが、不安感が占めていた。

そういえば、ユキの昔のことなんて、何も知らないんだ。

知りたくないと言えば、嘘になる。自分はユキに、一番深いトラウマまでを明け渡しているのだ。でも…自分とユキは違う。

話して楽になる性格と、話して苦しむ性格がある。そしてその内容にもよる。

ユキは三年間、ずっと話さなかった。それはきっと、本当に話したくないこと。

カオルから見えないのをいいことに、腕を組んだユキの、脇から覗いた右手の人差指に触れる。ピリピリと力が入った腕が緩み、目立たない位置で手を握り合った。

ユキに、テレパシーで伝わらないかな。僕は、別に知りたくないって。

それで彼が安心するのなら、いくらでも言おう。大事な今は今だよ、と。

ステージの光が、眩く光った。

ユウの出場番号は、五十番中四十六番。大分待つことになる。  
カオルは一人一人じっくりと見て、ユウと比べてどうか、ということばかりを気にしていた。

これが男だなんて信じられない！という美女もいるし、どう見ても肩や脚のバランスがおかしい「男」もたくさんいる。特にお笑い芸人の粹は、外見で審査を通過した一般出場者とは違う。プロが手をかけている割にはどこか不自然だが、なんととっても人気者だ。そういう意味で得点が入ることを考えると、強敵なのかもしれない。  
「あ」

三十八番目に、思わぬ美女を発見した。会場もどよめく。

赤いチャイナ服。衣装はありきたりだが、シンプルなチャイナ服が、スタイル抜群なことを見せ付けている。歩くたび、両脇のスリットから網タイツの長い脚が伸びる。

「凄い。今までで一番綺麗かも。ね？」

何気なく振り返り、ユキが鬼のように彼を睨みつけているのを見てぎよつとする。

「どうしたの？」

「何でもない。確かに強敵だな」

シンは疲れ果て、「ユウが出たら教えて」と言い放ってユキにもたれ、居眠りしていた。ユウには絶対の自信がある。テツの姿も見たくない。関心が、ない。

ただ出場者が流れて歩くだけならばすぐなのだが、それはテレビ番組のこと。十人ごとに司会者二人でインタビュース、女性タレントにコメントを求める。最後のブロックのユウを待つのが、長く感じられた。

「それでは、最後のブロックです！」

ようやく四十番台の出場者が出てきた。

四十一、四十二…

胸がドキドキと不安に波打ち、その時を迎える。

四十六。

ユウが、現れた。

さすがに、にわか仕込みのウォーキングとは訳が違う。左手を腰に当て、右手を上品に可愛らしく前後に振り、堂々とモデル歩きを披露していた。

ウィッグもコンペの時よりぴったりと似合うものを用意してあった。ドレスは言うまでもなく。一切の不安を払拭する、その笑顔。

チャイナ服に負けないどよめきが支配し、方向を変える瞬間、アドリブで手をひらひらと顔の横で振り、待機のスペースで同じブロツクの出場者と一緒になった。

五十人すべてが終わり、長いコメントがあり、視聴者のための審査の説明が長々とあり、ようやく審査が始まった。

タレントの審査員が持ち点五点。一般客は一点を持ち、総合得点で競う。

手元のボタンで即座に電光掲示板が光り、一気に結果が出る。もちろん実際の放送では、大事な場面を途中で切って長いCMを挟み、視聴者の気を持たせる計算なのだろうが。

関係者席のカオルたちは審査権がなく、ただ固唾を飲んで見守っていた。

「さあ！それでは結果をご覧ください！」

発表されるのは上位十名。十位から順に紹介され、勢ぞろいした中から前が出る。

出ない、出ない、出ない。

四十六番が出て欲しい気持ちと、まだ出てもらっては困るという気持ちが入り合っていた。

三位で、三十八番が出た。赤いチャイナ服が前に出たが、どこか悔しそうだ。きっと優勝を狙い、自信もあったのだろう。

二位で、胸を突かれた。四十六番と表示され、少し情けなさそう

な笑顔のユウが足を出した。

一位は、一般票を掻き集めたお笑い芸人だった。お笑いといっても顔が整っており、イケメンで面白いと持て囃されているタレントだ。歌も出し、ドラマにも出ている。女装も悪くなかった。客観的に見てユウの方が綺麗だとは思うが、もしファンだったらそっちにに入れていただろう、という僅差。

「仕方ない、ね？」

カオルが明るく振り返ると、驚いたことに、一番怖い顔をしているのはシンだった。

ユキは何故か少しほっとしていたが、シンは見るからにめらめらと、青白い炎を揺らめかせている。

「誰、あれ」

「ええと、タレントさんですね」

「こんなの不公平だ」

「シンさん、仕方ないってば。それも承知で出てるんだから」

「ユウの方が美しい。僕の審美眼は確かだ」

ユキがシンの手の甲をぽんと叩いて、さばさばと慰めた。

「シン、フェアじゃなくてもルールだ」

「テツに勝ったから？僕はユウが優勝じゃなきゃ、納得できないよ。

…ごめん、子供染みてる。悔しかっただけ」

頑固で往生際が悪い自分を張り倒したくなる。優勝にこだわる自分は、まだいい。でも勢いに任せて、また嫌なことを口走ってしまった。

小声の遣り取りの間に収録は終わり、控室へ戻った時には、出場者たちはもう着替え始めていた。

カオルは着替えまで待ち、片付けだけ手伝いに入室した。

ユウはメイクを落とし、がっかりと顔を拭いていた。

椅子の上にドレスが掛けられ、コルセットもウィッグも椅子に置かれている。

カオルが小物をケースに仕舞い、結果が出た時よりも暗い表情の

ユキは、ドレスをハンガーに掛けてカバーを掛けた。

「カオル、お疲れ」

「ユウ、お疲れ様」

それ以上に、今言うことなどなかった。黙々と片付けたが、シンはシヨックが醒めやらず、俯いていた。

「シン兄、大丈夫か？ごめん、あと三票足りなかった」

「ユウ、偉かったよ。僕は結果には納得してないけど。でもまあ、仕方ないんだよね？うん、仕方ない、仕方ない……」

うんうんと頷いた癖に、なんだか元気がない。今シヨックなのは結果ではなく、ユキにテツの名前を出した自分に対してだった。

ユキは当たらず障らず平常心で片付けたが、素顔に戻った細い顔の男が寄ってきたのを見て、嫌悪感を露わにした。

「そんなに嫌な顔、すんなよ。約束だからな、仕方ねえ。…お前、井田のその後、知ってるかよ」

「…知らないね。知りたくもない」

「実家に戻って農業、だど。落ちぶれた末路だな。それでも生きてるだけマシか？いやいや、ある意味殺されたよなあ、お前に」

ユキが、見たことのないほど狼狽していた。口を開けたまま、返事もままならない。

「あなた一体、何様なの？」

ユウがいちゃもんを付けようと息を吸ったが、先に割って入ったのはカオルだった。きつとこれが赤いチャイナ服。ユキが鬼のような顔で見ていた相手。準備中のゴタゴタを見てなくても、何かあったことは歴然としている。

「農業は、落ちぶれた産業じゃありません。華やかじゃなくても、大事な仕事ですよ！あなただって野菜くらい食べるでしょ？」

「…何、このブス。超、理屈っぽいんですけど！」

「てめえ、この野郎！」

面と向かって馬鹿にされ、逆鱗に触れられたユウが、完全に自我を失った。筋肉を落としても心得のある拳がテツの横顔に入り、彼

は壁にすつとんで倒れた。

そこからは、二人の乱闘。

テツも見た目の割には力があり、殴り合いになった。

ユウをユキが、テツを連れのアシスタントが羽交い絞めにし、逃げるようにテレビ局を後にした。

「もう。馬鹿なんだから」

車の中で、ユウの口もとの血を拭いた。

何より大事な商売道具な筈なのに、口の端が切れて赤くなっている。数日で青くなり、完全に治るまでは更に数日かかってしまうだろう。

「うるさい、カオルが悪いんだぞ。わかりもしないのに口出して」「だってあの人、感じ悪かったんだもん。ユキの顔見て、黙っていられなかった。それに本当に、農家が落ちぶれてるなんて言い方、悪いことだもん」

ユキはハンドルを握り、緊張が解れて笑みを漏らした。

「あんがとな、カオル。心強かった」

そう？と照れるカオルに、ルームミラー越しに頷いて車を進める。…それにしても、食ってかかる言葉が「農業は落ちぶれた産業じゃない！」ってのは、最高に傑作だ。井田もきつと、誰かの腹を満たす、尊い仕事が入っていると思いたい。

渋滞にはまり、極端に進まなくなった。

ハンドルに腕を預け、頬杖を着いて前のトラックの後姿を見ていた。

後ろでは、ユウもカオルも眠っていた。収録が長かったし、結婚式前のヤマを一つ越えたのだ。無理もない。

助手席ですつと静かにしていたシンが、ユキの肘に触れた。何かに気を遣う時、自分の反応が怖い時、よくそうする癖だ。

「何？」

「さつきは、ごめん。酷いことを口走ってしまった」

「実際、ほっとしてたんだから仕方ない。顔に出てたんだろ、きつと。」

ユウのコンテストが俺に関する賭けにすり替わって、負けて悔し

がるところをほっとするなんてな。俺の考えの方が酷い」

秋の日はつるべ落とし。瞬く間にも空の色は変わり、オレンジから赤へ、そして夜の空へと変わっていく。

右手一本で運転し、左手でシンの掌を撫でていた。

「井田 井田誠一郎ってのは、ヘアメイクの先輩で、昔の恋人だよ」「いいよ。聞きたいなんて思っただけ」

「遠慮するなよ。俺は構わないから。むしろ、変な風に想像されるくらいなら、きちんと話した方が楽だ。」

今まで進んで話さなかったのは、昔俺が不誠実だったっていうだけの話だから。シンに嫌われたくなくて、昔のことは昔のことだって理由付けして避けていた」

ドリンクホルダーの缶コーヒーを飲み、一呼吸入れる。

「僕、嫌わないよ」

わかつてる、と呟き、トラックに続いてブレーキを少し緩める。

とるところと都心を進む、いろんな荷物を背負った蟻の行列を思う。

「話の出だしとしては、別に特別な話じゃない。メイクの仕事に就いて、自然に井田と付き合うようになった。こういう業界は、男女のボーダーラインが曖昧なのが多いんだろうな。俺やシンも含めて、同時に登録先の若社長に気に入られて、俺は野心だけでそっちに

乗り換えた。いや、実際は完全に二股だった。社長の方には愛情なんてないんだから、気にするな。気にするくらいなら別れてやる。いつでも言えよ、なんて平気で追い詰めていた」

「…そんなユキ、想像できない」

大きな丸い瞳に、横顔を見詰められているのを感じる。握ったまままだった缶を置き、手探りで頭を撫でた。

「それは、今の俺しか知らないからだ。それに井田は歳も少し上で俺よりずっと才能があつて、精神的に依存していた。その癖癖がつてて、自覚してなかつたんだから悪質だ。」

放置されたり、屈辱的な女装させられたり、傷付いた心身に耐えられなくなると、飛び込むように井田の待つ部屋に帰る。狂いそう

な精神をぶつけて、癒されて、また待たせて…どうして、あんなに酷い俺のことを待ってたんだろうな。

社長が二股に気付くのに、そんなに時間はかからなかった。今思つと、かなり異常な奴だった。激昂して二週間監禁され、酷い目に遭わされ続けた」

久しぶりに思い出す、灰色の記憶。

広いマンションの一室。床に半裸で捕縛され首輪で繋がれ、食事も水もまともには与えられない。意識が戻ると目の前に足があり、その先を見上げると、楽しそうにスタンガンを構える男がいるのだ。

赤信号に変わったばかり。目を閉じてシンの手を取り、その光景を打ち払おうとする。手が震えることを、隠すつもりはなかった。

「俺は奴が出掛けた隙に、命からがら逃げ出した。秋の終りの、嵐のような大雨の日だった。ずぶ濡れで傘もなく、上着どころか、最低限の洋服しか着ていない俺を拾ったのが、VERTESのオーナーだよ。数日間介抱されて、恐る恐る自宅アパートに戻ってみた。…どうなつてたと思う？」

シンが手をぎゅっと握り返すことで、先を続けるように頼んでいた。

そろそろ信号が青に変わる。ちらりと助手席を見ると、穴が開きそうなほどじつとこちらを見詰め、想いを重ねて言葉を噛み締めている瞳があった。

「アパートは放火され、全焼して跡形もなくなっていた。隣の部屋で一人暮らしたった老婆が死んだが、犯人は捕まらなかった。放火だと聞いた瞬間にすべてを理解し、俺は脱兎の如くVERTESに逃げ戻ったよ。知り合っただけのオーナーに迷惑掛けるのは気が引けたが、田舎の父親は病気がちだったし、姉貴は結婚が決まつて、他に頼る処がなかった。

井田にも当然電話してみたが、不通になっていた。俺相手にあれだけやったんだ。井田に対してどんな仕打ちをしたのか、想像するだけで鳥肌が立った。例え無事でも、何を言われるのが怖くて、

会いになんて行けなかった。とにかく、匿ってもらう間に本格的に美容師の修行して、仮の名前で仕事した。

たった一人、電話番号まで覚えていた仲間がいてな。半年も過ぎた頃に、やっと精神的に連絡を取る余裕ができた。井田は、俺が監禁された当日には登録が抹消され、業界で生きていけなくなるよう根回しされた。俺のアパートと同じく、住まいも失ったらしい。そこまで聞いて、俺は電話を一方的に切った。もう、何もかもから手を引きたかった」

自分のことのように息を詰めて聞いていたシンが、声を震わせた。「好き、だったのに？」

「余計なことが多すぎて、今となってはもうわからない。好きだったんだか、頼ってたただけだったんだか。俺がどうしようもないガキだったことだけは、はっきりしてるけどな。ガツガツ仕事して、野心が勝って二股した。監禁・放火されて、恐ろしさが勝ったからと逃げて、捜すこともできなかった。要するに、それなりだったんだよ、きつと」

「渡幸範は、本名？」

「もちろん」

「大丈夫なの？」

「ああ。若社長、事故で死んだらしいから。新聞の訃報欄で知ったことで本名に戻して、伸び伸び仕事してられるよ。もう、全部終わったことだ」

シンの胸が、ほつと上下した。

渋滞を抜け、車は順調に走り始めていた。両手でハンドルを握るために手を離していたが、赤信号の隙間に頭を引き寄せた。

シヨックを受けた彼に一度キスし、解放して前を向く。名残惜しそうに横向きに留まる、その白い頬。胸の痛みが、現状そこに居てくれる存在への愛情を際立たせる。

「でも…やっぱり好き、だったんじゃないかな。ちゃんと、真剣にテツにその後を聞いた時のユキの顔、見たことない顔だったもの」

シンの落ち着いた声に、一切の嫉妬も戸惑いもないのを感じ、純粹に嬉しいと思える。温室から出て、風に吹かれる白い薔薇。髪型が変わっても、幾分か社交的に成長したとしても、なびいて元通りに戻るしなやかさに変わりはない。

「そんな顔してたのか？ 笑えるな。テツの名前が出たから、ついでの話。俺が逃げてから、あれだけ粘着質の社長が俺を追わなかったのは、遊びに飽きたから。その後釜がテツだったらしい。奴が野心家だったことは、昔の俺と変わりない。喜んでほいほい深みに足を踏み入れたんだろ、きつと。じゃなきゃ、俺にあんな突っかかり方する言われはないからな」

車内を沈黙が包み、後部座席から「くぁー、くぁー…」という能天気なユウの寝息が聞こえていた。ルームミラーを見ると、カオルもドアに肘を着いたまま、気の抜けた顔で眠っている。

シンが、思い詰めて膝に触れた。上から掌で包むと、温かい想いが流れてきた。

「ユキ、もし…」

あ…いい。なんでも、ない」

さつと引つ込めそうになった手を押さえ、強く握りしめた。

「捜す。絶対助ける。殺される前に相手を殺してでも逃げて、命を懸けて守り抜く。それ以前に、そんな状況に追い込まれるようなへまはやらかさない。」

多分、綺麗ごとでも何でもないよ、この気持ちは「  
白く長い指が絡まった。

何も話す必要がなく、カオルが目を覚ますまで、ずっとそうしていた。

コンテストが遠い過去の記憶になってしまい、シンの中では昔のユキのことが渦を巻いていた。

迷いなくユキを信じている。

多分、この気持ちは綺麗ごとでも何でもない。

台所では、カオルが何か作ってくれている。ユウ発・レン着の通話が、三秒沈黙していた。

「……………」

電話の向こうから怒りが伝わってきて、ユウは身構えていた。

レンが、無言で拳を震わせる様子が目に浮かび、戦々恐々とする。……「……だからやめろと言っただ」

案外に静かな返事が返ってきたので、逆に驚く。

「俺なりに頑張っただけだな、悪い」

「で？フランスはどうするんだ」

「無理だろ、どう考えても。カオルはわかってるよ。俺が往生際悪いこと考えると、余計心配掛けるらしいからさ。地道に働いて、行けたら行けた時に行くよ」

男として情けないとは思うが、実際その通りでしかない。

共働きなら、そのうち貯金して旅行くらい行けるようになるのかな……

しかし、ユウの願いは旅行だけではない。カオルがその気になつてくれたら、すぐにでも子供が欲しい。

もし自分の不安定な人気商売に火が点いて、経済的に余裕ができたととしても、その頃に小さな子供がいたら気軽に旅行には行けないだろう。

あれも欲しい、これも欲しい……なんて欲張りなんだろう。

でも、カオルはいつも無欲に見える。年寄りじゃあるまいし、必要以上に「ほどほど」を好む傾向がある。ならば自分が先回りして、本当の望みをキャッチしてやらなきゃ駄目じゃないか。これくらいのこと、負けてはいけないんだ。

レンはまだぶつぶつと何か言っていたが、そのまま当たり障りない報告で電話を切り、ベッドに仰向けになる。

仕事、確認しなきゃな。

ジム、いつ行ってもいいんだ。ていうか、身体戻さなきゃな。

本題の結婚式の話、詰めなきゃな…

コンテストの結果が残念で残念で堪らない気持ちを、現実感で忘れようとしていた。

まだ二十三歳。特異な兄たちのように裕福でなくて当然。しかしだからこそ、コンテストに賭ける気持ちが大きかった。

疲労感が募るだけで終わった半年間。

全力で突っ走り、悔いなどどこにもない人生だと自負しているが、もし人生のどこかに空白の無駄な期間があるとしたら、この半年間だと断言できるくらいの徒労感。

閉じた瞳の裏がぼやけ、淡い夢が広がっていた。

どこともつかない紺碧の空をバックに、戸惑った笑顔のカオルの手を引く夢を。

「ユウ、ご飯」

うつとりする夢の中でも、どこの国だとかどんな風景だとかいうことは、眼中になどない。見えるのはカオルの顔と声だけ。

「ご飯？何食べたいんだ？」

海外、だろ？フランス料理だろ？

比較的大きくなってからは、両親と共にフルコースの会席に招かれる機会が何度もあった。

フランス料理、どんなだったかなあ？

あー、俺、何も考えずに食べてたんだなあ。オムライスしか思い付かないなんて。

「ユウ、起きてよ」

「…ん？」

頬に手が当てられ、覆いかぶさるように俯き気味の彼女と瞳が合う。

「ご飯できたよ。眠い？食べられる？」

気遣いを感じられ、掌に唇を当てた。

「食べる。ダイエット解禁だもんな。幾らでも食べそう」  
実際、飢えている。身体的にこんな無理をしたのは初めてかもしれない。

無理を通せば道理が引つ込むというが、これだけやっても尚、コンテストには勝てなかった…

カオルの手を借りて起きる数秒にも、また凹みそうになる。

「うまそうない」

二人掛けの小さなテーブルには、豚肉の生姜焼きを主菜に、キンピラ、胡麻和え、大根の煮物が並んでいた。

「こんな短時間に、こんなに？」

「ううん、今作ったのは生姜焼きだけ。せっかく好きに食べられるのに、待たせちゃ可哀想だと思ったから」

ああ、なるほど。

ユキに頼んで自宅に寄ったのは、そのためだったんだ。

ということ、これを見越して作っておいてくれたということ。感激する気持ちは気持ち。「いただきます」もそこそこに、次々と口に運んだ。

一口飲み込むごとに、元気までもが腹に落ちてくる。

全体の味は薄く、肉と一緒に玉葱は甘く、キンピラは一味唐辛子でキレのある辛さ。久々の白いご飯は少し柔らかめで、失敗でないのなら、ダイエットで豆腐に慣れてしまった胃を考えてのことだろう。そして、カオルが料理を失敗することなど、滅多にない。

彼女は先に食べ終わり、ユウが箸を置くタイミングで温かい緑茶を置いた。

「カオル、魔法使いみたい」

「あら？何だか最近、よく言われる気がするわ。…そんなんじゃないんだけどな」

ぼつりと小声で呟き、両手で包んだ湯呑の中を見ていた。

そんなつもりなく、思わせぶりな言葉に聞こえる。

ユウは天然的に明るく、彼女の目を覗き込む。

「ねえねえ、魔法じゃないなら、愛情？」

「…おべんと」

「弁当？」

「おべんと、付けてる」

質問の返事は返されぬまま、カオルの指に頬の米粒を摘まれる。

当り前の顔で自分の口に入れたのを見て、更に満面の笑みになった。

「ねえ、答えてよ」

また一押しする、馬鹿馬鹿しさ。要するに、照れて赤らんだり怒ったりする彼女が見たいだけ。

「ユウに対する、とは限らないけどね。シンさんにも言われたんだから。」

私だって、みんながみんなに気を遣ってたら疲れちゃう。何を欲しているか、眠いのか食べたいのか、それが大事な相手なら気持ちよくさせてあげたい。そう思ってるだけなんだから、魔法じゃないんだよ」

やはり少し照れながら、茶碗を重ねてキッチンに運ぶカオル。

何度見ても、その後ろ姿に惹かれる自分がいる。遠い昔は想像もできなかったが、今はそう。惹かれた時にこうやって、いつでも抱き締められる。

「そんなことするくらいなら、お皿下げてよ」

「わかってるよ、でもさ…それってやっぱり魔法だと思うよ、俺は少し驚いた気配に、幸福の形を見ていた。」

首筋に軽くキスをし、完食した皿を運んだ。早く終わるように手伝い、お茶のお代りを持ってソファで一休みする。

「カオル」

彼女の湯呑を取り上げて置き、大きな両手で小さな両手を包み込む。剣道現役時代よりは柔らかく滑らかになったが、長年竹刀を振るったことで節のしっかりした指は、一生白魚のようにはならないだろう。

それでもいつも魔法を生み出す、愛情深い両手。

「負けて、ごめん」

「何言ってるの。謝ることじゃないでしょ？」

カオルの顔は、ユウの顔を映したように同じ表情をしていた。情

けない、切ない気持ちになる。

「私のこと喜ばせようとしたんだよね。旅行よりも、その気持ちと努力が嬉しかったの。だからもう、本当に新婚旅行のことは忘れてね」

慰めの中、遠まわしに「もうヤマツ気は出すな」と釘を刺されて  
いるらしい。

直前まで虚勢半分で「コンテストは来年もあるからな！」なんて  
冗談を言おうとしていたのだが、残り半分の「本気」までも引つ込  
めざるをえなくなった。

指先に唇を寄せ、眉にも、瞼にもそつと当てる。熱い唇に対して  
頬は冷たく、唇に移動すれば同じだけの熱を持っている。

「泊まればいいのに」

「しょっちゅうだと、じいちゃんが心配なの。私がいないと、うど  
んかお茶漬けくらいしか作らないし。いつもサトさんを頼りにする  
のも、ね…」

「そっか…そう聞いちゃうと、なんか悪いな」

ユウが重三に会う時は、カオルがいて食事も当然作ってくれる時。  
頭も身体も元氣そのものだからと気にしていなかったが、祖父がた  
った独りで汁をすすする姿を想像すると、まるで彼女を奪っているか  
のように錯覚してしまう。

カオルは「ううん」と首を振ったが、甘えるように肩にもたれか  
かった。

「考えてみれば、じいちゃん、もうすぐ八十二なんだよね。世間の  
八十二歳からしたら、全然若いとは思っけど…ねえユウ。いつか…  
いなくなつて、しまうのかな」

「え、そりゃあ…」と不用意に答えようとした言葉を、ぐつと詰め  
て黙った。昔からふとした時に見せる、死への恐怖。両親を亡くし  
最後の身内である重三は、平均寿命を既に超えている。不安でない  
筈がない。

「死ぬ」は酷で、わかりきっていること。「死なない」はただの嘘

で、いつか訪れる死を余計に際立たせるだけ。

愛情を以てしても、彼女を満足させる、魔法のような返答を生み出すことなどできない。

「カオル、結婚のこと、考えよう」

「え？」

急に話題を切り替えられ、彼女は戸惑って身体を起こしたが、離れないようにふわりと抱き締める。

「お互い忙しいし、式の相談するにも好都合だし、早く一緒に住もう」

「…うん、でも…」

頭までは簡単に切り替わらず、生返事になっている。少し薄くなった胸板に手を当て、ユウの表情を見ようとすると、カオルの頭に鼻先を埋めて、見せてくれようとはしない。

「新居、どこがいいかな。…俺、思ったより親思いらしくてさ。できたら実家から徒歩十秒の、ボロ屋に住みたいな、なんて思ってる」  
訳

「ユウ…ボロは、余計なんだけど」

「ボロだろ？愛着のある、平屋一戸建て、道場付き。そんな物件、ないかなあ？」

ぎゅっとシャツが握られ、カオルがしばし無言になった。

きつと今、嬉しいと感じてる。そして、甘えていいのか迷っている。

「ちよつとした家賃を取ってもらっても、他で暮らすよりは全然節約できるし。」

それで、貯金ができたら、何より先にフランスに連れて行く」  
胸に当たる顔に力が込められ、腕を回して抱き付かれる。

ユウとしては、実は以前から考えていたこと。プロポーズの時に冗談めかして「同居もOK!」なんて言っていたし、そんなにびっくりすることでもないと思っていた。

それなのに、カオルは胸に顔を擦り付け、湧き上がる涙が染み込

んでくる。

これ以上は甘くできない声で、頭に直接響くくらいに口を寄せた。「新居、別で探さなくてもいいよな？」

こくり、と小さく頷く。

「それとも、狭くても便利でオシャレな処、探したい？」

今度は強く、首を横に振る。

「言わなきゃ、わからないよ」

「どうして、そんなに優しいの？」

「俺は聖人君子じゃないから、じいちゃんがもし嫌なジジイだったら、きつと傲慢に新居探してるよ。でも、俺にとっても本当のじいちゃんみたいなもんだから、抵抗なんて全然ない。いざ介護に直面してから引越しの段取り付けて、また同居に向けて再出発なんて面倒臭い。ただそれだけだよ」

カオルのためだとか祖父のためだとか、愛しているからだとか言われるより、何故かカオルの胸にぐつと温かく突き刺さった。

それが、その考え方が、優しいんだよ。

「ユウも魔法使いだね。不安になっても、すぐに吹き飛ばしてくれる」

「うん、そうだよ。だから結婚式や披露宴で怖くなったら、必ず俺を見て。いつでも君を、安心させるから」

記憶の限り、生まれて初めてユウはカオルを「君」と呼んだ。

こんなタイミングのこんなセリフなんて、一体どれだけの口説き文句なのだろう？

ユウは自然に、表現したいように愛情を見せているだけ。その天然の、天性の墮とし文句に、何度墮とされたかわからない。

これが故意ならば、天職はミュージシャンでもモデルでもなく、ホストだろう。

呑み込まれてしまいそうな渦に負けないよう、少し皮肉に考えながら、ただ抱き付いていた。

「カオル、そろそろ帰らないと。じいちゃんが心配なんだろう？」

「うん…本当は、帰りたくない」

「わかってる。…そうそう、俺、来週暇なんだ。いきなり引っ越していい？」

「ら…来週？」

思わず絶句し、がばつと離れて顔を凝視した。

たった今の甘い雰囲気とは百八十度逆方向に、生き生きとやる気に満ち溢れている。

ああ、これだ、鉄砲玉…

言い出すとなかなか翻らない、本人は至ってナイスアイデアだと思っっている、早急な思い付き…

カオルは頭を抱え、

「ちよつと待って、じいちゃんに、相談してから…ね？」  
と諫めるのが精一杯だった。

シンは長い道中でくたびれ、ダイニングテーブルに着いたにも関わらず、頂垂れて眠りそうになっていた。

「こら、うちのナルコプシー。薬飲むために、一口でもいいから食べな」

一度はシンにプレッシャーを与えまいと、無理に食べさせるのをやめていた。

しかしレンのお説教の後、心配熱が気遣いより勝ってしまい、食事する椅子が席替えになってしまった。最初から、シンの隣。宿めたりすかしたり、口を開けさせようとする。

今日のメニューはカキフライ。衣は薄くして油控え目。いつもの温野菜たちの他に里芋の煮物も付き、常備菜の小アジのマリネも並んでいる。

シンキチはケージから出されており、ドッグフードしか食べさせたことがないのに、テーブル下でおこぼれがないかウキウキ待っていた。はつきりと笑った声で、ワンと鳴く。

「ユキ、どうしよう」

「何だ？」

「カキ、好きじゃない。里芋もぬるぬるが嫌だ。マリネだって、小骨……」

「子供か！ちゃんと栄養を考えてるんだぞ」

「うー……」

箸を一応手に持つが、何も挟まない先端を唇に当てて考えているだけのシン。

「…まあ、いいや。じゃあソース……」

「中濃はやめとけ、こっちこっち」

自作の薄味タルタルソースを差し出され、悲しくなってしまう。

生の玉葱味のソースなんて、無理を言うにもほどがある。

「あ、あからさまに嫌な顔したな」

「泣くよ、そろそろ」

「ちよつとは頑張れよ。俺が作ったのはうまいんだから。…大体、カキが嫌いだなんて初耳だぞ」

「綺麗じゃない」

「あ、やつぱり見た目じゃないか」

白いタルタルソースを自分のフライにかけ、カラッとうまく上がったその味を見る。

絶対、うまいのにな。絶対、食わず嫌いなだけだな。

椎茸もシトウも、半分無理に食べさせてみて「へえ、意外とおいしい」という言葉を引き出したのだ。

洋食が多かつたらしく、特に和食材の苦手意識が強い。納豆嫌いはどうにもならないようだが、観察するだけで食べないものに関しては、一度は試すように促すことにしている。

カキフライはどう考えても洋食な筈なのだが、もしかすると、自分の思う洋食と、天城家の本格的な洋食には違いがあるのかもしれない。

「とにかく、ほら。一個食べて無理ならいいから」

自分のよりはソースも少なく、玉葱は容赦して除けてやり、口元に持って行って反応を見る。

うつと身を引きさえしなれば、食べる余地のある印。今も口は閉じているが、難しい顔で考えている。

口を閉じた力が揺るめられ、ユキをちらりと見て一口齧る。

この押し問答で、せつかく揚げたてだったのが冷めかけている。

それでも、まだカリツとしていて旨い筈だ！いけ！

実際においしかったのか、眼力に押されたのか、シンはもう一度口を開いて、残りの半分を食べきった。

もそもそと白飯を後から口に運び、満面の笑みのユキを見て、少し悔しそうにする。

「…思ったより、おいしいよ」

「じゃあほら、次は里芋。煮崩れないようにしたし、小芋じゃなくて大きいのを切れば、滑りも少ないだろ、きつと。」

マリネも、碌に食べたことないじゃないか。骨ごとなんだよ、これは。嫌なら頭は残していいから、な？」

小皿で芋を切り分けて小アジも載せ、今度は押し付けずに目の前に置いてやる。

これで箸を付けないなら、今日はお終いだ。仕方ない。

シンは少しずつ白飯を食べ、もう一つカキフライを食べた。

ああ、もう満腹だな、きつと。

諦めかけた時、箸が小皿へと向かった。

里芋を一切れ食べ、迷った挙句、小アジも身だけを少しほじって口に運んだ。

「御馳走さまでした」

席を立つシンを追い、カウンターの薬を慌てて差し出す。

「あ、忘れてた」

ユキがいない時には忘れないように気を付けている癖に、こういう時はすぐにうっかりしてしまう。無意識に依存している自分を感じ、戒めなければと思う。

井田という男に、精神的に依存していたユキ。「二股が嫌なら別れる」なんて、自分勝手な発言をする彼の姿は想像もできない。

ユキは、きつと後悔している。自分も、後で振り返って「依存していたからだ」と後悔するような関係ではいたくない。わかっているのにユキに甘えて、どこまでも頼っている現状。

考えるのも嫌だけど、もしいつか関係が壊れてしまった時…このままだったら悲しくなるだろう。もっと考えていればこんなことにならなかつた、なんて。身体よりも、そつちを恐れる気持ちの方が、より積極的に動かしてくれる。

美しくないカキは、やつぱりそんなにおいしくなかった。

里芋は、やつぱりぬるぬるしていた。

小アジは…骨まで食べると押されなかつたから、ちよつとホツと

した。

でも、彼のために我儘を抑えているうちに健康になれば、喜ばせられるのだ。

苦い粉薬は、里芋に比べたら全然抵抗のない味だった。要するに、慣れということ。

「ユキ、えつと」

「ん？」

「僕、ちゃんと頑張るよ。もっとたくさん食べる」

「いいことだ」

ユキが喜ぶこと。

もっと幸せになれること。

僕でしかできないこと、言えないこと。

シャワーを浴びながら、考えていた。その内容はもしかしたら、ユキを喜ばせるどころか嫌な思いにさせてしまうかもしれない。

それでも、他に言ってあげられる人なんていないのだから。

もっと大人になりたい。だから、ちゃんと頑張ろう。

風呂場は、シンにとって落ち着いて物を考えられる場所の一つ。

儀式のように決まった流れで身体を洗い、ユキに話したいことを整理していた。

コットンのパジャマを着てベッドに横になつてみると、ユキが入れ替わりにシャワーを使う音が遠く聞こえていた。

眠気は、どこかに消えていた。

毎晩ユキはシャワーの後に天気予報を見て、翌朝シンキチの散歩ができるかチェックする。そして自由にさせていたシンキチをケージに入れ、床をペーパー式のモップで一巡りし、シンの横にそつと入って眠るのだ。

ユキが家中の電気を消して隣に来た時、向き直って目を開くと、こちらが驚くくらい驚いた声を上げた。

「起きてたのか？」

体調にもよるが、ほとんどの場合はシンが先に眠り、ユキが来たからと起きることも少ない。無意識のまま抱き付いて眠り続ける。

「ちゃんと食つて、元気付いたのか？」

ふざけた口調、暗がりの温かい声。

そつと寄り添うと、手を握って仰向けにされ、耳に唇を感じる。脚を絡めて上に乗ろうとするのを、手で押し留めた。

「ユキ、違くて…話したいことがあるんだ」

「いいよ。手短にな」

軽く勘違いしたが、脚を外して離れる気もない。密着して囁くと、シンの頭からも、話そうとしていることが抜けてしまいそうになる。「変な風に思わないで欲しいんだけど。」

あの…井田さんに、会つてみたらどうかかな」

不意打ちで放たれた言葉に、胸を貫かれる痛み。

シンの意図がわからず、柔らかい茶髪を手で梳いて動揺を隠す。「テツに言われた時の、あんな顔をして欲しくないって、思った。あんな顔するくらいなら、ちゃんと解決しなきゃいけないんじゃないかな」

「…昔のことだ。関係ない。あいつだって喜ばないだろ。」

「忘れた頃に姿を見せて、一体何を話すんだ？ごめんか？農家は大変か、なんて世間話か？…そんな神経、持ち合わせてないよ」

優しい声が、傷付いている。だからって、口に出した言葉を取り消して済む問題じゃないんだ。

「辛い思いさせるために言ってるんじゃないよ。」

「じゃあさ、想像して。ユキに依存ばかりして、勝手なことばかり言ってる僕のせいで何もかも失って、何年も経ってから僕が謝ったら迷惑に思う？ふざけるな、今更何だ、今まで無視してきた癖につて、なじる？」

「場合が、違うよ。別にあいつは」

「井田さんも、ユキのことどうでもよかったの？僕はその人のことなんてわからない。でも、冷たくされても関係を終わらせなかった理由がなきやおかしい。ユキが思っているより、ずっと好かれていたのかもしれないよ？僕が井田さんなら、ユキが来たら確かに戸惑うけど、きちんとした終りが来たんだって思えるかもしれない。」

「…今更ってというのは間違いないから、ユキがどうしても嫌なら聞く必要なんてないし、これ以上は何も言わない。でも僕のことばかり考えていないで、自分のことも考えなくちゃ。自分を肯定できないと…もしも僕が死んでしまった時、無駄に後悔するよ」

握られる手が振り返るほど、強く力を込められた。微かに顔をしかめるが、知っていても緩まることがない。ユキの声が、手と同じくらい震えている。

「シン、フェアじゃない。何を言ってもいいけど、死んだらなんて話ならお断りだ」

「本当のことだよ。別に、僕の身体のことだけ指して言ってるんじゃない。明日事故で死ぬかもしれないし、それはユキだって同じ。」

そう思うと僕だって怖い。怖くて堪らない。だから少しでもユキを喜ばせたい。ユキが何も悔いなく、能天気な昔の話ができるくらいになつて欲しい。

もう言わないよ、押し売りしないでお終いにする。「ごめんね、ユキ」

ぴったりと寄せた身体が熱くなり、きつく抱き締められる。

「俺のこと、心配してるんだ」

「当り前だよ」

「昔の俺に、それくらい心があつたらよかつたのにな」

それだけ言い、抱き締めたまま体勢を変える。優しくとも強引なキスと指先で、服を剥がしていく。

「ユキ、僕のこと、赦す？」

「赦すって？」

「昔のユキよりも、きつとずっと依存してるよ。ユキがいなければ、僕はきつと死んでしまう」

「…フェアじゃないって、言ってるだろ。でも、そうだな。俺もきつと、シンなしじゃ生きていられない。同じ依存でも、その点では大分成長したんだよ、俺も。そこにはちゃんと、心があるんだから」  
衣擦れの音、唇を食み合う音。シーツを蹴って身を擦る仕草。素直に漏れた吐息がユキを刺激し、動きを早急にさせていく。

明日の起床時間、シンキチの散歩、シンの体調や体力…一つ一つが徐々に些細なこととしてユキの脳から抜け落ちていく。果ては井田の話までもを忘れられるよう、すべてを本能に預けることにした。こつという時のシンは、いつもよりもつと綺麗だ。

欲情を満足させればいいのではない。なんだか譬えようなない痛みがチクチクと湧き起こり、深い部分で慰められたかった。

たまにはこんな夜があつても、いいんだよな？

暑そうに暴れて布団を落としたシンも、同じように思っているに違いない。

赦して欲しい、受け入れて欲しいと。

ピリピリとしてユウとの電話を切った処に、脚に愛莉がしがみ付いた。

はっと我に返り、愛娘を抱き上げる。

「パパ、けーたい?」

「ん? そうだよ」

「ユーたん?」

「よくわかったね」

「おこったもん」

ぷっと笑う声がして、キッチンで林檎を剥いている弥生を振り返る。

「そうだよねえ、パパはユウたんのこと、いつも怒るもんね」

「シンたんにも、おこる。パパ、きらい!」

暴れる愛莉を降ろすまいと、ぎゅうつと優しく抱き締めた。

「パパ、怒ってないよ。ユウやシンが悪い大人にならないように、教えてやってるだけだよ?」

首を傾げて考える頬に、ちゅつとキスをする。パンチで眼鏡を飛ばされそうになっても、へこたれない。

これでも、怒りを十分の一に我慢したのだ。

何故なら、奴の女装騒ぎのお陰で、こうしてまた抱っこさせてもらえるようになったのだから。

香水を「くしゃい」と言われ、クローゼットの中身を全部クリーニングに出し、一日中開け放って換気し、それでも近寄らせてはもらえなかった。それなのに、ユウのドレス姿に怯えた途端に治ったのだ。

本当の処を言えば、愛莉が驚いた時に弥生はユウのすぐ隣にいて、シンはユキの陰にいて見えなかった。直線状にいたのが、唯一レンだったというだけの話。

一度抱き上げられてみれば、もうおかしな臭いはなくなった父親。誰より愛してくれて、自分のことだけは絶対に怒らない、優しいパパ。

仲直りしても、すぐに傷付く面白い反応が見たくて「嫌い」と言っただけは、絶対的に護られていることは、三歳児でもよくわかっている。

「レン、いい加減、コンタクトにするかレーシックでも受けたら？眼鏡が幾つあっても足りないでしょ」

「駄目だ、余計にシンと間違われる。この前も、ファッション系の記者に間違えて声を掛けられた。まったく迷惑な話だ」

どうして子供というのは、装飾品に興味がないのだろう？とありえず今は外し、カウンターの定位置に置いた。

触る、壊すはまだいい。真似をして、度の入った眼鏡を掛けてしまっただけだ。

そのせいで、視力がおかしくなったら大変じゃないか。

弥生はくすりと笑い、眼鏡のないレンの顔をじっくりと見た。

「そうね、シンくんが健康になるほど、きつともっと似てくるわね。ユウと違って、背だつてあまり変わらないし……」

物言いたげに林檎の皿を持ってソファに移動し、小さくカットしたものにフォークを刺して愛莉に渡す。

しゃりしゃりと、彼女が膝の上で素直に食べ始め、感動を必死で抑えるレン。弥生はその横顔を、柔らかい笑顔で見詰めている。

「でも、逆なのよね。愛莉、パパは怒っても優しいんだよ、ねー？」  
彼女は半分無視で食べ続けていたが、弥生は気にもしていなかった。レンの不思議そうな顔を、いたずらっぽく見る。

「シンくんが間違われる方が、よっぽど怖い…でしょ？」

図星でさつと視線を外し、蜜入りの林檎を一切れ口に入れる。

「何を今更、馬鹿馬鹿しい」

「もしユキが、シンくんにパーマ掛けたらどうしよう。シンくんが暗い部屋で仕事しすぎて、眼鏡掛けるようになったら、どうしよう

ね？」

「意地悪だな」

想像するだけで冷や汗が出る、脛に傷を持つ身。

今でも鮮明に思い出せる、ベッドの上の青白いシン。すぐには意識が戻らず、それこそ死ぬほど心配した。

「意地悪じゃないよ、誉めてるの。レンは全部に責任持たいたいんだよね」

そっぽを向いて無言で林檎を食べている仕草が微笑ましい。いつからだろう？結婚した頃かな？

レンのことを、ただただ可愛いと思うようになったのは。

支配関係とか、スマートで素敵とか、怖いとか、いろいろな気持ちを感じていたけど、一つ一つが剥ぎ取られて、一番最後に可愛らしさが現れた。

「でも、もうユウたちの結婚式に口出しちゃ、駄目だよ？」

「…出すつもりなんか、最初からない。何かにつけて、奴が阿呆なことばかり考えるから悪いんだ」

「キャンドルサービスの代わりにビールかけ！とか？」

「そんなこと言ってるのか！」

瞬時に真っ青になったのを、笑わずにいられずに笑う。

「言う訳ないじゃない。いくらなんでも、カオルちゃんが止めるわけよ」

からかわれて慥然とし、黙り込んだ。

愛莉は満腹でレンの膝から降り、レゴブロックをぶちまけて遊び始めた。

がしゃん、と派手な音をさせるが、彼女の作るのはお家とお花とお姫様ばかり。可愛いものだ。

今も、赤と緑ばかりを選んで、花の形に組み合わせている。

「カオルちゃんも奴には甘いからな。たまにはチェックしておかないと、何をしでかすかわかったもんじゃない」

「ほらほら、また口出そうとして。…そんなに気になる？ユウより、

本当はカオルちゃんが可愛いんですよ」

「な、何を言い出す」

「嘘。ていうか、いいよ別に。安いヤキモチなんて妬かないし。妹が欲しかったんでしょ、きつと。あーあ、何か、あたしも抱っこしてもらいたくなっちゃった」

背を向けて頑張っている愛莉を余所に、レンの膝に滑り込む。

「弥生、子供の前で」

「いいじゃない、別に。エッチしてるんじゃないんだから」

「おい」

「見て見て愛莉く、いいでしょっ！」

ん？と振り向いた愛莉が、自分も参加しようとしてワクワク走ってきた。

レンの膝は満員御礼。さすがに、二人掛かりの全体重で押し掛かられては、倒れるしかない。

きゃはは、と笑い転げる弥生と愛莉に、レンもいつの間にか声を上げて笑っていた。

「ええと、では、真田様：おや？」

結婚式のすべてを担当するホテルマンが、怪訝な顔で眼鏡をずりあげた。

天城家の新郎は、確かもつと背が…？

「違いますから！新郎じゃないですから！」

真っ赤な顔で怒りながら訂正する新婦・真田カオル。そして横で腕を組み、やや不機嫌そうな男が一人。

「どうして親切心がわからないのかな、君は」

「結婚式の打ち合わせに参加する兄なんて、聞いたことありませんから！」

「えーと、ではお兄様、ですか？」

「新郎の、です！異常なブラコンの兄で、列席者という立場では不満足だそうです！」

この状況を他で打ち合わせ中の男女から見たら、完全にレンとカオルが新郎新婦としてやって来ているとしか思えない。誰が誰を見るなどという場でもないのだが、カオルはその妄想を振り払うことができず、怒り心頭だった。

原因はユウだ。深夜ドラマが思いのほか好評で、春からのゴールデンを見据えた続編の話が持ち上がった。年末から打ち合わせが入り、年頭から収録開始。

例えチヨイ役でも、いやチヨイ役だからこそ、主役級のタレントのスケジュールに合わせなければならぬ。早朝から出ていたり、深夜までずれ込んだり、地方までロケに行ったり…

当然、差し迫った結婚式の打ち合わせはカオルにお任せ状態に。周囲はラブラブで打ち合わせに来ているカップルの中、ただ一人で担当と頭を突き合わせる。

「正直、厳しい…その場で誰にも相談できないし、同意を求める相

手がいないし、やるつもりもなかった披露宴の演出を考えるなんて、重荷」

…と、弥生に愚痴をこぼしたのが、大間違いだった。

突然レンから連絡が入り、打ち合わせはいつなのか聞かれて素直に答えたら、夜勤明けの身で午後一番の打ち合わせに現れたのだ。

これは親切心か？それとも口を出したいだけか？絶対、後者！

テーブルに着き、はは、と愛想笑いで戸惑うホテルマンの担当者、長いキャリアの中、親や直接の兄弟が新郎新婦と共に来たことはあったが、新郎抜きでその兄が出しゃばってきたのは、初めてだった。「ではお兄様も一緒に、前回の確認からいたしましょう。ドレスは前日持ち込みで、真田様に直接ドレスルームにお運びいただくことになってますね。その他のプランは」

「ちよっと待って」

運ばれたコーヒーを飲んでいたレンが、ホテルマンのめくろうとしたファイルを止めた。

「運ぶ？カオルちゃんか？」

「はい」

「一人で？」

「ええ、まあ」

「…まったく、馬鹿・とまでは言わないが、無茶も休み休み言ったらどうだ」

「あ、馬鹿って言いそうになったでしょ」

早速の口出しに拗ねたカオルに、眼光が鋭くなった。

「当然だ。ウエディングドレスとカラードレス、まさかユウの二着も？持ち切れる訳がない。何往復する予定だ？幸範は空いてないのか？」

「当日お店をお休みさせるのに、前日まで頼みごとなんてできないです」

「それが駄目なんだ、カオルちゃんは。いい、わかった。その日は幸い早番だ。遅くなることもあるだろうが、僕が車で運ぼう」

「え、いいですよ！」

担当は押し問答を、はははは…と更なる愛想笑いでやり過ごす。何百組も担当してきたが、打ち合わせで新婦と義理の兄が言い争いをしたのも、前代未聞だった。

「あのう、差し出がましいようですが」

言い合いに口を挟まれ、カオルとレンの両方からキツと見られ、たじたじとなる。

「一生に一度のことですし、ここは一つ、お兄様に甘えさせてもらったらいかがでしょうか？」

先日も申し上げましたが、電車で移動となると、どこで間違いがあるかもわかりませんし、汚される危険性を考えると…」

「ほら、やっぱり無理があった。ユウとカオルちゃんは、二人で一人前だからな。ユウは一人じゃ役立たず、君は一人で背負い込みすぎる。予感的中だ。担当さん。この子はそういう子ですから。無茶しようとしたら、はっきり言ってやってください。聞かない時は、僕に連絡を」

カオルの頭に突き刺さりそうなほど指を差し、名刺を担当に渡した。

部外者の兄に、名刺を渡されたのも…当然、初めてのことに。

「では、今日の本題に入りましょう…」

担当の進行で、テーブルフラワーとクロスや椅子のカバーなど、飾りの部分をまとめて決定した。

レンはそこからは一応聞くだけのつもりで座っていたが、ついで所要所で言葉を挟んでしまう。口を出さないと、何もかもが担当の言いなりになり、ただ無難で普通な方へ流されていくのだ。

「カオルちゃん、クロスはドレスと合うか考えたら？ テーブルフラワーは白い百合なんだろう？ 白いクロスより、青か紺の方が映える」

雰囲気的に危ない兄だと判断した担当も、うまくそちらに意見を載せ、カオルを懐柔する。カオルも、そういう判断には自信がない性格。結局はレンの意見がもつともで、センスが光っているような

気がしてしまふ。

「はー、最終的には、レンさんて凄く洗練されてるんですね。なんか、気分が萎えちゃった」

送ってもらったことになった車中、助手席で思わず泣き言が出た。彼が言うことに筋が通らなかつたり、単純に気に入らない案をゴリ押しされたら断っていたらどうが、そうする必要が全然なかつた。

レンがいなかったら、テーブル周りに統一性がなくなっていたかもしれない。そしてもしその場にいたのがシンだったなら、選択できるクロスの色が気に入らなくて、もつと微妙な色遣いの布で自分が作る！などと無理を言うに違いない。

もちろん本来はどちらでもなくユウがいなければならぬのだが、その辺りは半分諦めていた。彼は、最終リハーサルと当日さえいて、進行を自宅でちゃんと覚えてくれてさえいたらいい。

「どうして萎えるんだ？百合をセレクトしたのはカオルちゃんだろう？いいセンスだ。百合はイメージにピッタリだね」

一瞬赤らんだ頬を見られたくなくて、窓の外に目を向けた。

白い百合が、イメージに合うだなんて。

レンにこんな言い方されて、口説いていると勘違いしないであげられる女なんて、自分以外にはいないと断言できる。

「悪いのはあの担当だよ。白い百合に白いクロスでOKを出そうとするなんて、どうかしてる」

「それでいいって言ったの、私ですもん。百合だけじゃなくて、青い小花もたくさん入ってるから、いいかなって。クロスとドレスと花をトータルでイメージするなんて、難しかったから」

「それが普通。新郎新婦は初めてのことなんだから、迷える子羊にうまくプレゼンするのがホテルマンってものだよ」

つまらないことで口論を仕掛けられ、レンに遊ばれてしまうことも多いが、本気で挫けそうになるとさり気ないフォローを入れられる。

本当に、不思議な人だ。

「まあ：毎回行ったら、完全に異常な家族だと思われるから遠慮するが。判断に迷ったら、いつでも連絡すればいい。僕でも弥生でも」

「わー、驚いた。異常だっていう自覚あったんだ」

「カオルちゃん？」

につこりとした恐ろしい笑顔を向けられ、身を竦める。

「嘘ですってば。本当に、素直に嬉しいですよ。関心持ってください兄弟なんて、今まで誰もいなかったんですから。だから、ありがとうございます」

…ふん、という素っ気ない返事。彼は直球で感謝されると意外と弱いということに、最近気付いた。

「そういえば、同居はどうだ？」

「私より、じいちゃんの方が明らかに生き生きと楽しんでます」

「ああ、そんなものかもしれない」

すぐにも引越すと云っていたユウを説き伏せてリフォームし、実際に同居を始めたのはつい先日。部屋を変えたくないという重三の自室を残し、残りは間取りも内装もすべて変更した。

本当は祖父のために昔の姿をできるだけ残し、自分たちの居室だけ作り直すつもりだった。しかしここでもレンの忠告で、全面的なリフォームに変更したのだ。古い水周り、昔ながらの深い風呂。祖父のことを思うならバリアフリーにした方がいいし、どうせいつかやるなら、一度にやる方が料金的にも得をする、と。

何から何まで、自分たちよりも先見の明があり、煩いと思いつつも従うべきだと思えてしまう。要するに、大人なのだ。

重三は古臭い家に愛着を持っていると思いついていたが、いざ綺麗に使いやすくなってみると嬉しそうだった。そして同居が始まればカオルが外泊することもなく、幼い頃からお気に入りだったユウが、賑やかに帰宅する。

毎日機嫌がよく、盆栽の手入れにもサトとのデートにも、気合十分だった。

「さ、到着だ。お疲れ様」

門扉の前に車が止まり、礼を言ってドアを開けようとした。バッグの紐を握った右手が温かくなる。

何を思ってたか、レンが難しい顔で手を握り、爪の辺りを見詰めている。

驚きで俄かには反応できず、さり気なく振り払った。彼はカオルの緊張によくやく気付き、見透かした笑顔でふつと息を漏らした。

「ああ、ごめん」

「もう、びっくりします。なんですか？」

内心では、びっくりでは済まされない。心臓がバクバク音を立てているのを、必死で無視していた。好きだとか惹かれているということはないが、ちょっとしたことでも何年も前のことが頭をよぎってしまふ。

「せつかく結婚式前なのに、手が荒れてるな」

「家事はあるし、剣道でゴツくなっちゃいましたから。取り繕っても、なんだか今更な気がして」

車はハザードを出したまま、狭い路地に停まっている。彼は急かす様子もなく、呆れたようにカオルを斜めに見下ろした。

「何を言ってるんだか。女を捨てるには二十年以上早いだろう。ドレスを持ち運ぶプランより、ずっと馬鹿な発言だ」

「う…そう言われても、忙しいし」

「言い訳しないで、ベストを尽くしたら？磨けばいくらでも綺麗になれるんだから。幸範に聞けば、いくらでも安くていいサロンを知ってるだろう」

「それがユキ、最近元気なくて。どこか塞いでいるっていうか、あまり気安く相談事って雰囲気じゃないから」

ふーん、とレンは相槌を打ち、ドレスを持ち運ぶのに一番頼みやすいだろう男に相談しなかった事情が呑み込めた。

「まあいい。できるだけ普段から手入れして、当日には最高の姿を見せてくれよ。楽しみにしてるんだから」

「はあ…」

今度こそ車から降り、息が白くなった。ドアを閉める直前に中を覗くと、含み笑いで横目に見送っている。

無意識に流し目送る男なんて、そうそう見かけるもんじゃない。

「レンさん、一応言っておきますけど、弥生ちゃん以外の女の子の手を、いきなり握るのはご法度ですよ。そういう目つきも、よろしくないですからね」

「あれ？僕のこと、今更男として見ちゃってる？困ったな」

がーっと頭に血が昇り、半身を車に突っ込んで睨んだ。

「あのねえ、わかってなさそうだから忠告してるんです！冷静な分析で！私は絶対！誤解なんかしてあげないから構いませんけどね！」

「構わないの？じゃあ誤解しないで、僕と結婚式前の火遊びする？」

「構わない、の意味が違う！弥生ちゃんに言い付けますよ？」

「ははは、冗談だよ。僕だって、君のことは女として見てないから」

な。そうじゃなきゃ、からかって遊んだりしない」

むっ！やっぱり遊ばれてる！

ボタンとドアを閉めると、声は聞こえなくなったがまだ口に手を当てて笑いながら、BMWはエンジンを吹かして走り去った。

見えなくなるまで見送り、清々しい気分になっているのを感じた。まるで、会話を心から楽しんでいたかのようだ。

いやいや、そんなことはない。あのレンさんと話して、気が楽になるどころか楽しいだなんて。

しかし結局は助かったし、テーブルウェアも無事に決まったのだ。大人は大人。頼りになることには他ならない。

全部終わったら、あのお節介にも、何かお礼を考えようかな。

そんなことを考えながら庭に入ると、夕陽を浴びて重三が盆栽の手入れをしていた。いつもの作務衣でいつもの園芸鋏を手にしている。

「じいちゃん、ただいま。寒くないの？」

「カオルか」

カオルか、かあ…

振り返る祖父に、なんだかほつとした。

これで普通なんだ。

祖父はこれから「カオルか」の他にも、呼べる名前ができたのだ。これしきのこととで孝行をしていると思い上がるつもりはないが、確実に喜ばせていると思う。

「じいちゃん、お茶淹れよう。風邪ひくよ」

「風邪などひくか。鍛え方が違う」

「はいはい。ユウ、夕飯までには帰るって。お鍋にしようか」

自然とホクホクした表情になり、重三も足取り軽く家に入った。クッション性のあるフローリングの廊下を歩き、カオルについてダイニングに着席する。

用事なんてない。自室よりも居心地がいいだけ。

カオルの嫁入りのために取っておいた息子の預貯金は、ほとんどすべてこのリフォームに消えていた。満足に祝ってやれないこともどかしくて、大袈裟にやらなくてよい、と言ってはみたが、強く推されると反対もできなかつた。

この先もつと老いた自分が、転んで寝たきりにでもなつたら、リフォーム以上に迷惑を掛けてしまう。

「迷惑なんて思わないけど、動けなくなったりしたらじいちゃんが辛いしさ。だいたいリフォーム代だって、最初からあてになんかしてなかつたよ。ローン組んで、俺らで払うつもりだったんだ。もし祝い金として用意してくれたなら、ローンの利子を払わなくて済む分、得させてもらったと思うよ。なあカオル？」

当然のように「ねえ？」と頷き合う、曇りない若い夫婦。対比するように、自分は十分老いたことを感じさせられた。いつの間に、ユウもカオルもすつかり大人の顔で、大人の口を利いている。道着の紐が余るくらい、小さくて幼かつたというのに。

頼っていいのだと思えた。自分は後に付き、少々甘えてもいい。そうしても揺るがないほど、しつかりした男が家族に増えたのだ。

重三は、まだ帰らないユウの顔を思い、安心の溜息を吐いた。

「今夜は熱爛にでもするかな」

「もう、ユウがいると必ず飲むんだから。一本だけね」

彼女は冷たい水で野菜を洗い、また手が荒れてしまうなあ、と気にしていた。

上着の中でメールが着信し、作業を中断して読む。

弥生からの連絡で「CAの間で流行ってるハンドクリームをあげるから、近いうちに来てね」と絵文字混じりに書いてあった。

レンさん、やること早い…

ありがたい…そして少しはありがた迷惑なことに、何がなんでもベストを尽くさせて着飾らせるつもりらしい。

半ば諦めの境地でもあったが、結婚を機に身内が増え、付き合いも増え、自分のためを思ってくれる温かい押し売りが、心地よくも

あつた。

WHITE LILLY 2 (後書き)

明日は気分を変えて、短編をアップしたいと思います。「過ぎゆく夏の日」(モモジルシお題サイト様より、お題をちょうだいしました)という作品です。

「すぎゆくなつのひ」の一字ずつを頭文字にした8つのアナザーストーリー。楽しんでいただけましたら幸いです。

ちなみに、こちらを長く放置するのも心苦しいので、短編はとりあえず8つの中から1つだけアップします。

本編ももう少しで一旦完結です。他の短編は、その後に連続するか、もしくは次作の合間にまた同じような形で挿入するか考え中です。また、ブログ「月の鏡」にて、各キャラで50のお題に答えています。よろしかったらご覧くださいませ (ブログには、作品トップページにバナーがあります)

小雪が舞っていた。

ユキはバスを降り、薄手の上着のポケットに手を入れた。

どうして、こんな処まで来たんだらうなあ。

息は白いが、深々と冷え切った空気は頬にも鼻にも気持ちよく、遠くの真っ白な山並みが綺麗だった。

長野の、観光地やスキー場からはほど遠い処。村というか、里というか、打ち捨てられた僻地というか、麗しの桃源郷というか…美しく寂しい、日本の原風景を思わせた。

ユウとカオルの結婚式に出席するため、黒に近いグレーに染め直した髪に指を入れる。

結婚式は一週間後。今はまだ違和感のある色だが、徐々に色が抜け、当日にはちょうどいい濃さになっているだろう。

「ごめん、ユキ兄…」

二人の、情けない顔が目には浮かぶ。

席次表を決定した時、わざわざ自宅にまで揃ってやって来た、開口一番のセリフ。ユキの座席は、友人席に入っていた。

当然だ。シンとの関係の事は、天城の親に明かしていない。レンと弥生と、ユウとカオルだけ。マンションをシンの親が訪ねたこともあったが、居候している友人だという自己紹介を疑う素振りもなかった。

家賃代わりに家事を引き受け、食事も全部世話しますので…という言い訳に両親とも感激し、「よろしくお願いします」と握手されたのが、正直心苦しい。

別の意味で「シンをよろしく」と言ってもらえる時など、来るのだろうか？

とにかく、例え内輪ではシンのパートナーだとしても、親族席で彼の隣に座れる理由など、世間的には一つもない。

シンは少し腑に落ちない顔だったが、ユキは気になどしていなかった。

「そんなの当たり前だろ？シンの隣りじゃ針のムシロ。気にすんな。俺はどこでも、出席させてもらえるだけで十分だから」

二人が申し訳なさそうに帰った後、シンに思わず注意した。

「何も言わなくても、あんな顔してたら気を遣わせるだろ？悪いのは俺達なんだから」

「僕達、悪いことしてるの？」

「関係が悪いんじゃない、きちんと説明してないのが、悪いってこと」

「…じゃあ僕、親にでも親族にでも、はっきり言うよ？僕は、別に恥ずかしくて言わない訳じゃない。何か言われると面倒だから、先送りしてただけ」

返事に詰まったユキを、シンは珍しく尖った視線で見ている。

「ユキは？恥ずかしいの？」

「…世間的には、普通じゃない」

「…ふうん…」

シンはふいと横を向いただけだったが、秋からずっと放置していた懸案と重なり、責められているように思えた。

いいや、違う。責められているんじゃない。自分が、自分を責めているだけだ。

一つもクリアせず、先に進めず、常識も何も語る資格なんてない。

ユキはつらつらと思い出しながら、ビニールハウスや畑ばかりが目に入る道を歩いた。

ちよっとした粉雪くらいのつもりだったが、アスファルトがうっすらと白くなり始めている。

目的の住所は、この先すぐだった。

シンは宣言通り、あれから一度も井田のことを口にしなかった。探る視線すら表わさず、普段通りの生活を送っていた。もう一つの

宣言通り、以前よりはずっと好き嫌いをせず、出された物に全種類箸を付けることを目標にしている。体重はわずかにしか増えなかったが、仕事をペースダウンし、薬もきちんと飲み切り、体調がよい期間が長くなっていた。

以前からしたら驚くべき努力。それなのに、自分はいかにだらしのない臆病者なのか。

井田を訪ねて、何を言うべきか……それすら未だわからない。今も迷いながら、無理矢理に一步を踏み出している。

彼にはきつと迷惑だろう。シンが言うような、綺麗な関係だったとは思えない。愛情を持たれていたかどうかなんて、どの記憶を探っても思い出せない。

ただ……俺よりも背が低いのに、ふざけて頭を小突いてでも屈めさせ、胸に抱き寄せる仕草。それだけは妙に現実感があり、切ない想いを蘇らせる。

そりゃあそうさ。嫌いで一緒にいた訳じゃない。好きかと考えれば、あっさり捨てなかったくらいには好きだった。しかし、愛情の量とか質とか考え始めると、きりがなく辛い気持ちになる。

何を言おう？どんな顔をするだろう？あの頃と今と、お互いどれだけ変わっただろう？

きつと俺は、今この瞬間も依存している。厚かましくアポ無しで押し掛けて、嫌な思い出を蒸し返させる。そして俺は勝手に過去を清算したと思い込み、愛するシンの元へ帰るのだ。

こんな酷い話、あるか？……でも、必要なだろう、きつと。清いシンの言葉が本当で、井田のためにもなると思いたい。

灰色の足跡が後ろに延々と伸び、行く先にも誰一人見えず、路地の奥には「井田」という表札の門柱があった。門はなく、奥に二階建てで新しめの家があり、路地の続きになっているアプローチの更に奥に、畑が見えた。

チャイムは門柱にはなく、玄関の前まで行かないといけならしい。

迷いを捨てきれないが、ここまで来てしまったのだからと自らを奮い立たせ、急いで玄関まで進んだ。勢いのままにチャイムを押す。二回鳴らしても返事はなく、どっと疲れと安堵が湧いた。膝に手を当てて俯き、三秒ほど休む。

もしここに帰ってきたりしたら、不審者みたいだ。

自分の考えにどきりとし、顔を上げる。畑が目に入り、焦りなど笑い飛ばすように伸びている冬野菜、黄色く枯れた雑草に縁取られたあぜ道、その向こうに広がる山々が目に入る。

呑気だな。俺は一生に何度あるのかっていうくらいのプレッシャーに襲われてるのに。

…いないなら、仕方ない。これからどうしようか。  
踵を返そうとした目の端に、動くものがあった。

青っぱいつなぎの作業着に身を包み、軍手をはめてニット帽を被り、バケツに大根を数本入れている男。

「誠一郎」

口の中で思わず、ずっと避けていた呼び方をした。

男は足元を見ながらこつちへ向かっていたが、訪問者に気付くと首を傾げ、ユキであることを認識するとバケツを落とした。

シヨックで物を落とすなんて、漫画じゃあるまいし。

そう思うユキこそ足の一步も出ず、手を挙げて挨拶することもできず、頬に当たる砂のように乾いた雪を感じながら、立ち尽くしていた。

井田は信じられないものを見たという表情でおずおずと近付き、ユキを頭から足まで眺め回した。無言でニット帽を外し、頭を撫で回して考え込んでいる。

そっぴや、そんな癖があったな。

言ってやりたい軽口も、出る訳がない。

「ユキ…久し振り、だな」

井田はようやく声を出し、畑を指差して歩き出した。

「悪い、そろそろカミさんが帰るから」

彼もハードな会話を恐れ、人目を避けようとしている。そう思うと、怖い自分がいた。案内されたビニールハウスの中は暖かく、苺の苗が一行に花を咲かせていた。

「これは少ししか作らないんだけどな。娘が好きだし、ジャムにして配ったりするんだ」

娘やその友達が、好きなだけ摘み取って食べるためだろう。ビニールハウスの隅に、可愛らしいベンチが並んでいた。

井田に示されて座ると、子供用のそれは小さく、安定が悪かった。井田は大きなバケツを裏から運んで逆さに置き、ユキの横に距離を取って座った。

直視するのが怖い、直視されるのも、怖い。緊張感が通じ合っていた。

「…八年、だよな」

言葉も口調も丸く、懐かしそうに響く。

「どうしたんだよ、何か言えば？」

「ごめん」

「…」

井田は言葉を失い、毎に視線を彷徨わせるユキの横顔を見詰めた。体勢を変え、長靴がバケツに当たるくぐもった音が、ユキの苦しい胸と共鳴する。

「今更でごめん」

重ねて謝る言葉が、どうしても平淡にしか声にできなかった。顔を見たことで過去が一気に近付いており、神経がピリピリと現実感を消失させていた。

「やめるよ、そんなに謝られても困る」

井田が、どうして優しく話せるのかの理由がわからない。

「酷い目に遭わせた。本当に悪かった」

「ユキ、俺こそごめんな」

思いもよらず顔を向け、初めて視線が合った。

駄目だ。目は見たくない。

あの日に戻されてしまう。最後に言葉を交わした、あの日に。

最後の晩、久々に帰宅し、激しく愛し合ったことを覚えている。

翌朝また仕事と社長宅に向かおうとするユキの手を掴み、熱っぽい瞳で引き止められた。そんな彼に言ったのだ。

「またタイミング見て、帰って来てやるから」

「行くな、ユキ。頼む」

「俺を縛るなよ、嫌われたくないんだろ？」

宥めるためのキスを落としながら、不遜な言葉を投げつけ、傷付いた彼を放って出て行った。

井田も同じように同じ時を思い出したのか、その時と同じ表情をしていた。

「お前がいなくなつて解雇されて、アパート燃やされて…テツに、ユキは死んだと聞かされて、鵜呑みにした。死人みたいに実家に戻つて、親に勧められるままに結婚したよ。安定して、子供も生まれて、でもずっと澱みたいに残るものがあつた。…お前が生きてて、よかつた」

名前そのままに、誠実な瞳がそこにあつた。短髪にしても、肌の質感が農家の男になつても、煌めく光に違いはない。

俺は盲目だつたんだ。この光を信じて愛さなかつたなんて。

今が幸福だからこそ素直に認められる、儂い後悔。

「俺はお前のキャリアを奪つた。天才だったのに。与えられた心が、わからなかつた。傷付けて平気でいた…恨まれていると、思っていた。」

忘れた素振りでも、大事な相手にも過去を明かさなかつた。俺こそどこかに後悔が居座っていたのに、向き合おうとしなかつた。迷惑承知で、それを解消するためにやって来るなんて、卑怯だつてわかつてる」

握つた拳に、井田の荒れた手が載せられた。無数の化粧品を扱い、無数の女性を美しくさせた繊細な指が、別人のように変わっている。左の薬指には、きつい仕事で変色しかけている金色の指輪。ユキの左手の指輪がまつたく傷付いていないことと比べると、歴史の違いを思い知らされる。

「迷惑でも卑怯でもない。恨んでもいないしな。てつきり死んだと思つたけど、俺の方こそ、墓参りとか考えながら時間ばかりが過ぎてしまつていた。ユキを幸せにできなかったのに、俺だけが結婚して子供も持つなんて、墓前でどう報告したらいいかわからなかつた

んだ。

本当に、お前が生きててよかった。全然、不幸そうな顔してなくてよかった。…俺に、生きて幸せなことを教えに来てくれて、よかったんだよ」

井田は涙ぐみ、痛々しいまでに優しく手を握っていた。空いた手を更になから重ね、自分からようやく目を見ることができた。

「ユキ、その指輪の相手…」

「男だよ。病人で偏食で芸術家で我儘で、手に負えないけどな」

井田はくすつと笑い、ユキの頭を強引に屈ませて、胸に引き寄せた。

「そうだよ、そういうのが、本質的に一番合ってたんだ。…俺みたいなんじゃないかって、な？」

懐かしさに、ぐらりとする。

嫌なら、いくらでも振り解ける。力でも体格でも負けはしない。

でも、ユキは一瞬だけ作業着の胸を掴み、身震いした。

誠一郎

初めて「ユキ」という呼び方をした人間。大して体力もないのに、ジョギングに必死で付いてきた。女性タレントが自分に迫ろうとしたと聞いただけで妬いてみせた。喧嘩すると、必ず自慢の本格カレ―を用意して、夜中までも待っていた。

あるじゃないか、記憶：止めようも、ないくらい。

熱っぽい瞳、優しい瞳、機嫌を取ろうと媚びる瞳、切ない瞳、悲しい瞳…

自分に向けられる、色んな瞳も思い出せる。記憶にないのは、それに応じる自分の顔、瞳、声、素振り。酷かったことは想像できるが、そんな過去の延長線上に、今が在る。胸に去来したのは暗い後悔ではなく、井田への感謝、そして見詰めさせてくれたシンへの感謝だった。

「本当に、ごめんな。俺、多分凄く楽しかった。ありがとう」

「…初めて見たな、ユキの涙」

自分の頬に温かい物が流れたことに、言われてようやく気が付いた。

上を向くと、簡素なビニールハウスの上に積もる雪。白い癖に、白い雲の下では暗い影になっている。

涙がただらだら止められなくなる前に、ユキは手の甲で払い落した。

エンジン音とタイヤが砂利を踏む音がし、軽のワゴン車が家の前に着いた。家族が帰ったのを知り、井田は少し離れて立ち上がった。

「友達として紹介するよ。泊まっていけるのか？」

「まさか。どの面下げて」

「気にすんなよ。最終のバス、もう行ったんじゃないかな」

「…マジかよ」

まだ午後も早いというのに？ド田舎らしいと言えばそこまでだが、都会の感覚で帰りの足を考えなかったのはミスだった。

軽自動車から寒そうに降りたのは、化粧つ気のない、ぼっちゃりした女性だった。幼稚園のスモックを着た女の子が、後ろのドアを開けて元気に飛び降りた。

井田の妻はバケツと大根を怪訝そうに拾い、畑に目を凝らしていた。

「じゃあ、駅まで送るよ」

「…泊まるくらいなら、この期に及んで甘える方がマシか」

「遠慮すんな」

彼の先導でユキモビニールハウスから出、ほんの短時間に雪化粧をした畑に見入った。

寂しそうでありながら、土地が内包するエネルギーが、土の匂いとして息づいている。単純に美しくもあり、そこを必死で手入れする井田の姿を想像すると、彼もまた本質的にはこちらの方が合っていたのかもしれないと思えた。

才能はあっても、天才と言われても、神経は確実に擦り減っていた。だから俺に縋りたかつたんだ。

農家はすたれた産業ではありません、か。カオルにも、今度改めて礼を言わなきゃな。

「お前、寒くないのか？中、シャツ一枚じゃないか…あ、何だか懐

かしいな。この会話」

「驚くべき健康体だから」

ニヤリと笑顔を交わし、昔そのままの返事をした。

「お客さま？」

妻は、この辺りからしたらお洒落すぎて派手に思えるユキに、遠目で警戒しながらお辞儀をした。夫が結婚前、都会で酷い目に遭ったらしい、ということは噂で知っている。

「ああ、昔の友達。駅まで送るから、鍵くれ」

「お父さん！」

水色のスモックがピョンピョンはためき、井田の腰にしがみ付いた。

「ちよつと、出掛けてくる」

「ユキも、行く！」

井田は一瞬バツの悪そうな顔をし、ウサギの髪留めで結ばれた頭を撫で、引き離れた。

「寒いから今度な」

「えー！ 駅に行くなら、ガシャポンやりたいのに！」

不満そうに言いながら、ユキをちらりと見る。興味津々の丸い瞳が、井田に似てキラキラとしている。

「ユキちゃん、ていうのか？」

しゃがんで近くなった男に急にもじもじと照れ、娘は井田の後ろに隠れた。しかし横から、少しだけ顔が覗いている。

「お父さん、優しいか？」

顔半分で、こくり、と薄く頷いた。

「よかったな。ユキちゃんも、お父さんに優しくするんだぞ。じゃあな」

また恥ずかしそうに頷き、彼女は母親の方へと走った。

「お邪魔しました」

玄関先に立って見ている妻に頭を下げ、井田と共に車に乗った。

スタッドレスタイヤが、積りかけの雪道に二本線を描いていく。微妙な沈黙の後、井田が弁解がましく話し出した。

「あのな、言っておくけど、ユキってのは、カミさんが付けた名前だからな。産まれた日が凄いい雪の日で、難儀したんだ。一応、美雪はどうだとか雪子にしろとか遠まわしに勧めたけど、雪んこのユキがいつて聞かなかつたもんだから」

「いいよ、弁解しなかつたって。俺の绰名を子供につけたなんて馬鹿なこと、思ってない」

心なしか安堵し、井田はまっすぐ前を見ていた。

道はガラガラだが、スピードは緩い。慎重に運転しているだけなのか、もう少し話したいのか。後ろからハイスピードのトラックが追い抜いていく。

きつと後者だな。

お互い過去を清算することはできたかもしれないが、自分が新しい謎を運んだことも事実。こちらはまだ、聞きたいことならある。押し掛けられた井田の方は、もっとだろう。

井田は咳払いし、何の気なさそうに切り出した。

「それより、どうして家がわかつたんだ？実家の住所なんて、誰も知らないだろうに」

「…ああ、ちよつとしたルートで調べさせてもらった。悪かったな」

「ちよつとしたルート？危ない響きだな」

「確かに…まあ、特に迷惑は掛けてはいないと思うよ」

「別にいいさ」

行きに見た、駅近くのスーパーの横を通った。

もう、着いてしまう……

「誠一郎」

「何だ？」

「一つだけ、無神経なこと聞いていいか？」

「うん」

「俺のこと、本気だったか？あの頃の俺には、何が本物か判らなか

った。昔のことだけど、できれば知っておきたい」

井田は赤信号をじっと見詰め、乱舞してウィンドウに当たる雪にワイパーを速めた。雪はますます酷くなっていた。

「愛していたよ、心から。伝わっていかなかったならショックだけど、俺の力不足だ」

「じゃあ、俺の気持ちはどう思っていた？俺に遊ばれると思ってたか？愛情はあったけど、余計なことが邪魔をしていると思ってたか？」

「…一っだけって、自分で言っただろ？ほら、駄だ」

風までが吹き始め、田舎の駅前には人影がない。貰えない返事を考えて塞いだユキに、井田は遠慮がちに手を伸ばした。

緩い癖のある髪に触れ、まじまじと感触を確かめている。まるで今初めて、生きていることを確認したような仕草だ。

薄く斜めに、表情の切れ端を読み取る。

昔、キスがしたい時にしていた、切ない顔…

しかし彼は、ふいと手を離れた。ぎこちなく、素っ気なく。頬を滑って皮膚が離れた瞬間に、すべての接点がなくなったように感じられた。

「俺は、愛するだけで十分だったんだ。お前の気持ちなんて、極端に言えばどうでもよかった。自分の気持ちを押し売りするので手一杯で、身勝手な俺たちには、どっちにしろ未来はなかったんだよ」  
ずっと平静を保っていた井田が、初めて苦しい笑顔を浮かべていた。

感傷を振り払うようハンドルに腕を預け、顎を載せた。何も無い駅を、ただじっと見詰めている。

「…じゃあ、な」

「ああ、じゃあな、幸せに」

二人には、「またな」も「いつでも遊びに来いよ」も必要なかった。

もう、会うことなどないのだから。

二人の世界は余りにすれ違い、遠い友人として付き合っ未来も思  
い浮かばない。

ユキはその点に、心底ほっとしてしまっていた。でも、そんな自  
分でいい。「またな」と言われて「ああ、またな」と嘘を返す自分  
は嫌だった。井田も同じなのだろう。

そういう物の考え方には共通点があり、時を経ても尚、変わるこ  
とがなかった。

結婚式の親族控室にて、シンは微妙にふてくされていた。

新郎新婦はまだ準備中で、ユキはカオルのヘアメイクを済ませ、列席者用の控室へ行っていた。

レンの横に座り、この日だけ軽く解禁したシャンパンを手にしていた。

「兄さん、もう、いかがわしいことしてないんだよね？」

「いかがわしいことなんて、今まで一度たりともした覚えがないんだが」

「白々しい。ユキに、井田って人の住所教えてやったでしょ」

「…それか」

ユキが珍しく、一人でレンを訪ねてきたのは少し前のこと。事情を詳しくは聞かなかったが、頼まれるままに調べてやったのだ。

「変なことはしてない。僕が自力で調べてやったただけ。常套手段でな」

「どうやったの？」

「年齢ははつきりしてるし、地域も絞られていたからな。金さえあれば調べられるブラックマーケットで、卒業アルバムを探したただけだ。」

僕らの頃は、普通に住所と電話番号が載っていた。実家が引越していなければそこだろうし、農家なんてそうそう引越すもんじゃない。一応直接電話して、そこに住んでいるかいないかは確認しておいてやった。親切だろう？」

シンはぎょつとして、シャンパンでむせた。

「直接、電話したの？」

「ああ。別に大したことじゃない。女性だったから同級生だと偽って、同窓会の企画があるという名目で、今も住んでいるかどうか探った。もし男だったら、運送屋でも名乗ればすぐに答えるだろう。」

簡単なことだ」

「さすが、凄い度胸だね……」

「住所を調べたくらいで、何をふてくされてる？」

シンはむっとして、続々と集まる天城の親族を眺めた。

「兄さん、昔ユキのこと調べたよね。その時、昔の事件のことまで知ってて黙ってたのかって、今更気付いたから」

レンもウェイターからシャンパンを貰い、強引にシンのグラスに乾杯した。心から楽しんだ顔で、炭酸を味わっている。

「お前が、奴のプロフィールなんてどうでもいいって抜かしたんだ。なかなか面白いファイルだったけど。見たいのか？もう破棄したが」

「…見たくないよっ！もう聞いたんだから。でも、なんだか悔しい。ユキと兄さんと、暗黙の了解で、秘密を共有してたんだ」

馬鹿馬鹿しい、とレンは鼻で嗤い、さっと立って親族の集まりの方へ参加した。

シンは当然のように椅子に留まり、レンの長男としての立派な振舞いを遠目にしながら、まだつまらない想いを味わっていた。

それは先週、この冬一番の寒さだった日のこと。ユキが休日一人で出掛けること自体が珍しかったが、その日は特に、遅くまで帰らなかった。冷たい氷雨が降り、平気だから先に寝ていると電話で言われ、でも眠れずに風呂を沸かして待っていた。

ユキは晴れ晴れとした表情で濡れて帰り、ありがたそうに風呂に浸かり、シンの淹れた洋酒入りの紅茶を楽しんだ。

それからようやく、長野まで行ったことを語ったのだ。

いいよ、別に。僕に宣言してから行かなくなたって、責める理由なんてない。僕は何も言わないって、先に言っただけだから。

僕のことは異常に過保護な癖に、自分は冷たく濡れて帰って来るのも、責める理由なんてない。だって、ユキはそれこそ異常に健康体なんだから。

先に寝てろっっていうのも、もちろん僕に気を遣ったんだ。そのせいで、その日の出来事を話すのが丸一日先延ばしになったところで、責める理由なんてない…

ああそつだよ。いじけてるだけだよ。僕が内心、聞くに聞けない言っに言えないでどれだけ気にしていたことか。わかってるんだか、わかってないんだか…

「おい、こういう日に、いつまでも不景気な顔をするな」

レンが戻り、もう一杯シャンパンを差し出した。

「…いいよ。飲み過ぎるとユキが心配する」

「馬鹿な奴だ。主治医が勧めてるのに、気にするな。…まさか、うまくいってないのか？」

グラスを受け取り、少しだけ口をつける。目を閉じて首を横に振ると、親族から喜びの溜息が湧いた。控室に、ユウとカオルが現れたのだ。シンも慌てて立つと、レンが耳元でこそりと言った。

「幸範が何かしでかしたら、ちゃんと言うんだぞ。…僕が、何でもしてやるから」

「兄さんの『何でも』は、本当に怖いから嫌だよ」

「今ではもう、『何でも』にも限界があるがな。まあいい、とにかく今日の首尾は上々だ。何者にも気を遣うな。お前にはストレスが最大の敵だ」

背を押され、中央に座らされた今日の主役の元に向かう。

カオルは、ピッタリジャストサイズに創り込まれた、純白のウエディングドレスに包まれていた。緊張の面持ちは、嬉しさよりも怖さが勝っているのか、単純に顔も知らないユウの親戚に囲まれてしまっているからなのか。硬い笑顔に、瞳が混乱の色を浮かべている。

一方ユウは、もう二次会かというくらいハイテンションで挨拶していた。彼のフロックコートは平山に指示し、問答無用でダイエツト前のサイズに作ってしまったが、きつちりと調整していたようだ。さすが、プロだね…ハリウッドとはいかなくても。

平山は最初はシルバーを思わせるグレーをイメージしていたが、

布見本のチャコールを指した本人の希望通りに変更した。

グレイもいいだろうが、シックな装いも季節感があり、カオルのドレスとよく合っている。

「二人とも、おめでとう」

「シン兄、さんきゅな」

「カオルちゃん、綺麗だよ。自信持って、もっと胸と肩を張っていい」

「ぎこちなく頷く頬が、赤く染まっていた。」

「ユーたん」

レンがどんな祝いの言葉を投げようか考えている間に、弥生が愛莉を連れてきた。

「あらー、二人とも素敵！おめでとう」

弥生が祝い、愛莉がユウの足元に絡みついた。彼女も新婦に負けまいという勢いで広がったドレスを着ており、ピンクの裾をひらめかせていた。

「随分お洒落してんなあ！愛莉、カオルも綺麗だろー？」

「カオつたん？」

愛莉はカオルを認識できず、丸い目をぱちくりさせた。カオルだとわかると真つ赤になり、口を大きく開けて見上げた。

「いつもと全然違うから、わからなかったかな？」

適度に濃いめの化粧、まっ白いドレス、百合をあしらったブーケに見蕩れていた。

「ユーたん、あっこ！」

もつと近くで見ようと、ユウの膝によじ登った。弥生の制止も聞かず、花に手を伸ばす。

「愛莉ちゃん、綺麗？」

「きれーい！あいりも、やるう」

カオルのドレスは、レースの花の下からふわふわの鳥の羽根が覗くようにしてあった。サテンの手袋の手首にも、小ぶりな同じ飾りが付いている。その羽根の細かい毛が飛び、接近している愛莉の鼻をくすぐった。

「ふ…ふ…」

盛大なくしゃみを予感させ、ユウが素早くカオルから引き離れた。

「はーつく、ちゅん！」

「きゃあっ！」

弥生が悲鳴を上げたが、抱き取るのが間に合わなかった。

ユウの肩に、ずびつと鼻水が飛んで糸を引き、場が騒然となった。  
「ごめんねっ！どうしよう」

レンが慌てる弥生を退かせて母親に愛莉を渡し、落ち着いてウエイターを呼んだ。シンもハンカチを取り出し、擦らないように押さえる。

「愛莉、だからダメって言ったんだよ？」

大人たちの激しい反応と弥生のお小言に、愛莉は口をへの字して涙を溜めた。

「弥生ちゃん、仕方ないわよ。ほらシンちゃん、おしぼりが来たって」

豪華な黒留袖で愛莉を抱き、苦笑する母親。

シンはおしぼりを借りてそつと拭い、安心して立ち上がった。

「大丈夫、濡れた跡もわからないよ。チャコールで正解だった」

「愛莉、気にすんなよ！」

シャレになる程度のハプニングで親戚一同にも笑顔が戻り、ホテルマンが入室して時間を知らせた。

親族紹介をし、その後が結婚式本番だ。

カオルはユウに視線を送り、ユウもシンとレンに目配せした。

大丈夫、首尾は上々。

四人の間で緊張が走り、レンだけが余裕の表情でホテルマンに耳打ちし、一度退室した。

レン抜きのまま、親族が全員立って並ぶ。天城の親戚は、招待数を削った上でも二十人以上いた。対する真田側は、まだ座って石のように固まっている、重三独りきり。

「じいちゃん、大丈夫？」

カオルに声を掛けられて、ぎこちなく立つ。

「真田さん、こっちは人数が多くて疲れますから、どうぞ掛けていてください」

ユウの父親が気を利かせ、言われるままに座る。どうやら、新婦

の力オを凌ぐ緊張を感じているらしい。

いつもだつたら「若いものには負けんわ!」「老人扱いするな!」  
とどやしつける場面なのに、腑抜けというか、気もそぞろというか…  
遣り取りの間に、レンがユキの首根っこを掴んで部屋を横断した。  
背ならユキの方が高いのに、抵抗することもできず、引きずられ  
ている。

「ちよつ!レンさん、何なんすか?」

「お父さん、始めてください」

レンは混乱の嵐の中にいるユキを放し、ネクタイをきつちりと直  
した。

父親も、緊張しながら親戚一同と重三に向って立つ。

「紹介と言つても、人数差は明らかなので、わかっているところは  
簡単にいきましよう」

最初の父親とレン、弥生、愛莉、シンの紹介はごくごく簡単に済  
んだ。

父親はそこで一度咳払いし、究極の居心地の悪さに立ち尽くすユ  
キを示した。

「渡幸範くんです。彼はどちらかというと、うちの親族に紹介する  
ために来て貰いました。シンの同居人で、心身と日常のすべてを支  
えているそうです。どう捉えられても構いませんが、私たちは家族  
同然に接しようと話しています」

ユキはレンに激しく小突かれ、意味もわからずに軽く会釈するし  
かなかつた。呆然とユウとカオルの笑顔を眺め、はつとしてレンと  
父親と…最後に隣の、素知らぬ顔のシンを見る。誰もユキを見ず、  
どこか含み笑っている…?

何なんだ、この展開は!ドッキリじゃないだろうな?

一瞬の空白の後に、特に親世代の親族から、戸惑いのリアクショ  
ンが返ってきた。

「今日は、ユウとカオルさんの結婚式です。いろんな感想はあるで  
しょうが、ここは一つ大人の対処をお願いします。常識に囚われて

非常識な振舞いに出られるのであれば、式には出ていただくことなく結構！新郎新婦も、そのように希望しております」

普段の影の薄さなどもろともせず、父親はきっぱりと言いつつ「では真田さん、次に私の兄の……」

ピリピリした空気を見せず、父親は平気な顔で紹介を続けた。

親族だけならいざ知らず、主役のカオルとその祖父も、裏方のホテルマンたちも見ている。不満顔の親戚も、この場は矛を収めるしかなかった。

天城家の親族が一通り紹介されると、重三がハンカチを握って立ち上がった。

「真田、重三です。こちらは家族の縁が薄く、見ての通り、カオルには親すらおりません。微かに付き合いのある親族も、遠方の年寄りばかり。情けない限りです。」

天城さんのご親族は賑やかで、羨ましい限りです。家族の形もそれぞれ、一つじゃない。新郎も、婿入りでもないのに、快くこちらに同居してくれている。さすがというほどよく育てられた、頼りになる男です。

この老いぼれはともかく、未来に繋げることのできる輪に、孫娘を入れてやってくださいますよう、よろしく申し上げます」

カオルが堪えられずに俯き、介添人からハンカチを受け取って、ぱたぱた落ちる涙を拭いた。まだ結婚式前だというのに、ユウまでが笑顔に涙を溜め、ブーケを持つカオルの手をしっかりと握った。

「真田さん、かくしゃくとしたお姿で老いぼれなどと口にしないでください。一緒に、新しい夫婦を盛りたてていきましょう」

父親が気丈に言うと、さっきまでの雰囲気はどこかへ消え、温かい拍手が起きた。

ホテルマンの仕切りで親族が全員式場へ案内され、ユウも呼ばれて別の出口から先に出て行った。重三と介添人と共に、タイミンクを見て式場の入口に立つ。

「じいちゃん、ありがとう」

「…礼を言われることではないわい」

「夜中まで、挨拶考えてくれてたでしょ？」

「年を取ると、眠りが浅いだけだ」

照れたような祖父が、いつもよりずっと小さかった。十センチのヒールで無理しているからなのは歴然だが、それ以上に小さくなっ

てしまったように見える。

介添人が最後に直すリップを取りに行く間、少しだけ二人きりの時間があった。

「じいちゃん……」

思い詰めた口調を、重三は見ることもしなかった。

「何も言うな」

「今まで、育ててくれてありがとうございました」

「煩い」

「これからも、よろしくお願いします」

もう遮ることもせず、重三は完全に後ろを向いていた。肩が震えている。

カオルを「育てる」というほどのことはしていない。生活もそれぞれある程度好きなようにし、実際に自分がやったのは、高校に通わせたことくらい。

それでもやはり募る気持ちはある。本来なら、その言葉を聞いて感慨深く涙するのは、息子であった筈なのだ。

あの、親不孝者め……

ただ一度、ハンカチで顔全体を拭い、

「冬だというのに、ホテルというのは暑いもんだのう」と、知らんぷりをするしかなかった。

「まったく、どうなってんだよ」

そのままレンに引き摺られ、チャペルで一番奥から二列目の親族席に座らされたユキは、恨みがましくシンを見ていた。

「悪かった？僕、宣言するって言ったよね」

「それにしたって、紙一重で結婚式が台無しって場面だぞ、あれは」「そろそろ親にも言おうかなって言ったなら、ユウたちの方から言ってきたんだよ。兄さんも珍しく賛成したし」

「その……いつ、親父さんたちに？」

父親が普通に、何もかもわかった風で紹介したのが不可解だった。

普通、親が一番戸惑って発狂するところだろう。

その父親は前列で、母親と何か小声で話している。愛莉が絶え間なく高い声で弥生に話し掛けているので、こちらの会話は聞こえないようだ。

「一昨日アトリエを抜けて、兄さんとユウたちと一緒に実家に行っただ。安心してよ。うちの親、意外と大丈夫だったから。昔からよくわからない子だったから仕方ないとか、女性相手にリードできる性格じゃないとは思っていたとか、身の回りのことが一切できないんだから、行き倒れて死ぬ前に頼れる相手が見つかってよかったとか、散々な言われようだったけど…諦めて、というよりも納得して許してくれた」

後ろでは、友人席も既に埋まりつつあった。ざわざわとはしゃいだ声がしている。

「シン：ありがとうな。二人で挨拶しに行くのが普通なのに、何もかも任せた感じになっちゃった」

「ううん。確かに僕も迷いはあったけど、誰より兄さんがバツクについていて、怖いものなんてある訳がないんだから。最初は戸惑った父さんや母さんも、兄さんに理詰めで迫られると、冷静に対応するしかなくてね。助かった」

「…近いうちに、ちゃんと二人で挨拶しような。後手になったけど」斜め上に見上げたシンの顔が、嬉しそうに微笑んだ。透明で虚飾なく、素直な笑顔。

久々に見たたおやかな瞳にクラツとして赤らみ、シンを乗り越えてユキの靴を踏んだ愛莉を気にする振りをした。

結構、最近のことだよな。ずっと頼られていると思っていたのに、いつの間にかリードされるようになったのは。

「ダメよ、愛莉！…ああ、式はもう無理だわ。あたし、連れて外に行ってるね」

前列に詰めて座ったレンが慌てて立ち、通路に出た。

実は、弥生は二人目の子供が宿っていた。まだ発覚したばかりで、

結婚式を終えて落ち着き、安定期に入る頃に発表しようと相談してあった。

まだ変調はないが、レンは再び過保護モードに入っており、愛莉をできるだけ抱っこさせないように気を遣っている。

「いいよ、僕が行こう。弥生は座ってれば？」

弥生はくすつと笑って、シンやユキの前を身を縮めて通り過ぎた。「無理しないの、誰より楽しみにしてた癖に。ユウはレンの弟なんだから、あたしが退席するのが常識！」

弥生はパーティードレスをもともせず、愛莉を担いで外に行ってしまった。

呆れたように見送り、案じながらも彼はまた席に着いた。

育児なんてできるのか、と心配になる大雑把には変わりないが、いつの間にかすっかり：母親の顔が板に付いている。

司会が堅苦しく場を仕切り、ざわついたチャペルが、すつと静かになった。神父が現れ、厳かな空気の中、ユウが先にバージンロードの先頭に立った。

全員が、カオルの入ってくるべき扉に注目していた。

カオルは酷く緊張していたが、ドレスを気にすることで精一杯でもあった。左の足元は露出しているが、右足は油断するとレースを踏んでしまいそうになる。

「では」

介添人に促され、ぎこちなく祖父の腕に手を掛けた。

「ごっほん、と大きく咳をする重三。」

ゆっくりと扉が開けられ、その一步を踏み出す。胸に鉛が詰まったように感じ、感動や嬉しさよりも、硬い気持ち占めていた。

二歩目に、重三がつまづいた。息だけで悲鳴を上げ、転ばないよに支える。親族も友人関係も、高齢の祖父が転びそうになったのを、固唾を呑んで見守っていた。

重三も真っ赤になって体勢を整え、しっかりと頷いてまた一步を

出した。安心して緩んだ空気に、カオルの緊張も解れる。ようやく、視線を上げられた。

真正面を向くのは怖い、斜め前の友人の顔なら視界に入る。アキがボロボロ泣き、ノンが苦笑して腕を叩いていた。

ひどい顔：マスカラが、頬に黒い線を残してるよ…

金色や緑やピンクに髪を染めた、ユウの音楽・モデル方面の友達もたくさんいる。義父の招待客とは毛色が違いすぎて、改めて不安にもなる。

一歩一歩、赤いバージンロードを歩くと、ユウの胸が目の前に迫り、到着したことを知った。

目の端で、誰かが動いた。

レンさん？

あり得ないことに、眼鏡を外して指を目に当てていた。

そんな仕草に他人事のように感動してしまい、涙腺がピリツと痛くなった。ベールに隠れて、瞳が潤んでいることは誰にも見えない。ユウが、優しい笑みを湛えて、手を差しのべた。

五歳の頃、初めて会った日に握った手。汗ばんで土で汚れていた、小さな手。

ただの幼馴染みだったはずなのに、今はこの手しか見えないなんて。

なんて、あり余る幸福をもらっているのだろう。

重三の腕を放すことに一抹の寂しさを覚えつつ、それでもカオルはユウの手を握った。ユウはきつと、見られていることには緊張などしていない。ひっきりなしに、安心させるように笑っている。

そんなに笑っていたら、後でニヤけてたってからかわれるよ？ 癖かな式なんだから、少しは真面目な顔してて！

カオルもいつしか、釣られて笑っていた。手袋を通して、彼の手は温かく、大きかった。

満員の式場で、臆面もなく堂々と。瞳が「愛してる」と大声で叫んでくれていた。

### MILKY FORTUNE 3 (後書き)

この後は披露宴やら二次会やら、いろいろ賑やかなのでしようが、「phantom honeymoon」はこれにて最終話です！最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

明日から数日は、短編「過ぎゆく夏の日」を更新いたします。本編の続きである「tender words」は、短編更新後に開始、また適宜予告いたします。

ブログ「月の鏡」で裏話、キャラ設定、キャラのヒトリゴトなど公開しています。小説トップのバナーより飛べますので、よろしかったらお越しく下さいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8781g/>

---

phantom honeymoon

2010年10月8日15時01分発行